

(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第59集

大阪府池田市所在

# 住吉宮の前遺跡

—大阪国際空港給水設備工事に伴う発掘調査報告書—

2001年1月

(財)大阪府文化財調査研究センター

# 序 文

住吉宮の前遺跡は、大阪国際空港の北側に広がる遺跡です。

遺跡の東方数百mには弥生時代の大集落として著名な宮の前遺跡が広がっており、また律令制下においては、旧山陽道がすぐ北側を東西に走るなど、住吉宮の前遺跡の周辺は猪名川東岸地域の原始、古代史を語るうえで、避けてとおることができない地といっても過言ではありません。

住吉宮の前遺跡の存在が知られるようになったのはそう古いことではなく、かつて土器が出土した事実に基づいて、1981年の『池田市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』に掲載されたのが初めです。その後今日まで調査が行われることはなく、遺跡の実態は長らく不明でした。

このたび遺跡隣接地において、大阪国際空港内へ供給する給水設備工事が実施されることになり、それに先立つ大阪府教育委員会による試掘調査の結果、遺物包含層、遺構が良好に遺存していることが判明しました。

以上の経過を踏まえて、当センターが発掘調査を実施し、約650㎡という比較的小規模な調査にも関わらず、庄内式期の竪穴住居をはじめ、古墳時代後期の自然流路、奈良時代の井戸・土器棺など、各時期の豊富な資料を得ることができました。今回の調査成果が地域の歴史像をより豊かに復元する一助となればこれに勝る喜びはありません。

調査に際しては大阪府教育委員会文化財保護課、運輸省大阪航空局をはじめ地元関係者各位には、多大なご指導・ご協力をいただきました。記して感謝するとともに、今後とも当センターの事業に一層のご支援を賜るようお願いする次第です。

2001年1月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター  
理事長 水野正好





# 例 言

1. 本書は、池田市空港2丁目所在、住吉宮の前遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、大阪国際空港給水設備工事に伴い、運輸省大阪航空局の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、財団法人大阪府文化財調査研究センターが実施した。
3. 調査期間ならびに調査担当者は以下のとおりである。  
調査期間 2000年4月18日～2000年7月31日  
調査担当 北部調査事務所 所長 小野久隆、調査第1係 係長 阪田育功、同技師 駒井正明、  
山元 建、同専門調査員 鈴木雅美  
続く報告書作成事業は、2001年1月31日まで行った。
4. 調査中に採集した土層の花粉分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に、須恵器の胎土分析は(株)第四紀地質研究所にそれぞれ委託した。
5. 調査・整理にあたっては、運輸省大阪航空局をはじめ、以下の方々からご教示を賜った。記して謝意を表する(五十音順、敬称略)。  
青木勘時、浅田尚子、荒木幸治、井本伸廣、大下 明、亀島重則、清水 篤、角南聡一郎、田上雅則、田中晋作、辻 康男、中西正和、西村公助、服部聡志、濱野俊一、古川久雄、森岡秀人、柳本照男
6. 調査・整理にあたっては以下の方々の参加・協力を得た。  
(現地調査) 中西龍太、樋口玲子、平田麻希  
(整理作業) 中西龍太、二宮栄子、樋口玲子、平田麻希、八十千里
7. 現場写真は調査担当者が、遺物写真は上野貞子(北部調査事務所)がそれぞれ撮影した。
8. 本書の執筆は各調査担当者が行い、文責は目次及び一部文末に示した。編集実務は山元が行った。
9. 調査・整理の過程で作成した図面類・写真、出土遺物などは、(財)大阪府文化財調査研究センター北部調査事務所で保管している。

## 凡 例

1. 本書に掲載した遺構実測図、その他の図に付された北方位は、すべて国土座標第VI座標系の座標北を示す。図中の座標値は、km、mを省略した。
2. 本書で用いる標高はすべて東京湾平均海面で、図中では原則的に T.P.+ を省略した。
3. 土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』1997年版を用いた。
4. 本書では、本文・挿図・写真図版の遺構・遺物番号はすべて一致する。
5. 土器は縮尺 1/4、石器のうち石庖丁・石鏃は 2/3、その他石製品及び鉄器は 1/3 で掲載した。
6. 土器の断面は、須恵器を黒塗り、弥生土器・土師器を白抜きとし、瓦器にはスクリーントーンを貼った。
7. 打製石器の黒塗り部分は新欠を表わす。
8. 第 1、2、31、32図は建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の 2 万 5 千分の 1 地形図を複製したものである。(承認番号 平12近複、第263号-2)

# 目 次

序文	
例言	
凡例	
第Ⅰ章 経過	…………… (阪田) …… 1
第Ⅱ章 位置と環境	
第1節 住吉宮の前遺跡をめぐる歴史的・地理的環境	…………… (山元) …… 2
第2節 住吉宮の前遺跡周辺の既往調査	…………… (鈴木) …… 8
第Ⅲ章 調査・整理の方法	…………… (山元) …… 15
第Ⅳ章 調査成果	
第1節 基本層序	…………… (山元) …… 17
第2節 検出遺構	…………… (山元・駒井) …… 19
第3節 出土遺物	…………… (鈴木・山元) …… 30
第Ⅴ章 分析	
第1節 花粉分析	…………… (パリノ・サーヴェイ株式会社) …… 45
第2節 胎土分析	…………… (株)第四紀地質研究所) …… 50
第Ⅵ章 まとめ	
第1節 住吉宮の前遺跡の時間的変遷	…………… (山元) …… 60
第2節 住吉宮の前遺跡出土の須恵器について	…………… (山元) …… 60
第3節 奈良時代における千里丘陵西端部の集落分布について	…………… (鈴木) …… 63

# 挿 図 目 次

第1図 調査地位置図	…………… 1	第13図 下面遺構全体図	…………… 24
第2図 周辺の遺跡分布図	…………… 3	第14図 竪穴住居44実測図	…………… 25
第3図 豊嶋郡全体図	…………… 7	第15図 ピット36実測図	…………… 27
第4図 住吉宮の前遺跡周辺地形図	…………… 9	第16図 出土遺物実測図(1)	…………… 31
第5図 調査地周辺既往調査位置図	…………… 11	第17図 出土遺物実測図(2)	…………… 32
第6図 調査区地区割図	…………… 16	第18図 出土遺物実測図(3)	…………… 33
第7図 基本層序模式図	…………… 17	第19図 出土遺物実測図(4)	…………… 36
第8図 上面遺構全体図	…………… 18	第20図 出土遺物実測図(5)	…………… 37
第9図 中面遺構全体図	…………… 20	第21図 出土遺物実測図(6)	…………… 38
第10図 井戸9実測図	…………… 21	第22図 花粉分析試料採取地点	…………… 47
第11図 溝7断面図	…………… 22	第23図 ダイアグラム	…………… 52
第12図 土器棺11・45実測図	…………… 23	第24図 Qt-P1 相関図	…………… 53

第25図	SiO <sub>2</sub> -Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 図(1)	54	第29図	遺構変遷図	61
第26図	SiO <sub>2</sub> -Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 図(2)	55	第30図	桜井谷窯跡群	62
第27図	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> -MgO 図	56	第31図	遺構・遺物分布図(1)	64
第28図	K <sub>2</sub> O-CaO 図	57	第32図	遺構・遺物分布図(2)	65

## 写真目次

写真1	珪藻化石・花粉分析プレパラート内の状況	48
-----	---------------------	----

## 表目次

第1表	住吉宮の前遺跡 周辺既往調査一覧表	12	第6表	分析試料一覧	45
第2表	検出遺構一覧表	28	第7表	珪藻分析結果	46
第3表	遺構出土遺物一覧表	30	第8表	花粉分析結果	46
第4表	包含層出土遺物一覧表	36	第9表	胎土性状表	51
第5表	出土遺物観察表	39	第10表	化学分析表	51
			第11表	土器分類	51

## 図版目次

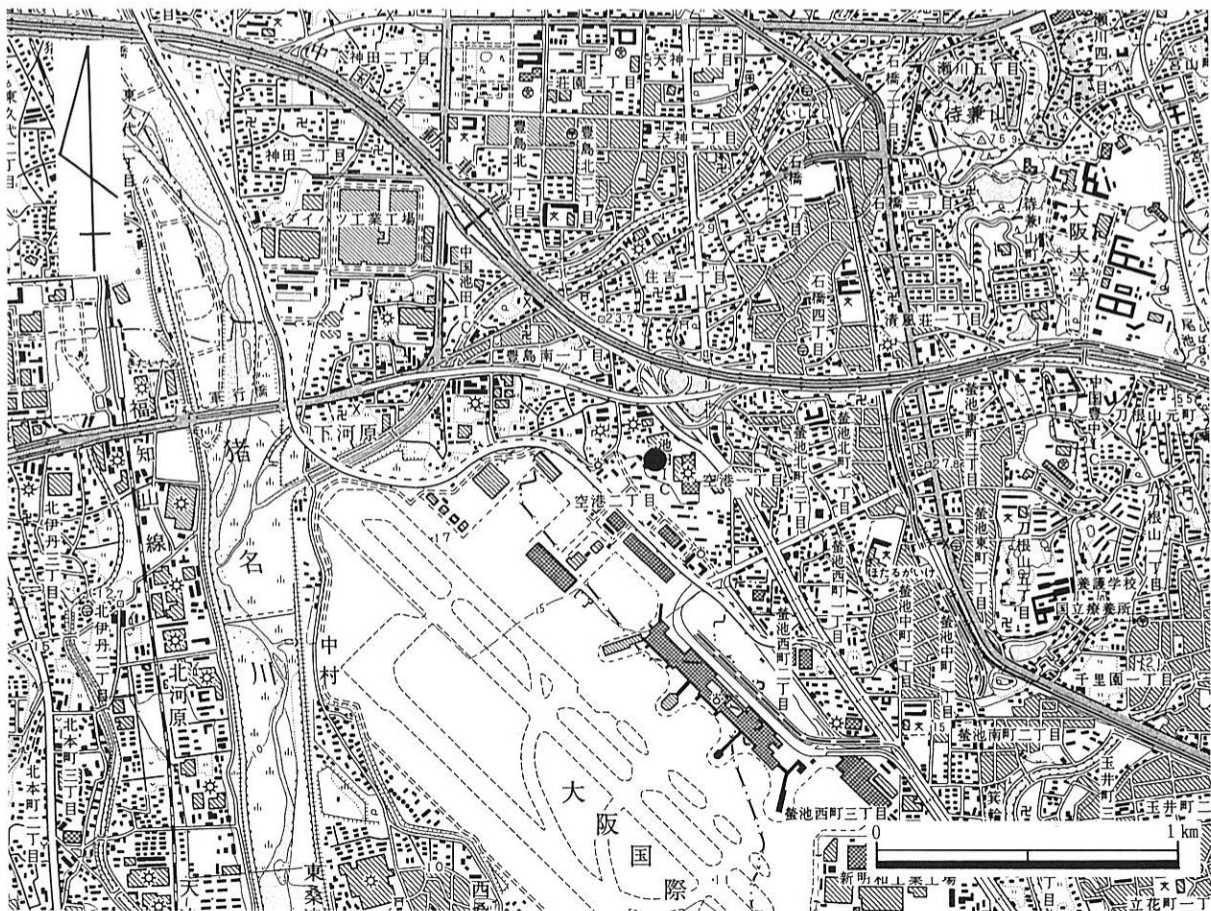
図版1	航空写真	図版6	出土土器(2)
図版2	調査区全景	図版7	出土土器(3)
図版3	検出遺構(1)	図版8	出土土器(4)
図版4	検出遺構(2)	図版9	出土土器(5)
図版5	出土土器(1)	図版10	出土石製品・鉄器

# 第I章 経 過

運輸省大阪航空局は、大阪国際空港内に給水設備工事を実施することとなり、当該事業における埋蔵文化財の取り扱いについて、大阪府教育委員会に協議があった。大阪府教育委員会文化財保護課では、事業計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地である住吉宮の前遺跡に近接しているため、試掘調査が必要であることを回答し、事業者の同意を得て試掘調査を実施した。

試掘調査は、大阪府教育委員会文化財保護課により、2000年1月に実施された。試掘調査の結果、2層の遺物包含層があり、地山上面で柱穴が検出された。これに基づき、大阪府教育委員会は運輸省大阪航空局長に対し、工事に先立ち発掘調査が必要な旨を回答した。また、運輸省大阪航空局長は池田市教育委員会を通じて文化庁長官に対し、当該事業地内で遺跡が発見されたことを通知し、住吉宮の前遺跡の範囲が拡大されたことが周知された。

発掘調査は、大阪府教育委員会からの指示を受けて、財団法人大阪府文化財調査研究センターが実施することとなった。現地発掘調査は、2000年4月から7月まで実施し、引き続き、遺物整理・報告書作成事業を2001年1月まで実施した。



第1図 調査地位置図

## 第Ⅱ章 位置と環境

### 第1節 住吉宮の前遺跡をめぐる歴史的・地理的環境

住吉宮の前遺跡は現在の行政区画では大阪府池田市の最南部、空港2丁目にあたり、後述するように律令下の摂津国豊嶋郡豊嶋郷に含まれると推定される。郡名と郷名が一致し、旧山陽道が東西に走る当地は律令下における豊嶋郡の中心であったと考えられ、豊嶋郡衙もその所在地はまだ確認されていないが、付近にあった可能性が高い。また弥生時代以降の集落や古墳の分布をみても現在の池田市南部から豊中市北部地域が古代の猪名川東岸地域の中心であったことは明らかである。したがって以下ではこの池田市南部から豊中市北部を中心に、旧豊嶋郡域（現在の池田市全域、箕面・豊中両市のほぼ全域、吹田市南西部）の地理的環境、歴史的環境を概観してみたい。

#### （1）地理的環境（第3図）

豊嶋郡は南北20km、東西8kmの南北に長い郡域を有する。その北部は老ノ坂山地の一角を占める五月山山麓が、中東部は千里丘陵が占め、中西部から南部にかけては郡域の西端、南端を画する猪名川、神崎川の堆積によって形成された沖積平野（西摂平野）が広がっており、比較的变化に富んだ地勢を呈している。さらに北部の山地、あるいは千里丘陵に源を発する久安寺川、箕面川、千里川、天竺川、高川、糸田川などの中規模の河川が流域に河岸段丘、扇状地、自然堤防を発達させながら南流し、最終的には猪名川、神崎川に合流していく。千里丘陵の南西部に広がる豊中台地も本来は千里川によって形成された中・低位段丘面と考えられている。

第2節で詳論するが、住吉宮の前遺跡は箕面川によって形成された低位段丘面（石橋段丘）から沖積平野へ移行する傾斜面に位置している。

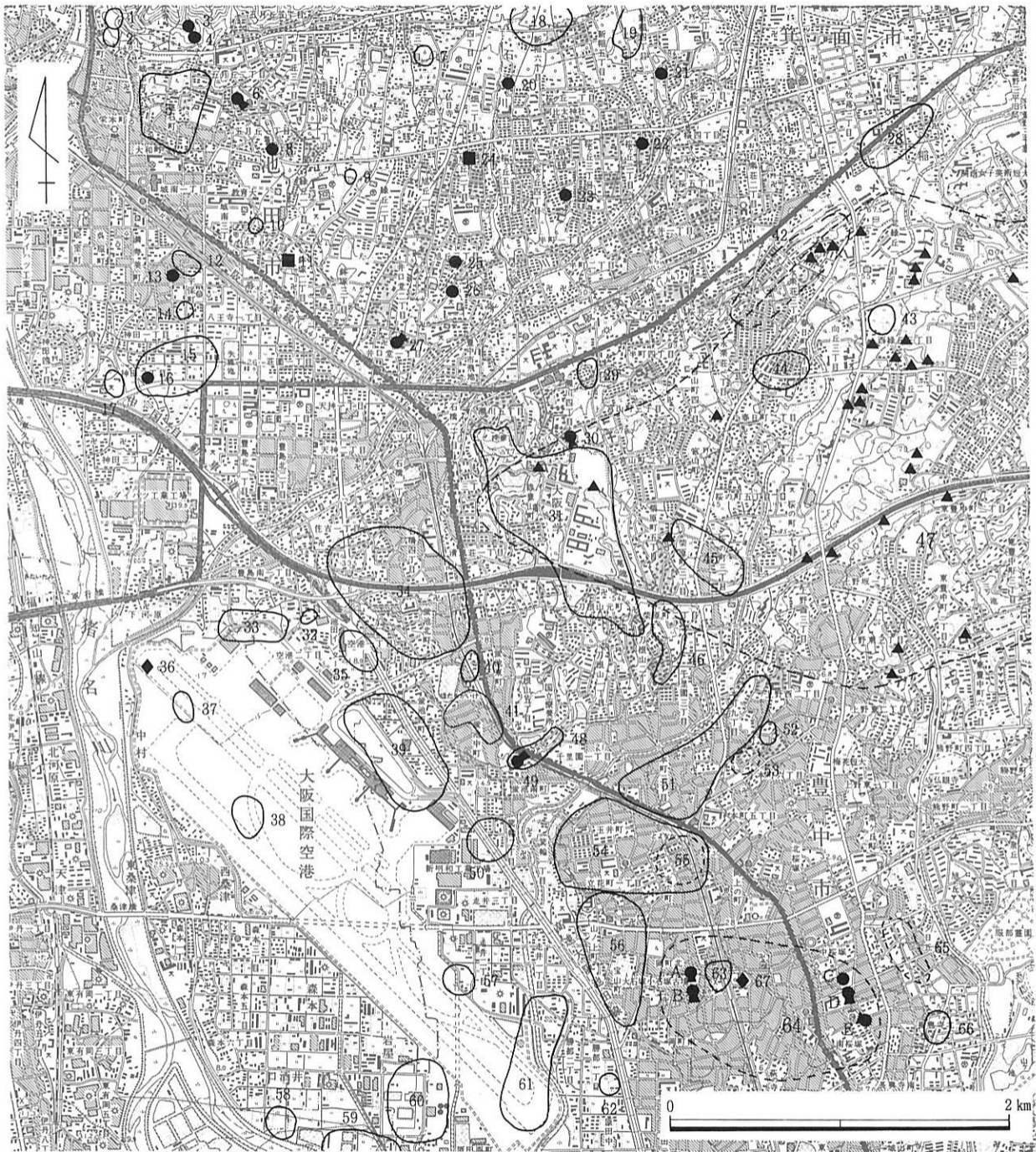
#### （2）歴史的環境（第2、3図）

**旧石器時代** 池田市伊居太神社参道・宮の前・宮の前西、豊中市蛍池西・箕輪・柴原・大塚古墳（墳丘内）、箕面市新稲・桜池・瀬川・稲・稲田・芝・西の口の各遺跡からナイフ形石器を中心とする石器が出土しているが、大半は2次堆積土中あるいは地表面から出土したものであり、原位置を留めていたものは少ない。ただ遺跡の分布には千里丘陵、豊中台地の縁辺にやや集中する傾向が認めらる。

**縄文時代** 縄文時代草創期、早期の土器は豊嶋郡域では確認されていない。ただ草創期の遺物とみられる有茎尖頭器は池田市畑、豊中市野畑春日町遺跡、箕面市奥遺跡・粟生間谷遺跡などで確認されている。また押型文土器期の後半に特徴的な異形部分磨製石器（トロトロ石器）が豊中市新免遺跡、箕面市新稲遺跡で出土している。

縄文土器の出土する遺跡は千里丘陵部にやや集中する傾向があり、箕面市瀬川遺跡（前期中葉・後期後葉・晩期末）・稲遺跡（前期中葉）、豊中市野畑春日町遺跡（中期前葉・晩期後葉）・野畑遺跡（中期末～後期前葉）・内田遺跡（後期中葉）・柴原遺跡（晩期末）・新免遺跡（同）・山ノ上遺跡（同）が知られ、大半は千里川を臨む段丘端部に位置している。なお瀬川遺跡で採集された、南海産のイモガイの輪切りを模したものとみられる「の」字状石製品は、全国でも7例しか出土例がないものである。





- |                |                  |             |             |               |
|----------------|------------------|-------------|-------------|---------------|
| 1. 五月山公園遺跡     | 16. 脇塚古墳         | 31. 待兼山遺跡   | 46. 柴原遺跡    | 61. 勝部遺跡      |
| 2. 伊古太神社境内遺跡   | 17. 門田遺跡         | 32. 住吉宮の前遺跡 | 47. 桜井谷窯跡群  | 62. 勝部東遺跡     |
| 3. 娘三堂古墳       | 18. 新稲遺跡         | 33. 豊島南遺跡   | 48. 南刀根山遺跡  | 63. 岡町西遺跡     |
| 4. 娘三堂南古墳      | 19. 新稲遺跡         | 34. 宮の前遺跡   | 49. 御神山古墳   | 64. 桜塚古墳群     |
| 5. 池田城跡(城山遺跡)  | 20. 髪切塚古墳        | 35. 宮の前西遺跡  | 50. 箕輪遺跡    | A. 小石塚古墳      |
| 6. 茶臼山古墳       | 21. 稲荷社古墳        | 36. 中村銅鐸出土地 | 51. 本町遺跡    | B. 大石塚古墳      |
| 7. 京中遺跡        | 22. 桜古墳          | 37. 大阪空港A遺跡 | 52. 金寺山廃寺   | C. 大塚古墳       |
| 8. 五月丘古墳       | 23. 中尾塚古墳        | 38. 大阪空港B遺跡 | 53. 新免宮山古墳群 | D. 御獅子塚古墳     |
| 9. 夏湖池遺跡       | 24. 野田塚古墳        | 39. 蛭池西遺跡   | 54. 新免遺跡    | E. 南天平塚古墳     |
| 10. 鉢塚北遺跡      | 25. 狐塚古墳         | 40. 蛭池東遺跡   | 55. 新免古墳群   | 65. 下原窯跡群     |
| 11. 鉢塚古墳       | 26. 石橋古墳         | 41. 蛭池遺跡    | 56. 山ノ上遺跡   | 66. 長興寺遺跡     |
| 12. 禪城寺遺跡      | 27. 二子塚古墳(稲荷山古墳) | 42. 太鼓塚古墳群  | 57. 走井遺跡    | 67. 原田神社銅鐸出土地 |
| 13. 宇保猪名津彦神社古墳 | 28. 稲遺跡          | 43. 野畑遺跡    | 58. 口酒井遺跡   |               |
| 14. 宇保遺跡       | 29. 瀬川遺跡         | 44. 野畑春日町遺跡 | 59. 田能遺跡    |               |
| 15. 神田北遺跡      | 30. 待兼山古墳        | 45. 内田遺跡    | 60. 原田西遺跡   |               |

第2図 周辺の遺跡分布図



猪名川沿いの平野部においても豊中市穂積遺跡（中期）・原田西遺跡（同）、伊丹市口酒井遺跡（同）・大阪空港A地点遺跡（後期前葉）・池田市豊島南遺跡（同）が知られている。特に穂積遺跡はハマグリ、アサリなどの貝を生息していたままの状態を確認し、当時の海岸線を復元できたほか、土錘に転用した土器片も出土している。池田市伊居太神社参道・京中・神田北・古江の各遺跡、あるいは箕面市新稲遺跡からは石鏃、石匙などの石器が採集されており、五月山の山麓に縄文人の狩猟場が広がっていたことが窺える。このような遺跡の分布からは、千里丘陵に拠点を置きつつも、収穫を求めてときには北方の山麓や南方の平野部へと移動した縄文人の生活が復元できそうである。

晩期後葉～末（凸帯文期）の遺跡は豊中市小曾根遺跡のように平野部、もしくは新免・山ノ上遺跡のように平野を臨む台地縁辺部に立地する遺跡が多く、水稻耕作の開始と結んで理解されることが多かった。ただ近年豊中市野畑春日町・柴原遺跡あるいは池田市横枕遺跡などのように丘陵内での遺跡の確認が相次ぎいでおり、移行期の状況がより複雑なものであったことが知られるようになってきた。

なお池田市宮の前遺跡から石棒が、箕面市白島遺跡から土偶が、さらに伊丹市口酒井遺跡からはその両者が出土しており、いずれも晩期のものと想定されている。

**弥生時代** 水稻耕作を基礎とする弥生時代になると中小の河川沿いに遺跡が展開する。

箕面川下流域においては前期にまず伊丹市小阪田・空港Bなどの遺跡が出現する。中期前葉から中葉にかけては池田市宮の前遺跡（豊中市側は蛭池北遺跡）がその規模を拡大し、方形周溝墓28基、竪穴住居14基などを確認しているが、中期後半に衰退する。かわって池田市豊島南遺跡が出現し、方形周溝墓を2基確認している。後期の遺跡としては後期前葉を中心とする伊丹市空港A遺跡・池田市住吉宮の前遺跡が知られ、宮の前遺跡においてもごく少量ではあるが土器の出土をみる。豊中市蛭池西遺跡においては後期の溝を多く検出しており、周辺に水田域の広がっていた可能性が高い。なお後期には池田市二子塚古墳下層遺跡・京中遺跡など箕面川（水系）の中流域にも小規模な遺跡が確認されており、下流域の諸遺跡の分村、あるいは移動の結果と考えられよう。

千里川流域においては前期の遺跡としては豊中市山ノ上・勝部・野畑春日町の各遺跡が知られる。中期になると勝部遺跡が墓域として後葉まで存続し、中期前葉の方形周溝墓を新免遺跡で検出している。また箕輪遺跡では中期中葉の竪穴住居、掘立柱建物を確認している。中期後葉には新免遺跡がその規模を拡大し、多くの方形周溝墓、竪穴住居の他、人面付土製品などの吉備地方との交流を示す遺物も出土している。その後新免遺跡は規模をやや縮小しつつも後期に続いていく。曾根遺跡は中期の遺構、遺物も確認しているが、その中心は後期のようなのである。野畑春日町遺跡においても中期前葉、同後葉の土器を確認しており、断続的に集落が営まれたようである。また柴原遺跡でも後期の土器が出土している。なお兵庫県伊丹市口酒井遺跡（前期）、同尼崎市田能遺跡（前～後期）あるいは伊丹、豊中両市にまたがる原田西遺跡（中、後期）などの千里川と猪名川の合流点付近の低地に広がる遺跡も上記の諸遺跡と全く無関係ではなかったであろう。

天竺川・高川流域においては、前期に始まり中期中葉の方形周溝墓を確認している豊中市小曾根遺跡、中期後半の若竹町遺跡が知られ、後期には吹田市蔵人遺跡が出現する。吹田市域を流れる糸田川流域においては前期から後期までほぼ継続的に存続した垂水遺跡、後期から庄内期に続く垂水南、五反島の両遺跡が知られる。また池田市北部の久安寺川流域には木部遺跡（前期～後期）が知られている。

このように豊嶋郡域における弥生時代の遺跡は、久安寺川、箕面川、千里川、天竺川、高川、糸田川など中規模の河川の流域ごとに一時期に一二度の集落が展開していた状況をもてとることができよう。

なお池田市中西部においても現在神田流路と呼称されている小規模な河川が南流しており、流域に小規模な低地（猪名川低地）が広がっている。その低地を臨む低位段丘（宇保段丘）あるいは扇状地上に城山遺跡（中期前葉～後期）・五月山公園遺跡（中・後期）・夏湖池遺跡（中期）・神田北遺跡（後期）・横枕遺跡（同）・鉢塚北遺跡（同）・伊居太神社参道遺跡（同）などの遺跡が知られている。ただこの地域は上記諸地域に比べて、低地（可耕地）の面積あるいは用水確保などの条件面で劣っている観は否めず、それが遺跡規模にも反映しているのか、直径600mの範囲に土器の散布の認められる神田北遺跡を除くといずれの遺跡も小規模である。なお五月山の頂上近く、標高200mの高所に位置する池田市愛宕神社遺跡（中・後期）は高地性集落の一つとして捉えることが可能である。

中期までの遺跡の知られない豊中市南部の沖積平野部においても、後期には穂積・服部などの遺跡が出現する。千里川あるいは天竺川・高川流域の集落の分村によるものとみられるが、その背景には農具の鉄器化などによる耕地の拡大があったことは間違いなからう。

金属器は、銅鐸が豊中市原田神社（古段階、2個）、伊丹市中村（古段階）、箕面市如意谷（新段階）、豊中市利倉（新段階、破片）・利倉南遺跡（新段階、破片）から、小形仿製鏡が豊中市山ノ上・利倉南遺跡から出土している。また穂積遺跡では銅鏃の未製品が出土しており、遺跡内で金属器生産が行われていた可能性が高い。

**古墳時代** 前期古墳は池田市の五月山南麓の池田茶臼山古墳・娯三堂古墳、豊中市の千里丘陵北西端部の待兼山古墳、千里川を挟む形で位置する御神山古墳と新免上佃古墳、豊中台地西端の桜塚古墳群中の大石塚・小石塚古墳が知られる。娯三堂古墳（円墳）、御神山古墳（円墳か前方後円墳）、新免上佃古墳（詳細不明）の他は前方後円墳である。なお池田市古江町横山から三角縁神獸鏡が出土し、吹田市千里山西では竪穴式石室の石材とみられる赤色顔料の塗布された板石が採集されていることから、久安寺川流域と天竺川・高川流域（あるいは糸田川流域）にも前期古墳の存在したことが窺える。

中期古墳は約40基からなる桜塚古墳群に収斂するようであり、大塚・御獅子塚・北天平塚・南天平塚古墳が、大石塚・小石塚古墳以降の盟主墳と考えられる。これらの古墳は粘土槨を中心とした複数埋葬と鉄製武器を多く副葬することで知られている。なお桜塚古墳群の東方には梅塚古墳（前方後円墳）が単独で築かれており、天竺川・高川流域を基盤とした首長の墳墓かもしれない。

中期末から後期初頭にかけては帆立貝式前方後円墳を含む豊中市新免古墳群や穂積古墳が築造され、さらに同後半から末にかけての猪名川東岸における大規模墳は池田市域に出現する。横穴式石室を有する全長45mの前方後円墳、二子塚古墳（稲荷山古墳）と全長14.8mの巨大な横穴式石室を有する上円下方墳、鉢塚古墳である。また宇保猪名津彦神社古墳は直径25m以上の円墳であった推定され、両墳に次ぐ盟主墳の可能性もある。

後期後半から終末期にかけての中小規模の古墳は池田、箕面市域では池田市娯三堂南・狐塚・野田塚・五月丘・石橋・脇塚・城山・紅葉・善海古墳、箕面市桜・新稲・中尾塚古墳などが、豊中市の千里川流域では太鼓塚古墳群、宮山古墳群が知られている。これらの池田・箕面市域と豊中市域の中小の後期古墳はいずれも横穴式石室を内部主体とする点は共通するが、豊中市域のものが古墳群を形成するのに対し、池田・箕面市域のものは単独墳が多いこと、豊中市域で盛行する須恵質陶棺が池田・箕面市域では五月丘古墳以外では認められないなどの相違点がある。

豊中市から吹田市にかけての千里丘陵には古墳時代から奈良時代にかけての須恵器窯が築かれている（千里窯跡群）。初期須恵器の窯である吹田32、54号窯を除くと、中期後半にまず千里川流域の桜井谷

(豊中市)においてその生産が始まり、中期末から後期前葉に最盛期を迎えた後、東部の吹田市域(嶋下郡)にその中心は移っていく。ただいずれにおいても後期末には急激に窯の数が減じ、奈良時代の窯は桜井谷2-27号窯(緑丘窯)、同2-19-2号窯、吹田9号窯が知られるのみである。なお先に述べた陶棺も桜井谷で焼かれたものである。

古墳時代の集落は、箕面川流域では池田市豊島南・宮の前、伊丹市大阪空港A遺跡などが、豊中市域の千里川流域では走井・山ノ上・新免・本町・蛍池東・蛍池西・柴原・内田・野畑春日町などの遺跡が知られている。また豊中・吹田両市の南部に広がる沖積平野部では豊中市利倉西・利倉・服部・庄内・豊島北、吹田市蔵人遺跡など古墳時代初頭(庄内期)に出現あるいは拡大する遺跡が確認されており、弥生時代後期以来の集落の増加傾向が引き続き窺える。

蛍池東遺跡では中期の大規模な掘立柱建物を最大12棟確認している。また新免、柴原の両遺跡からは大量の須恵器の不良品が出土しており、須恵器の選別、搬出に関わる遺跡であることは明らかで、内田遺跡も同様の性格を有する可能性がある。

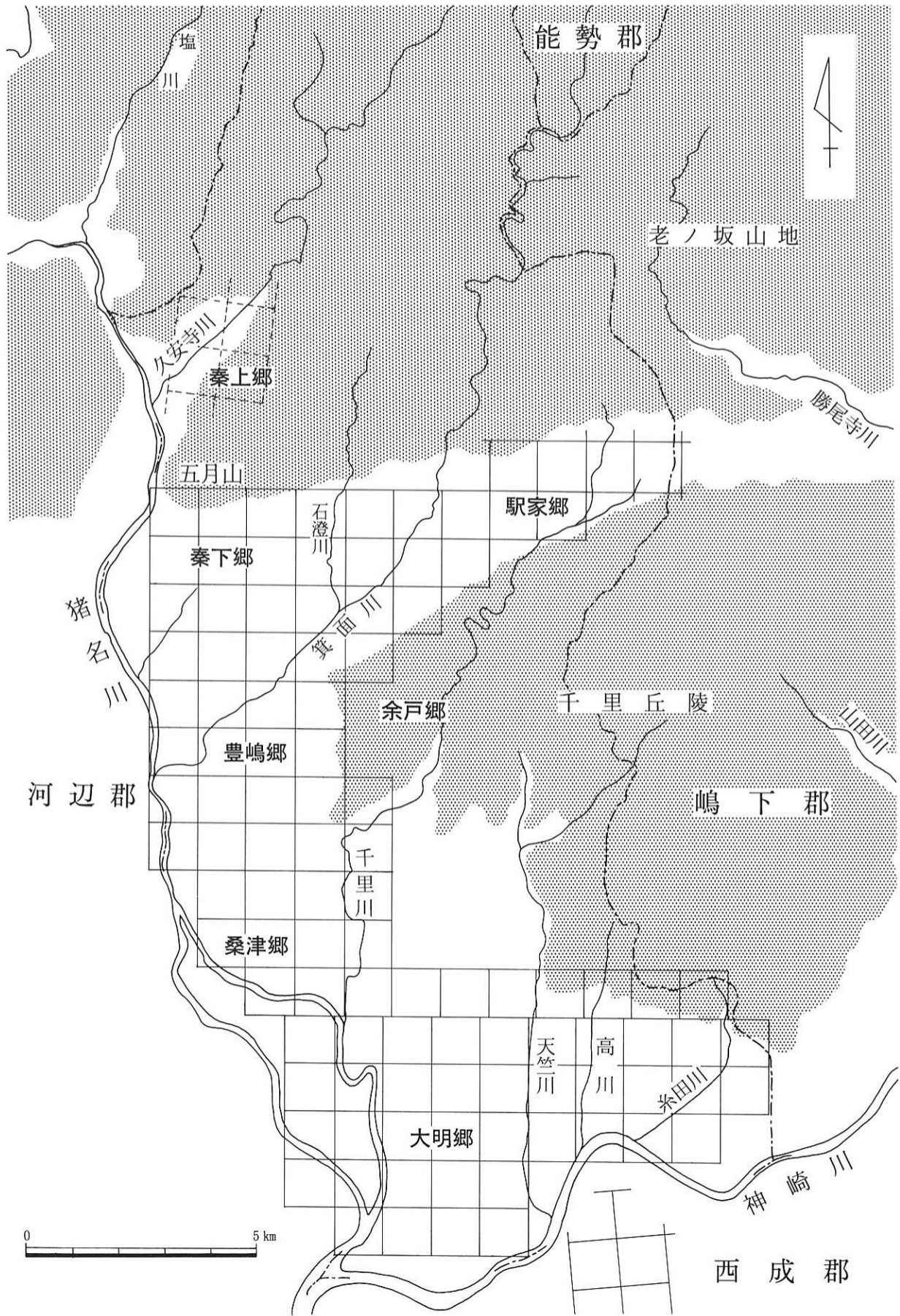
さて以上の古墳、集落の動向を畿内政権との関係で考えてみる。前期古墳は豊嶋郡内のほぼ全域に散在することから、畿内政権が郡内の各首長を均一に掌握しようとしていたことは明らかである。またこれらの首長層が弥生時代以来の基盤を受け継いだ勢力であったことは、その分布が弥生時代の集落分布同様、中規模の河川沿いに展開していることから窺い知ることができる。中期においては桜塚古墳群のみが突出し、その副葬品に鉄製武器の多いことを重視するならば、その被葬者が畿内政権の軍事活動の一翼と担っていたのは間違いなからう。同時期の蛍池東遺跡の大規模な倉庫群もそれらの活動に伴うものと考えられる。中期末から後期初頭にかけて築造された新免古墳群は、新免遺跡が須恵器の選別、搬出に関与することによって規模を拡大した時期と全く軌を一にして築造されていることから、須恵器生産に深く関与した首長の墳墓であることは間違いない。このように新免古墳群と桜塚古墳群は系譜上の連続性はよくわからないものの、両者の畿内政権から担わされた職掌に関しては歴然とした違いが認められる。その後池田市域に現れた大規模墳は、当時勢力を伸ばしつつあった秦氏の墳墓とみられている。

**飛鳥～奈良時代** 古墳の消滅と相前後して古代寺院が建立される。旧豊嶋郡域では豊中市本町3丁目の金金山廃寺が知られ、山田寺系の瓦が出土している。また池田市畑5丁目においても白鳳～奈良期の古瓦の出土する地点がある(石積廃寺)。前者は豊嶋連の、後者は秦氏の氏寺と推定されている。

律令期に入ると現在の池田、箕面、豊中市域の大半は摂津国豊嶋郡に編入される。10世紀前半に作られた『和名類聚抄』は郡内に7つの郷のあったことを記している。秦上郷(池田市北部か)、秦下郷(同中部)、豊嶋郷(同南部)、駅家郷(箕面市中部)、余戸郷(豊中市北部か)、桑津郷(豊中市中部)、大明郷(豊中市南部)である。

豊嶋郡内の条里制は大きく南北両条が認められる。北条は豊中市中・北部の沖積平野部から池田市中・南部、箕面市にかけて、南条は兵庫県尼崎市の北東部から豊中市南部、さらに吹田市の南西部にかけて認められる。両条はともにほぼ南北・東西の方位をとる正方位条里であるが、里境の南北線がややずれ、里の数え方に差が認められる(南条では条を東から西に数え、北条では南から北に数える)。

なお奈良時代の遺跡は池田市宮の前遺跡・住吉宮の前遺跡、豊中市蛍池遺跡・蛍池東遺跡・曾根遺跡・柴原遺跡・上津島南遺跡などが知られ、西摂平野を臨む段丘や丘陵の端部にやや集中する傾向が認められる。



第3図 豊嶋郡全体図



## 第2節 住吉宮の前遺跡周辺の既往調査

はじめに 住吉宮の前遺跡は『池田市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』（1981）に、池田市住吉2丁目周辺に散布地として周知されている遺跡である。しかし、過去に発掘調査は行われておらず、今回の調査が初めてとなる。

**当調査地周辺の地勢** 東方は待兼山（標高77.3m）から西に派生する標高40～70m前後の丘陵と、25～40mほどのなだらかな低位段丘が広がり、調査地約300m東には標高差10mほどの千里丘陵西端の段丘崖が迫る。北方には五月山丘陵から南方に派生する緩やかな低位段丘が展開する。北摂に源を発する箕面川が猪名川の形成した沖積地に北東から流下し、調査地よりも北西に小規模な扇状地を形成し、部分的には扇状地を開析した低位段丘を形成する。調査地の南西には猪名川の形成した沖積平野が4～20mほどの標高で下流域に向け展開する。当調査地は扇状地末端近くの低位段丘から沖積低地に変わる傾斜地の低位段丘上にあり、標高は20mほどである（第4図参照）。

**当遺跡近隣の遺跡** 西方には縄文時代～中世までの集落跡である豊島南遺跡（池田市）、北から北東にかけては弥生時代中期の集落跡や方形周溝墓で有名な宮の前（蛭池北）遺跡（池田市・豊中市）、東南方向には弥生時代～古墳時代の土器が散布している宮の前西遺跡（池田市）、南西方向には1937年の大阪第二空港建設時に縄文時代後期・弥生時代後期から古墳時代後期の遺物が出土した大阪空港 A 遺跡（伊丹市）などがある<sup>1)</sup>。（第2図参照）

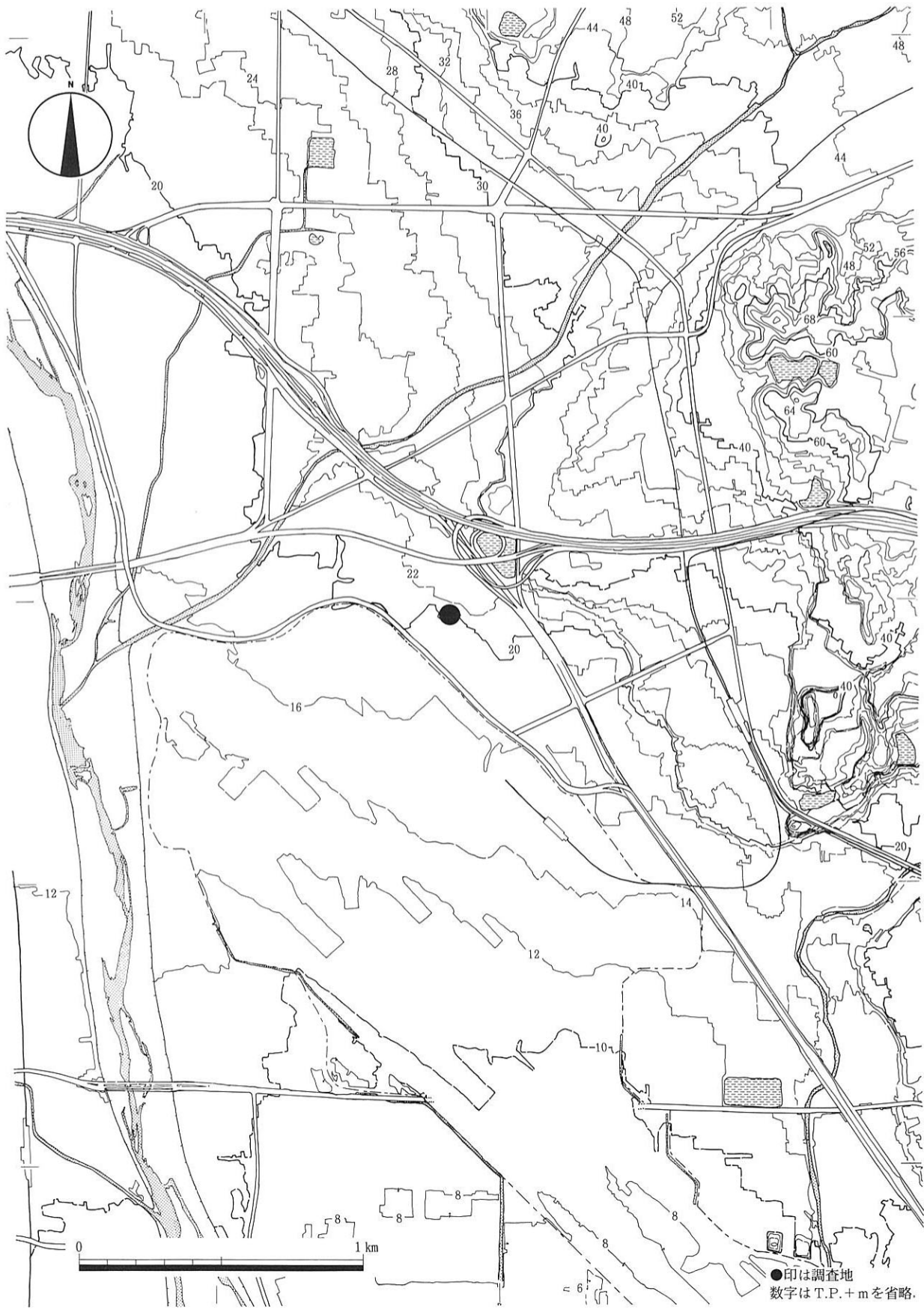
調査地の西方150mには豊島南遺跡（猪名川・箕面川合流点から約800m東）が、東南250mには宮の前西遺跡が当遺跡とほぼ同じ標高で立地し、北東350mの台地上及び縁辺部には宮の前遺跡が広がる。当遺跡を考える上で、近接する遺跡との関連は避けられず、一地域として捉える必要がある。ここではその3遺跡の既往の調査についてふれておきたい。

**豊島南遺跡** 1980～81年の池田市教育委員会の分布調査で確認され、1985年より調査が6回ほど行われている。中でも阪神高速道路池田線延伸工事に伴う2次調査は1986～1991年の5年に及ぶ大規模調査である。弥生時代中期後半（IV様式）の方形周溝墓2基が発見されているが、後述の宮の前遺跡を中心とした周辺の小集落の可能性が高い。また、庄内式期（庄内式併行期 以下庄内期と略す）の溝1条が確認されており、多くのこの時期の土器とともに在地産胎土の庄内模倣甕が出土する。

特に生駒西麓産胎土の中河内産庄内甕は、豊中市服部遺跡や穂積遺跡や利倉西遺跡などの猪名川下流域の集落遺跡を中心に出土する。それに対し豊島南遺跡出土の庄内甕は中河内産のものは破片1点に過ぎず、弥生時代からの系譜を引く伝統的な第V様式系の甕と庄内模倣甕でほとんど二分する。このようなことは大阪空港 A 遺跡の庄内期の甕についてもいえる。また、川西市栄根遺跡や小戸遺跡などを中心とする猪名川中流域の他集落においても似通った傾向がみられ、中河内産庄内甕が搬入される集落はわずかである。つまり、モノの動きが著しい庄内期において、猪名川水系における中河内との交流は同中流域では直接的・積極的に行われず、同下流域を介して行われていたことが窺えよう。なお、遺跡自体は古墳時代中期が最も集落規模を拡大している<sup>2)</sup>。

**宮の前西遺跡** 1990年に工事中に発見され、弥生時代～古墳時代の遺物が採集された遺跡である。調査は1992年の1次調査のみで、ピット1基と古墳時代の須恵器小片1点が出土しただけであり、遺跡の詳細な内容は不明である。今後の調査に期待したい。

**宮の前遺跡** 1969年の宮之前遺跡調査会による調査や1989年の蛭池北遺跡12次調査等でも知られるよ



第4図 住吉宮の前遺跡周辺地形図

うに、弥生時代中期の大規模集落として学史的にも著名である。調査は1969年の調査以来、50回以上を数える。旧石器から中世までの複合遺跡であり、遺跡としてのピークは2時期、弥生時代中期と奈良時代にある。方形周溝墓・土壙墓・土器棺・住居跡など多数発見した弥生時代中期を最盛期とするが、後期（V様式）には廃絶する。その後、古墳時代後期に再び集落活動がみられるがその規模は小さい。奈良時代では弥生時代中期の規模ほどではないが、多数の掘立柱建物を検出する。掘立柱建物の方向は、宮の前遺跡1・26次調査や蛭池北遺跡1・9・12次調査にみられるように、南北方向のものと軸が地形的制約によってやや東西方向に振れるものとの2方向みられる。しかし、その配置にさほど厳格な規則性は見出せない。遺物としては宮の前遺跡1次調査で「寺」〔寿カ〕と記された墨書土器片や、蛭池北遺跡1次調査や宮の前遺跡8次調査で硯片や緑釉陶器片が出土している。また、遺跡のすぐ北に山陽道が通り、近くに猪名川が流れるという立地条件は、水陸交通に恵まれた交通の要所としての地理的意味合いをもち、豊嶋郡の郡名と同名の豊嶋郷に所在することから、豊嶋郡衙あるいはその周辺施設とする解釈も示唆されてきた。

まとめ 既往の調査から宮の前遺跡・豊島南遺跡の2遺跡から明らかになったことを、弥生時代中期から庄内期に限ってまとめてみたい。まず、弥生時代中期前半（II様式）から宮の前遺跡の集落が形成され始める。弥生時代中期中頃（III様式）で最盛期を迎え、台地の平坦部中央に居住域、縁辺部に墓域を形成し、大規模集落に発展する。なお、川西市加茂遺跡などにみられるような環濠は、現在のところみられない。その後中期後半（IV様式）から急激に集落規模が縮小し、中期末にはほぼ終焉を迎える。宮の前遺跡が衰退し始める頃から台地の下の豊島南遺跡に方形周溝墓が造営され、後期に入ってから小規模ながらも、廃絶した宮の前遺跡に変わって集落を形成していく。このような傾向は川西市加茂遺跡と栄根遺跡などにもみられ、猪名川水系では拠点集落とその後の分村的集落遺跡の関係においてみられるようである。そして後期から庄内期にかけて、豊島南遺跡、神田北遺跡、池田城下層遺跡、横枕遺跡や、対岸では川西市栄根遺跡、下加茂遺跡、久代遺跡、寺畑遺跡、小戸遺跡といった小規模集落が沖積地や丘陵に群在する。この集落動向の中で当遺跡においても、庄内期に豊島南遺跡に内包され得る集落を形成するのであろう。

なお、個々の調査については一覧表で示しているので、そちらを参照されたい。

注1)『新修 池田市史』第1巻 1997 池田市史編纂委員会 以下池田市内の遺跡については主に本書によった。

『山田博雄収集資料目録』1987 辰馬考古資料館 空港A遺跡について参照した。以下庄内期の部分も同様である。

2) 森岡秀人・中井秀樹・濱野俊一「庄内式併行土器の様相をめぐる摂津地域の動向」『庄内式土器研究』XII 1996 庄内式土器研究会

森岡秀人「摂津における土器交流拠点の性格」『庄内式土器研究』XXI 2000 庄内式土器研究会

以下庄内期の部分についてはこれらによるところが多い。



第5図 調査地周辺既往調査位置図



第1表 住吉宮の前遺跡周辺既往調査一覧表

番号	遺跡名・調査回数	調査主体	調査地	遺構／遺物	調査原因・備考	文献
1	豊島南遺跡・1次	大阪府教育委員会	池田市豊島南2丁目	大溝(庄内期・中世)5C後半～6C須恵器・土師器、弥生土器、縄文晩期土器	民間工場建設	A B
2	豊島南遺跡・2次	阪神高速道路池田延伸線遺跡調査団・池田市教育委員会	池田市豊島南2丁目	弥生中期方形周溝墓、古墳中期方墳、竪穴住居(庄内期・古墳後期)、奈良 掘立柱建物、中世溝／縄文晩期土器片、弥生中期土器・鉄斧、庄内期土器、古墳土師器・須恵器	阪神高速池田線延伸工事	A B C D
3	豊島南遺跡・3次	池田市教育委員会	池田市豊島南1丁目	古墳後期掘立柱建物に伴う柱穴／古墳後期須恵器・土師器、平安 黒色土器・土師器	自家用倉庫建設	B
4	豊島南遺跡・4次	池田市教育委員会	池田市豊島南2丁目	飛鳥 掘立柱建物		A
5	豊島南遺跡・5次	池田市教育委員会	池田市豊島南1丁目	なし		E
6	豊島南遺跡・6次	池田市教育委員会	池田市豊島南1丁目	ピット、杭跡、土坑／古墳須恵器・土師器小片	個人住宅新築	F
7	宮の前西遺跡	池田市教育委員会	池田市空港1丁目	ピット／古墳中期須恵器小片		A
8	宮の前遺跡・1次	宮の前遺跡調査会	池田市石橋4丁目 池田市住吉2丁目 豊中市蛸池北3丁目	弥生中期方形周溝墓・土坑墓・土器棺・住居跡、古墳後期住居・方形周溝墓(方墳)・土坑墓、円筒埴輪棺、奈良 建物跡・井戸・溝、平安以降溝、小規模建物／弥生中期土器・小玉・管玉・磨製石斧・磨製石剣・サヌカイト剥片、古墳後期須恵器・土師器、奈良 須恵器・土師器、黒色土器、墨書須恵器片「寺」[寿カ]	中国縦貫道・大阪中央環状線建設資料等焼失	G
9	宮の前遺跡・2次	大阪府教育委員会	池田市住吉2丁目	不明	8調査同様資料等焼失	A
10	宮の前遺跡・3次	池田市教育委員会	池田市石橋4丁目			
11	宮の前遺跡・4次	池田市教育委員会	池田市石橋4丁目			
12	宮の前遺跡・5次	大阪府教育委員会	池田市石橋4丁目	弥生中期円形土坑・柱穴・ピット、中世溝／弥生中期土器小片、古墳～奈良須恵器・土師器	中国自動車道高架橋脚改良工事	H
13	宮の前遺跡・6次(86-1次)	池田市教育委員会	池田市住吉2丁目	弥生中期土坑・溝・ピット、古墳後期土坑・掘立柱建物／弥生中期土器、古墳後期須恵器・土師器	個人・共同住宅建築	I
14	宮の前遺跡・7次	大阪府教育委員会	池田市石橋4丁目	中世土坑・ピット、近世溝／中世土師器、近世陶磁器		A
15	宮の前遺跡・8次	大阪府教育委員会	池田市石橋4丁目	弥生中期住居跡・土坑、飛鳥 掘立柱建物、平安末～鎌倉 溝／旧石器(ナイフ型石器)、弥生中期土器片・石鏃、古墳後期～飛鳥 須恵器、奈良 土師器・須恵器・緑釉陶器、中世白磁・青磁・瓦器・瓦・東播系須恵器・瓦質土器	マンション建設	A
16	宮の前遺跡・9次(86-2次)	池田市教育委員会	池田市石橋4丁目	(中世包含層)瓦器・瓦質土器	個人住宅改築	I
17	宮の前遺跡・10次	大阪府教育委員会	池田市石橋4丁目	古墳中期方墳、時期不明ピット／古墳中期須恵器		A
18	宮の前遺跡・11次(87-1次)	池田市教育委員会	池田市住吉2丁目	弥生中期竪穴住居・掘立柱建物・土坑・溝／弥生中期土器・サヌカイト製石鏃・石槍・刃器・剥片、石廬丁(緑色片岩製・結晶片岩製)	店舗付個人住宅改築	J
19	宮の前遺跡・12次(87-2次)	池田市教育委員会	池田市住吉2丁目	なし／須恵器小片	個人住宅改築	J
20	宮の前遺跡・13次(87-3次)	池田市教育委員会	池田市石橋4丁目	土坑、溝、ピット／土師器・須恵器小片	共同住宅新築	J
21	宮の前遺跡・14次(87-4次)	池田市教育委員会	池田市住吉2丁目	弥生中期竪穴住居		A
22	宮の前遺跡・15次(88-1次)	池田市教育委員会	池田市石橋4丁目	なし／古墳土師器片、弥生土器片		A
23	宮の前遺跡・16次(88-2次)	池田市教育委員会	池田市石橋4丁目	弥生溝・ピット／弥生土器片	個人住宅改築	B
24	宮の前遺跡・17次(88-3次)	池田市教育委員会	池田市石橋4丁目	弥生中期方形周溝墓?・土坑・ピット／弥生中期土器	個人住宅改築	B
25	宮の前遺跡・18次(88-4次)	池田市教育委員会	池田市住吉2丁目	ピット、杭跡／なし	個人住宅増築	B
26	宮の前遺跡・19次(88-5次)	池田市教育委員会	池田市石橋4丁目			A
27	宮の前遺跡・20次(90-1次)	池田市教育委員会	池田市石橋4丁目	奈良 竪穴住居		A
28	宮の前遺跡・21次	池田市教育委員会	池田市石橋4丁目	なし		A
29	宮の前遺跡・22次	池田市教育委員会	池田市石橋4丁目	弥生中期溝(35調査地の延長?)	35調査地南東	A

30	宮の前遺跡・23次 (90-4次)	池田市教育委員会	池田市石橋4丁目	ピット、土坑/須恵器片	個人住宅増築	K
31	宮の前遺跡・24次	池田市教育委員会	池田市石橋4丁目	奈良 土師器・須恵器		A
32	宮の前遺跡・25次	池田市教育委員会	池田市石橋4丁目	なし	個人住宅新築	L
33	宮の前遺跡・26次	池田市教育委員会	池田市住吉2丁目	弥生中期方形周溝墓(50調査地の延長?)・土壙墓、奈良 溝・掘立柱建物・土坑/弥生中期土器・石器、奈良 須恵器・土師器	事務所増築 50調査地に西接	A
34	宮の前遺跡・27次	池田市教育委員会	池田市住吉1丁目	近世柱穴		A
35	宮の前遺跡・28次	池田市教育委員会	池田市石橋4丁目	弥生中期溝(29調査地の延長?)・土坑・ピット/弥生中期土器	個人住宅新築	M
36	宮の前遺跡・29次	池田市教育委員会	池田市住吉1丁目	土坑、ピット/(包含層)弥生中期?土器小片	個人住宅建替	N
37	宮の前遺跡・30次	池田市教育委員会	池田市住吉1丁目	中世土師器・瓦器・須恵器	個人住宅改築	N
38	宮の前遺跡・31次	池田市教育委員会	池田市石橋4丁目			A
39	蜚池北遺跡・1次	豊中市教育委員会	豊中市蜚池北1丁目	弥生方形周溝墓・土坑、古墳土坑、奈良土坑・掘立柱建物/弥生土器片、古墳~奈良 須恵器・土師器、緑釉陶器		O
40	蜚池北遺跡・2次	豊中市教育委員会	豊中市蜚池北1丁目	中世溝状遺構・ピット、時期不明掘立柱建物・落込み状遺構/東播系須恵器・瓦器・陶器、中国産白磁・青磁	木造住宅建設	P
41	蜚池北遺跡・3次	豊中市教育委員会	豊中市蜚池北1丁目			Q
42	蜚池北遺跡・4次	豊中市教育委員会	豊中市蜚池北2丁目			A
43	蜚池北遺跡・5次	豊中市教育委員会	豊中市蜚池北3丁目			A
44	蜚池北遺跡・6次	豊中市教育委員会	—		抹消	
45	蜚池北遺跡・7次	豊中市教育委員会	豊中市蜚池北2丁目			A
46	蜚池北遺跡・8次	豊中市教育委員会	豊中市蜚池北2丁目			A
47	蜚池北遺跡・9次	豊中市教育委員会	豊中市蜚池北2丁目	奈良~平安前半 掘立柱建物・土坑・柵列、鎌倉 土坑/奈良~平安 土師器・須恵器、平安 黒色土器・瓦、鎌倉 瓦器	マンション建設	AR
48	蜚池北遺跡・10次	豊中市教育委員会	豊中市蜚池北3丁目	古墳 溝・円墳?(周溝のみ)、奈良 柱穴	マンション建設	A
49	蜚池北遺跡・11次	豊中市教育委員会	豊中市蜚池北4丁目	なし/布目瓦	大阪モノレール建設に先行	A
50	蜚池北遺跡・12次	蜚池北遺跡調査団・豊中市教育委員会	豊中市蜚池北3丁目	弥生方形周溝墓・土壙・土坑・溝、奈良掘立柱建物・溝・柱穴/弥生中期土器・石庖丁・石鎌・石錘、奈良 須恵器・土師器	事務所ビル建築 8調査地に南接 33調査地に東接	S
51	蜚池北遺跡・13次	豊中市教育委員会	豊中市蜚池北1丁目	弥生中期竪穴住居・土坑、古墳中期円墳・木棺墓、奈良 井戸/弥生中期土器、古墳中期須恵器・鉄製刀子、奈良 土師器・須恵器・格子目平瓦	共同住宅建設	T
52	蜚池北遺跡・14次	豊中市教育委員会	豊中市蜚池北2丁目	弥生中期土坑、中世井戸/弥生土器片、瓦器・須恵器片	事務所兼個人住宅建替	TU
53	蜚池北遺跡・15次	豊中市教育委員会	豊中市蜚池北1丁目	奈良~平安 土坑/奈良~平安 須恵器細片	共同住宅建設	T
54	蜚池北遺跡・16次	豊中市教育委員会	豊中市蜚池北1丁目	弥生中期竪穴住居、10C 後半溝/弥生中期土器、平安 黒色土器	個人兼共同住宅建築	VW
55	蜚池北遺跡・17次	豊中市教育委員会	豊中市蜚池北1丁目	奈良 土坑、古墳後期円墳/須恵器・土師器片	共同住宅建設 51調査地に東接	W
56	蜚池北遺跡・22次	豊中市教育委員会	豊中市蜚池北3丁目	溝(円墳周溝?:48調査より推測)、近世用水路・耕作溝/備前焼細片	個人住宅建設	X
57	蜚池北遺跡・23次	豊中市教育委員会	豊中市蜚池北2丁目			A
58	蜚池北遺跡・24次	豊中市教育委員会	豊中市蜚池北2丁目	溝、柱穴群/奈良~平安中期?土師器片	共同住宅建設	Y
59	蜚池北遺跡・25次	豊中市教育委員会	豊中市蜚池北2丁目	古墳周溝らしき溝、平安 柱穴列/古墳後期以降須恵器片、平安 黒色土器	個人住宅建設	Y
60	宮の前遺跡 その1	(財)大阪文化財センター	豊中市蜚池東3丁目	弥生中期溝状遺構・土坑・ピット、鎌倉土坑・溝/弥生中期土器、鎌倉 瓦	大阪モノレール 蜚池東線建設	Z
61	宮の前遺跡 その2	(財)大阪文化財センター	豊中市蜚池東3丁目	弥生中期土坑、飛鳥 土壙墓・土坑、中世畝群・鋤溝/弥生中期土器・サヌカイト剥片、飛鳥 土師器・須恵器、中世土師器・陶器・染付片	大阪モノレール 蜚池東線建設	Z
62	宮の前遺跡 その3	(財)大阪府文化財調査研究センター	池田市石橋4丁目	中近世鋤溝・土坑、近世~近代水田/奈良~中世土師器、弥生中期~後期土器	大阪モノレール 蜚池東線建設	a
63	宮の前遺跡 その4	(財)大阪府文化財調査研究センター	豊中市蜚池東3丁目	なし	大阪モノレール 蜚池東線建設	a
64	宮の前遺跡 その5	(財)大阪府文化財調査研究センター	豊中市蜚池東3丁目	弥生以降(古墳後期~奈良・平安?)ピット列・土坑、中近世鋤溝、畝立の溝、近世溝/弥生中期土器小片、奈良~平安 須恵器、中世須恵器・土師器・瓦器	大阪モノレール 蜚池東線建設	a
65	宮の前遺跡 その6	(財)大阪府文化財調査研究センター	池田市石橋4丁目	中近世耕地区画、近世~近代水田/弥生中期~後期土器片、奈良~中世土師器	大阪モノレール 蜚池東線建設	a

なお、一覧表において庄内期と表記しているものは庄内併行期と同一である。

## 文 献

A 未報告 池田市教育委員会調査分については田上雅則氏、大阪府教育委員会調査分については亀島重則氏、豊中市教育委員会調査分については浅田尚子氏にご教示いただいた。

- B 『池田市埋蔵文化財調査概報 1988年度』 1989 池田市教育委員会
- C 『豊島南遺跡現地説明会資料』 1987、『同』 1988 阪神高速道路池田延伸線遺跡調査団・池田市教育委員会
- D 『広報いけだ』746号 1991 池田市
- E 『池田市埋蔵文化財調査概報 1990年度』 1991 池田市教育委員会
- F 『池田市埋蔵文化財調査概報 1991年度』 1992 池田市教育委員会
- G 『宮之前遺跡発掘調査概報』 1970 宮之前遺跡調査会
- H 『宮の前遺跡発掘調査概要』 1985 大阪府教育委員会
- I 『池田市埋蔵文化財調査概報 1986年度』 1987 池田市教育委員会
- J 『池田市埋蔵文化財調査概報 1987年度』 1988 池田市教育委員会
- K 『池田市埋蔵文化財調査概報 1990年度』 1991 池田市教育委員会
- L 『池田市埋蔵文化財調査概報 1991年度』 1992 池田市教育委員会
- M 『池田市埋蔵文化財調査概報 1992年度』 1993 池田市教育委員会
- N 『池田市埋蔵文化財調査概報 1995年度』 1996 池田市教育委員会
- O 『蛭池北遺跡（宮の前遺跡）現地説明会資料』 1981 豊中市教育委員会
- P 『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1983年度』 1984 豊中市教育委員会
- Q 『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1984年度』 1985 豊中市教育委員会
- R 『蛭池北遺跡第9次調査＜現地説明会資料＞』 1989 豊中市教育委員会
- S 『蛭池北遺跡（宮の前遺跡）第12次発掘調査報告』 1995 蛭池北遺跡調査団・豊中市教育委員会
- T 『豊中市埋蔵文化財年報 vol.1 1989,1990年度』 1992 豊中市教育委員会
- U 『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1989年度』 1990 豊中市教育委員会
- V 『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1992年度』 1993 豊中市教育委員会
- W 『豊中市埋蔵文化財年報 vol.2 1991,1992年度』 1994 豊中市教育委員会
- X 『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1998年度』 1999 豊中市教育委員会
- Y 『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1990年度』 2000 豊中市教育委員会
- Z 『宮の前遺跡・蛭池東遺跡・蛭池遺跡・蛭池西遺跡 1992・1993年度発掘調査報告書』 1994 (財)大阪文化財センター
- a 『宮の前遺跡・蛭池東遺跡・麻田藩陣屋跡・蛭池遺跡・蛭池南地区・蛭池西遺跡 1993-1996年度発掘調査報告書』 1997 (財)大阪府文化財調査研究センター

### 調査地点名の異同

宮の前遺跡=蛭池北遺跡

宮の前遺跡その1・その2・その4・その6→蛭池北遺跡18次～21次に相当

### 第三章 調査・整理の方法

**地区割** (第6図) 地区割については、国土座標軸(第VI座標系)を基準にして、大阪府全域を共通の方式で区割りできるように、大小6段階の区画を設定している。第I区画は、1/10,000地形図の地区割図を利用しており、縦6km、横8kmが1区画となる。南西端を基点とし、縦軸A~O、横軸0~8で表示する。第II区画は、1/2,500地形図の地区割図を利用したもので、第I区画を縦1.5km、横2.0kmに16分割している。南西端を1とし、北東端を16とするもので、東方向への平行式の地区名表示である。第III区画は、第II区画内を100m単位で区画するもので、縦15、横20に区分される。表示は北東端を基点に縦A~O、横1~20となる。第IV区画は、第III区画内を10m単位で区画するもので、縦横各10mに区分される。表示は北東端を基点に縦a~j、横1~10となる。第V区画は、第IV区画内を5m単位で4分割し、I~IVで示した。今回の調査では、遺物はこの一辺5mの区画ごとに取り上げた。

本報告書の方位は全て座標北を示している。なお座標北より磁北は西に6°21′、真北は東に19′各々振っている。また本報告書記載の標高値は東京湾の平均海面(T.P.)を基準としている。

**層位番号** 調査時に近年の盛土を除く各層を上層から順に番号を付与し、そのまま報告書にも使用した。なお遺物収納ラベルなどに一部「包含層」と記したものがあがるが、それらは3層を指している。

**遺構番号** 調査の段階で、各遺構に、遺構の時期、性格とは関係なく検出順の通し番号を付与した。本報告書でもその遺構番号を、遺構の性格を確定した上でそのまま使用している。したがって、調査時の資料、報告書のいずれにおいても複数の遺構に同一の遺構番号が付与されていることはない。

**整理作業** 遺物は、調査時の取り上げ順に各遺物袋に番号(遺物登録番号)を付与した。出土遺物は、遺物登録番号ごとに洗浄し、注記の際にも遺跡名と遺物登録番号を記入した。

その後、各層、遺構ごとに遺物の接合、復原作業に入り、遺物抽出後、実測を行った。実測した遺物は全て本書に掲載している。ただその抽出基準は、各層、各遺構出土遺物の時間幅を示す遺物、特にその形成時期を示す可能性のある下限遺物を優先して抽出したため、本書に図化した遺物数が、各層、各遺構の時期別出土量を反映するものでは決していない。

遺物写真撮影は、図化した遺物のうち、実測遺物の抽出時と同じく、各層、各遺構の時間幅を示す遺物で、なおかつ遺存状態のよいものを中心に抽出した。

**出土土器の年代について** 本書における土器編年は以下の文献に依拠した。

弥生土器 森田克行「摂津地域」『弥生土器の様式と編年—近畿編II—』木耳社 1990

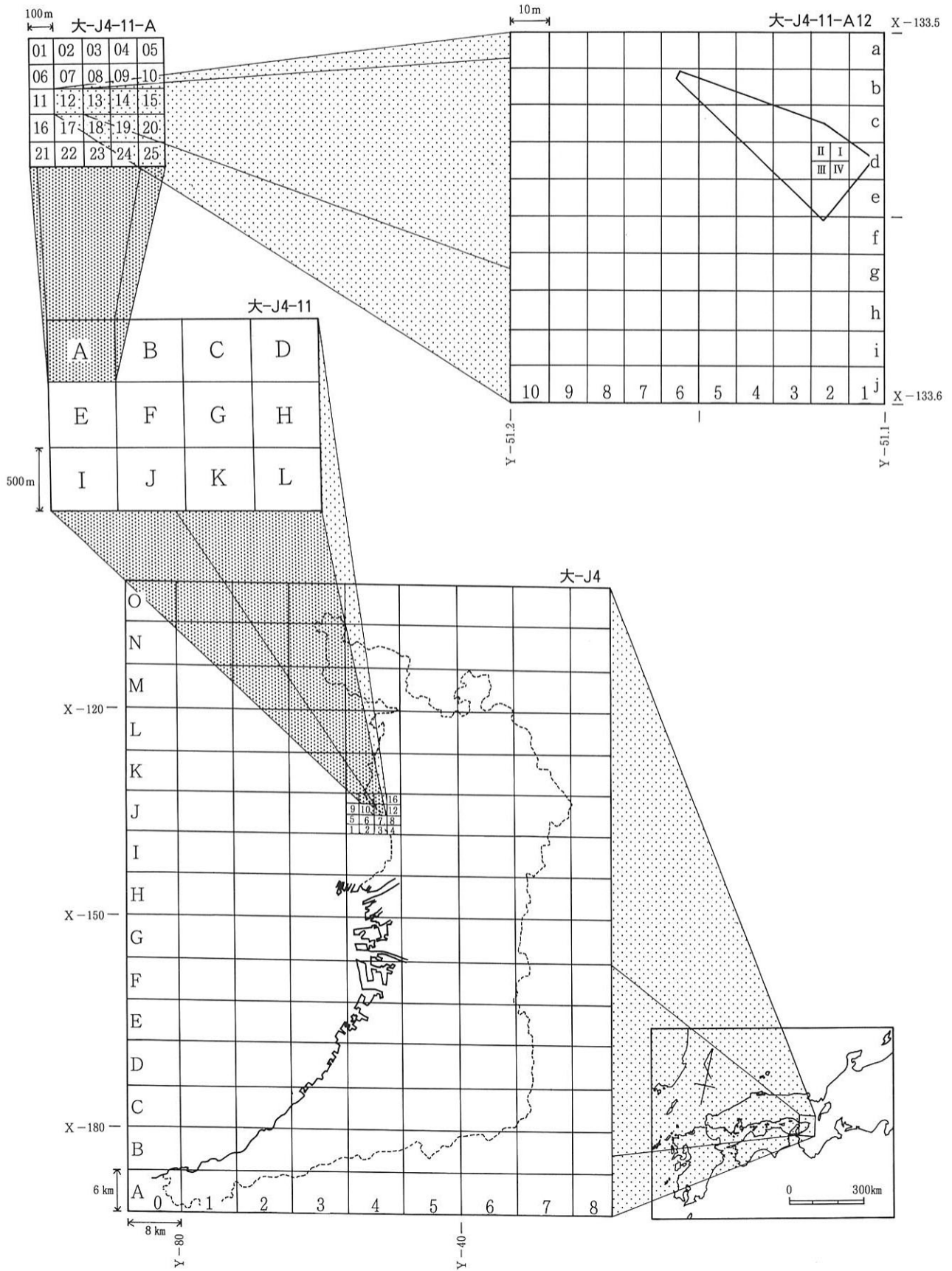
庄内式土器~布留式土器 森岡秀人・中井秀樹・濱野俊一「庄内式併行土器の様相をめぐる摂津地域の動向」『庄内式土器研究』XII 1996 庄内式土器研究会

米田敏幸「土師器の編年 1. 近畿」『古墳時代の研究』6 1991 雄山閣

須恵器 『陶邑』III 1978 大阪府教育委員会

なお須恵器の実年代観については、中村編年I~IVの各型式を5~8各世紀に比定させて大過ないであろう。ただII-5、6は7世紀に下ると考えられる(『歴史考古学を考える1—古代瓦の生産と流通—』

1987 帝塚山考古学研究所 他)。したがって本書ではII-4、5、6を各々6世紀後葉、7世紀初頭、同前半に比定し、II-4と同5の過渡期の資料は6世紀末に位置づけた。



第6図 調査地区割図



## 第IV章 調査成果

### 第1節 基本層序

1層 盛土直下で確認した厚さ数～20cmの黄灰色シルトである。当地が水源地として利用されるまでの旧耕土層と考えられる。ただ近年の攪乱あるいは削平によって部分的に確認できない部分もある。

2層 旧耕土直下で確認した暗灰黄色シルトである。厚さ20cm前後を測り、ほとんど遺物は出土しない。ただc3区付近では厚さ40cmに達するうえ、同層下部においてマンガン粒が多く、瓦器、土師皿片を若干含む部分が確認できたが、上部とは明確に峻別することはできなかった。

3層 厚さ10～20cmの黒褐色シルトで、弥生時代から奈良時代の遺物を包含する。本来は調査区全体に広がっていたとみられるが、東半部では近年の攪乱などによってかなり削平されていた。c5-I区付近でも認められなかったが、それは、ベースの礫層（4層）が洪水堆積によって形成された際にやや盛り上がり微高地となったため、3層の堆積が進まなかったことに主因する。なお調査区西半部では3層と4層最上部はほとんど差がなく、遺物の有無を基準に両者を識別した部分もある。

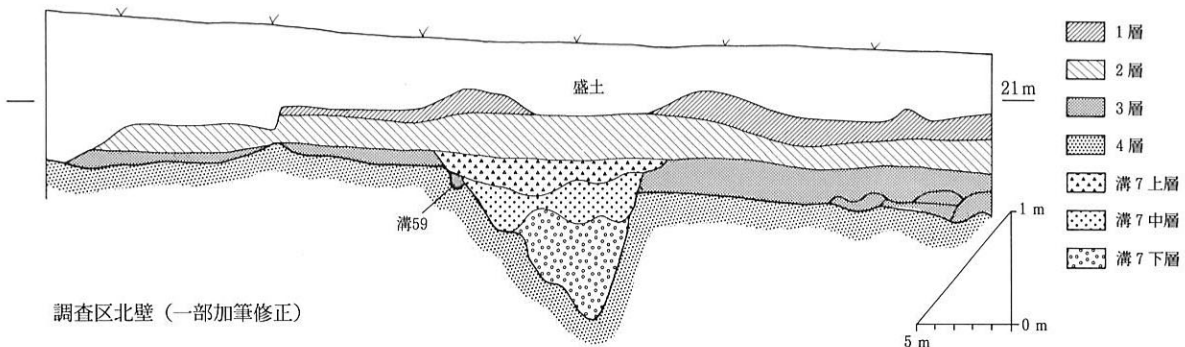
4層 3層直下に広がる無遺物層を一括した。b5～c5区では約40cmにわたって堆積する黒褐色シルトの下部に黄褐色土が安定して堆積していたが、以東では黄褐色土を切込むかたちで、砂礫土、砂質土が互層をなして堆積しており、かなり複雑な様相を呈していた。

調査時は、3層上面と4層上面を遺構面として認識したため、3層上面で確認した溝7と小溝以外の、弥生時代後期から奈良時代に至る遺構の大半を4層上面確認遺構として把握した。しかし、奈良時代の土器棺11、古墳時代前期（布留式後半）の土器棺45などを3層掘削途中にすでに検出していた点、溝7が後述するようにその切込み面が第3層中である可能性が高い点などから、3層堆積途中に形成された遺構面を想定せざるを得ない。したがって本報告では遺構面を以下の3面と把握して論を進める。

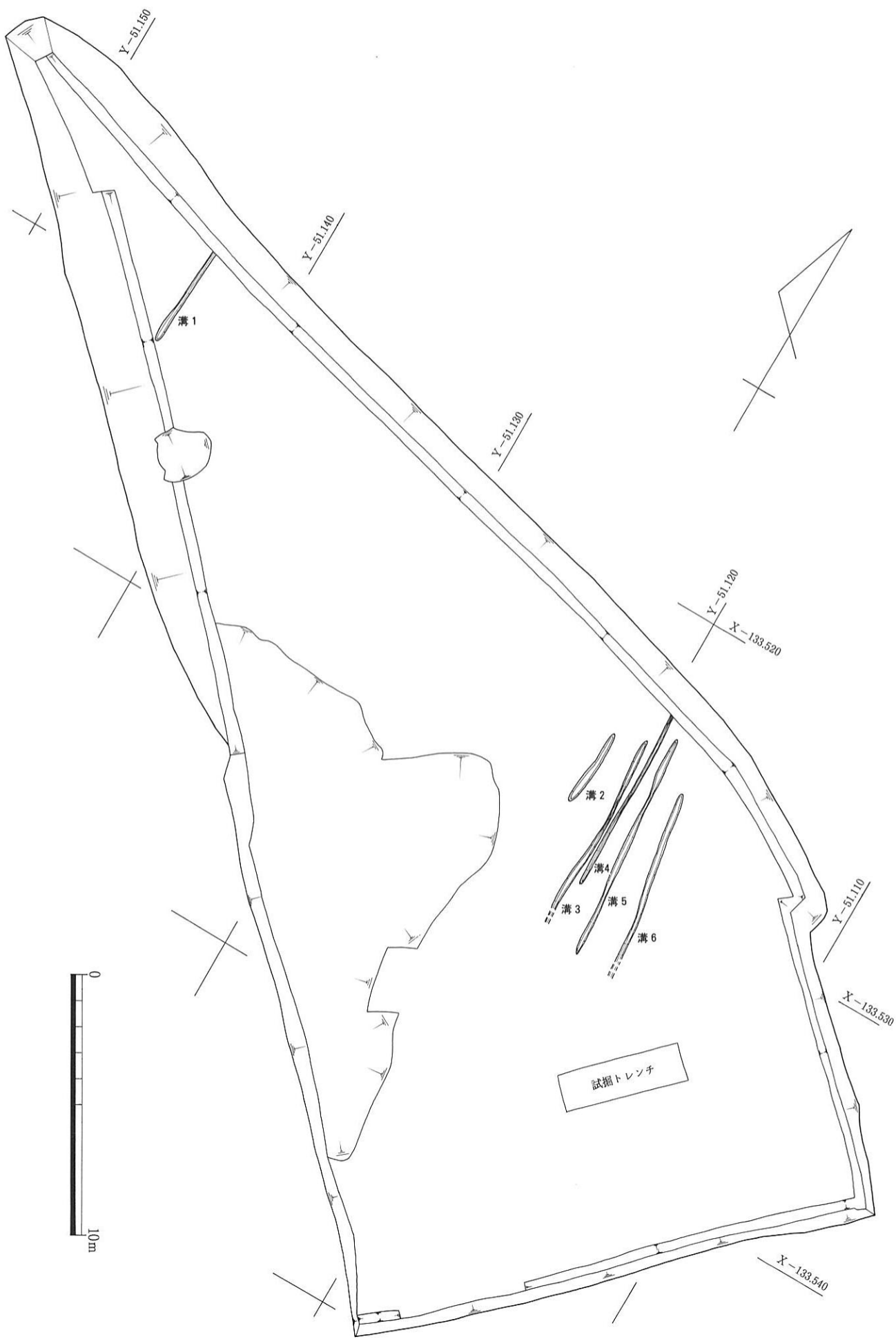
上面 3層上面。遺構は2層に似た暗灰黄色土を埋土とする南北方向の溝からなる。平安時代後期。

中面 3層中的一部分で検出できた面。3層自体その上部が削平をされている可能性が高いこと、調査時には切込み面の認識には上記のような限界があったことから、3層途中で部分的に検出した遺構面を全面にわたって連続して検出することができなかった。したがって第4面で検出した遺構のなかには、3層途中から切込まれた遺構を含んでいると考えられる。ただ上記の上面検出遺構とはその埋土、出土遺物などから明確に分類・識別しえる。出土遺物から古墳時代前期から奈良時代。

下面 4層上面。弥生時代後期～庄内期。



第7図 基本層序模式図



第8図 上面遺構全体図

## 第2節 検出遺構

### (1) 上面遺構

溝1～6(第8図) b5～c5区、c2～3、d2区で確認した幅20～30cm、深さ約5cmの、南北方向に平行して走る溝で、図示したもの以外にも筋状の同一方向に走る溝が認められ、耕作痕であることは明らかである。埋土は暗灰黄色シルトである。遺物は出土していない。遺構の時期はc3区において平安時代後期の瓦器を包含する2層下部除去時に確認したことから、その頃の可能性が高い。

### (2) 中面遺構

井戸9(第9、10図) d2～3区で、溝7確認時にその上面において検出した素掘りの井戸である。直径は検出面で2.2m、底面で1.3mを測る。壁面は検出面より60cm付近までは緩やかに、それ以下ではほぼ垂直に掘り込んで平坦な底面に至っている。ただ井戸底面はさらに一辺約60cmにわたって方形に25cmほど掘り下げており、検出面からその最低部までの深さは2.3mを測る。井戸下半はやや袋状に広がるが、それは壁面の土砂の崩壊した結果と考えられる。埋土は粘土と砂の互層をなしており、人為的に埋めた痕跡は認められなかった。

底面より、奈良時代とみられる土師器甕(第19図61)と杭状の加工材が各々1点ずつ出土した。前者は井戸の釣瓶として利用されていたものであろう。

なおこの井戸は奈良時代に堆積したとみられる溝7上層の上面から切り込まれているが、同上層の遺物と底面出土の土師器甕に大きな時間差があるとは考えられず、井戸9は溝7が完全に埋没して間もない頃に掘削されたのであろう。

溝7(第11図) 調査区の東部、c2、3～e2、3区で確認した北北西から南南東に延びる大溝で、長さ30mにわたって確認し、南北両端ともさらに調査区外に延びる。上端幅は7～8mである。

壁面は概して垂直に近い角度で落ち込んでいるが、調査区北壁に近いc3-I～IV区の西岸では壁面が2段になっていた。またその対岸、c2-III区付近の東岸上端外側には幅2.5m、長さ10mにわたって浅いテラス状の面を確認している。溝の底面は概して凹凸が激しい。特にその中央部分(d3-IV～d2-III区)ではその傾向が顕著で、その深さも2.0mと、調査区北壁付近(1.7m)、南壁付近(1.0m)に比べてかなり落込んでいる状態がみてとれた。底面幅は6m前後を測るが、調査区北壁付近では、西岸が2段になっている影響もあって、急速に幅を減じ、1.5mほどにすぎない。

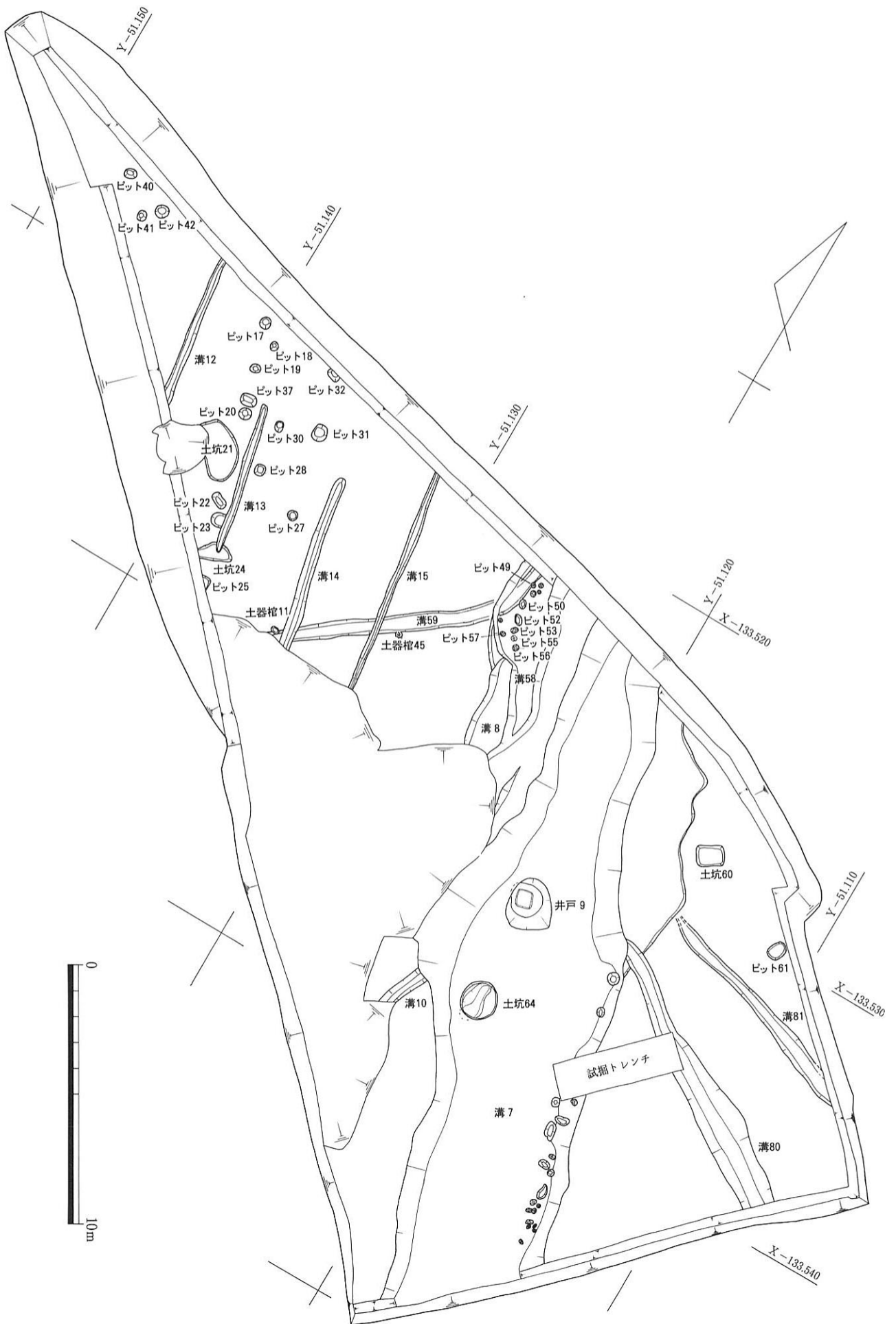
c3区の溝西壁に沿うかたちで直径5～10cm、深さ数cmの杭列と考えられる小穴を10個余り確認したが、木材などは確認できなかった。壁面にほぼ平行して打込まれていたこと、個々の穴が小規模であることなどからみて、堰などを構成していたものではなく、護岸用のものであったであろう。

埋土は上、中、下層の3層に大別できる。

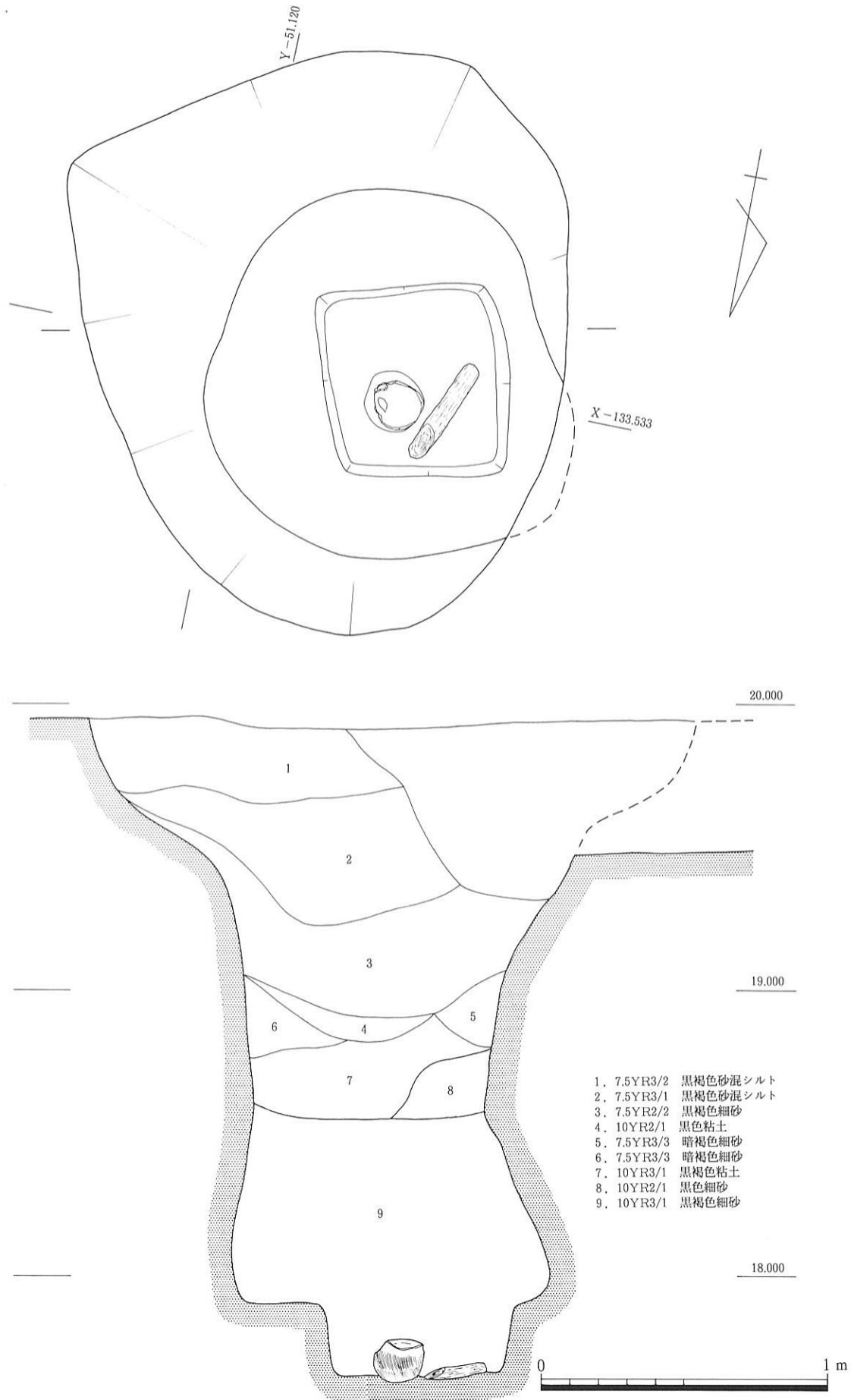
上層は、厚さ30cmほどの褐灰色砂質土で、その確認範囲は、溝7東岸の調査区内ほぼ全面にまで広がっており、後述する溝80、81などを完全に覆い尽くしている。出土遺物の多数は飛鳥時代末から奈良時代(中村編年Ⅲ-3～IV)のものである(第16図1～27)。

中層は、灰黄色系の砂質土で、上層に比べて粘性が弱い。一部に砂層も認められる。北壁付近では厚さ30cmを測るが次第に薄くなり、d2、3区以南では認められなかった。出土遺物は弥生土器なども認められるが、その下限は古墳時代後期後葉から末(同Ⅱ-4～5)である(第16図28～44)。

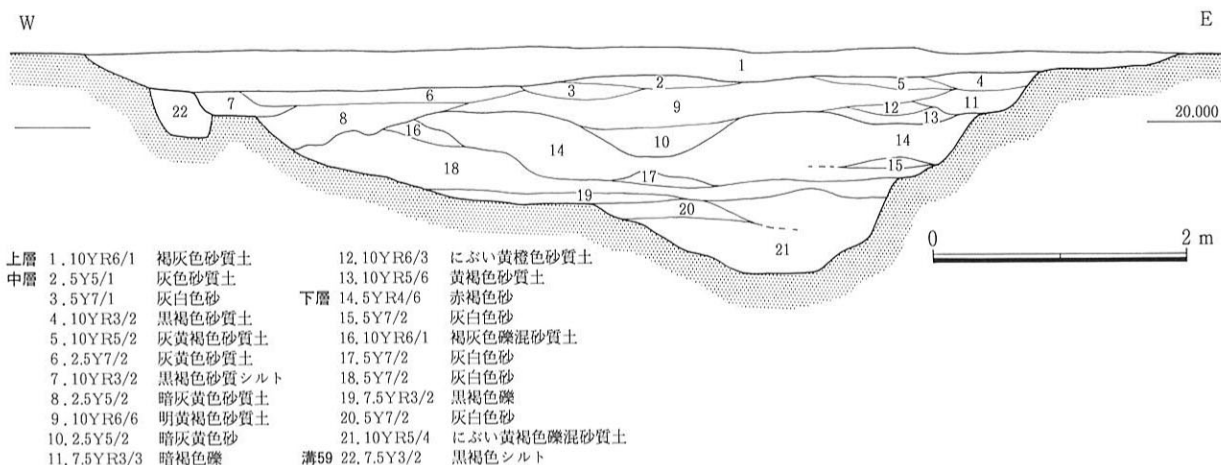




第9図 中面遺構全体図



第10図 井戸9実測図



第11図 溝7断面図

下層は厚さ1.2m前後の、埋土の大半を占める層で、粗砂、細砂の互層からなる。調査区北半部ではその中に青灰色シルトの薄い層を二三確認したが、下層自体を上下に峻別するほどの連続性が追えるものではなく、そのシルト層自体も調査区南半部では消えてしまう。遺物は弥生土器、須恵器、土師器が溝北半を中心に出土している（第17図45～60）。それらの遺物の下限は古墳時代後期後葉（同Ⅱ-4）である。いずれも摩滅が激しい。

溝7の形成要因について触れると、その壁面、底面をみた場合、人為的に掘削されたにしては、掘削後の水流による改変を考慮するとしても、凹凸が激しいように思われ、自然流路と考えるのが妥当であろう。ただ両岸の上端ラインがほぼ平行して直線的に延びること、あるいは杭が打込まれていたことからみて、部分的には人為的に改変が加えられたことは間違いない。

その機能としては、後述するように溝10、80、81が溝7から延びる導水路と考えられるので、溝7は周辺の耕作地への灌漑用水路として利用されていたとみるのが妥当であろう。その水流方向については、調査区付近の地勢から推して南流していたとみて間違いない。

溝7の形成時期については、下層遺物の状況からみて古墳時代後期後葉である可能性が高い。底面直上の遺物に古墳時代中期の遺物が目立つ点やや気になるが、層位的には他の下層部分となんら峻別できる出土状態ではなかったため、上流からの2次堆積と考えておくのが自然であろう。ただ古墳時代後期末には洪水によって既に大半が埋まっていたことは間違いない、溝7が灌漑用水路として機能した時間は極めて短かったと推定される。そして最後に窪地状に残った溝7東半部も奈良時代には完全に埋まりきってしまう。

なお溝7の西岸に近づくにつれて埋土各層は漸移的に粘性が強くなり、3層との峻別が難しい部分も認められた。そのことは3層の堆積そして溝7への流入が、溝7の埋没と同時に進行していたことを示している。

溝10（第9図） d3-Ⅳ区において、溝7のほぼ中央部から南西方向に延びる溝である。その大半は攪乱によって破壊されていたが、長さ1.6m以上、幅50cm、深さ35cm前後を測る。埋土には黒褐色細砂が充填されており、土師器片が若干出土している。

溝80（第9図） d1～3区において、溝7の東岸から南東方向に直線的に延びる溝である。その規模は長さ11m以上、幅1.5m、深さ30cm前後を測る。埋土には砂混じりの黒褐色シルトが充填されており、土師器、須恵器片が出土した。

溝81（第9図） d 1～3区において、溝7の東岸から南東方向に直線的に延びる溝である。その規模は長さ8.7m以上、幅0.5m、深さ10cm前後を測る。埋土には砂混じりの黒褐色シルトが充填されており、土師器、須恵器片が出土している。

溝10、80、81は溝7を挟んで相対する位置にある点、その規模、形態が類似する点、あるいは溝80、81がほぼ平行して延びている点などからみて、同一の性格が考えられる。おそらく溝7から導水するために掘られたものであろう。その時期は、溝7がまだ流路として機能していた時期、すなわち古墳時代後期後葉と推定され、溝80から出土した須恵器坏片（第18図63・64）の型式（中村編年Ⅱ-4）とも矛盾しない。

溝12～15（第9図） 調査区の西半、c 4、5区で確認したほぼ南北に主軸をとる溝である。

各溝ともほぼ同規模（幅30～40cm、深さ10cm前後）で、約3.5m間隔で平行して並ぶことから同一時期の同一性格の遺構であることは間違いない。溝の長さは最も長いもので9m以上（溝15）を測る。埋土はいずれも黒褐色シルトで、流水堆積によるものではない。

遺構は面的には4層上面でしか確認しえなかったが、c 4-Ⅳ区では奈良時代の土器棺11の掘方検出面と同じレベルで溝14の西肩部を確認しており、本来の切込み面が3層でも比較的上部にあることが推測できた。

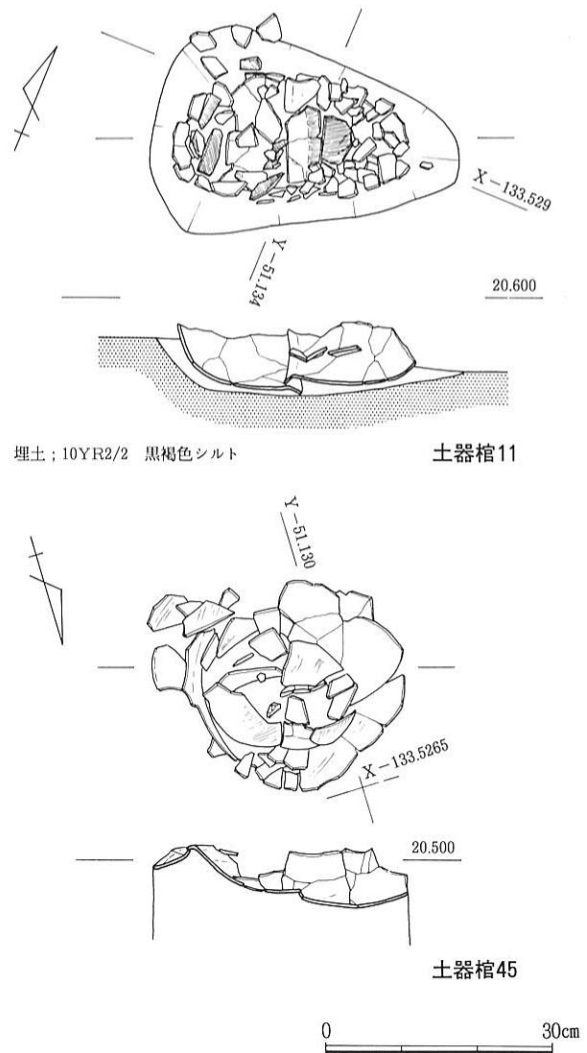
溝12以外の各溝から奈良時代とみられる須恵器、土師器片が出土しており、遺構の時期を示していると考えられる。そのことは溝14、15が古墳時代後期の溝59を切っており、溝の切込み面が3層中でもかなり上部にあるといった事実と矛盾しない。

溝59（第9図） 調査区の東半、c 3～4区での4層上面で確認した溝である。

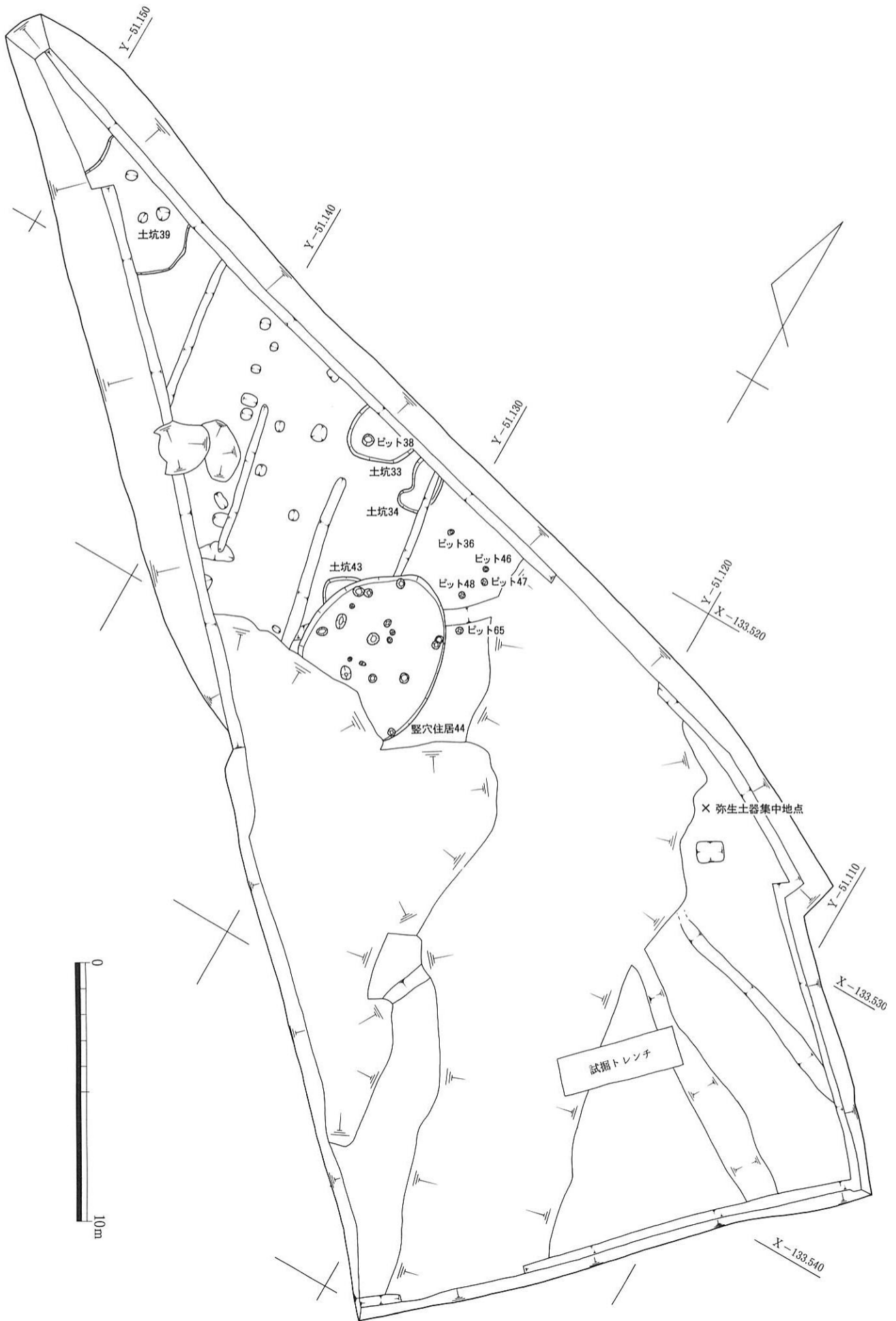
南西から北東に延び、溝7の西岸の上端部で北に方向を変えたのちはその西岸肩部とほぼ平行して走り、調査区北壁に至る。その南端は近年の攪乱によって破壊されている。確認長12m、幅70cm、深さ48cmを測り、断面はU字形を呈する。埋土は灰褐色～黒褐色シルトで流水堆積は認められなかった。埋土からは弥生時代後期の土器片のほか、古墳時代後期（中村編年Ⅱ-4頃）の坏蓋片（第18図65）が1点出土している。前者は竪穴住居44埋土からの混入であろう。

時期は、奈良時代の土器棺11と、古墳時代後期後半～末に堆積したとみられる溝7中層に切られ、庄内期とみられる竪穴住居44を切っていること、あるいは出土遺物などからみて、古墳時代後期後葉と考えられる。

土器棺11（第9、13図） c 4-Ⅳ区で、3層掘



第12図 土器棺11・45実測図



第13図 下面遺構全体図



削時に確認した甕2個体からなる合わせ口の土器棺である。本来は東側の甕(第18図67)の口縁部を西側の甕(第18図66)のそれに挿入するかたちで、北東-南西方向に横位で並べられていたようだが、上方からの圧力でその上半は内部に落ち込んでいた。掘方は検出時で長さ40cm、幅28cmを測り、土坑底はほぼ水平であった。深さは復原した甕の直径などから推して30cm程度であったとみられる。副葬品など他の遺物は全く認められなかった。奈良時代のものとみられる。

**土器棺45**(第9、13図) c3-Ⅲ区で、堅穴住居44の埋土掘削時に確認した土器棺である。検出時はその上半部が割れて内側に落ち込んでいたが、本来は高さ約30cmの完形の甕を、口縁を南東方向に向けて横位に据えていたと考えられる。掘方は確認できなかったが、復原した土器棺の直径から推してその深さは30~40cm程度であろう。副葬品、骨片などは確認しなかった。時期は古墳時代前期(布留期後半)である。

**調査区西端のピット群**(第9図) 調査区の西端、b4、5~c4、5区で確認したピット群である。その数は十数個を数え、規模は直径50cm前後、深さ10~20cmのものが大半を占める。埋土は黒褐色シルトで充填されていた。その平面形は隅丸方形を呈するものが多い。出土遺物からみて奈良時代の遺構と考えられる。その性格はよくわからないが、平面形から柱穴の可能性も考えられよう。ただ平面、断面の観察から木柱あるいはその痕跡を確認することはできなかった。(山元)

### (3) 下面遺構

**堅穴住居44**(第12~14図) c3-Ⅲ~c4-Ⅱ区で検出した堅穴住居跡である。当初4層上面で検出した際、土器細片が集中することからその範囲の把握に努めたが、比較的容易に判明した西半分の輪郭に対して、東半分は極めて不明瞭であった。そこで住居跡内に直行する2本のサブトレンチを設定し、壁溝の検出を試みたが、東西トレンチ西端で確認するに留まった。なお住居跡南端部分は攪乱による破壊を受けていた。最終的に確認した規模は、東西5.5m、南北5.5mの不整円形を呈し、深さ約15cmを測る。明瞭な輪郭を検出した北側から西側にかけて幾分角張ることを重視するならば、多角形住居であった可能性も否定できない。住居跡内埋土は、にぶい黄褐色礫混じりシルトの単一層で、周辺の基盤層(4層)と非常に似ているため、床面あるいは同面上における柱穴などの検出作業は困難を極めた。最終的には床面を掘り下げることによって柱穴16個を検出したが、それらの規模・深さとも一様ではなく、配列も極めて不規則であった。また住居南端の攪乱と接するところを精査した際、貼床と思しき層厚2cm程度の浅黄色土を確認したが、他の部分では同様の施設は認められなかった。なお住居廃絶後、古墳時代後期の溝59が住居跡北東部から南西部に向かって掘削された。

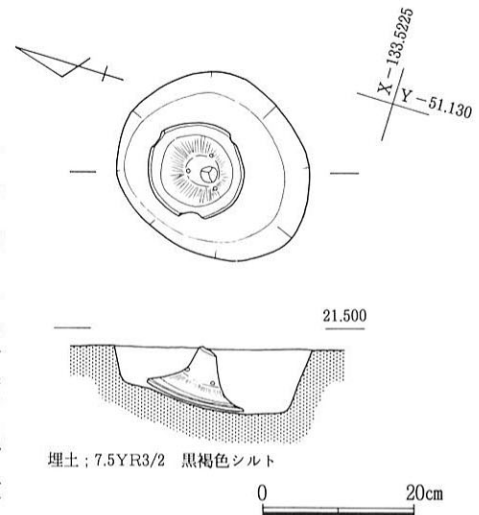
遺物は、床面直上で出土したほぼ完形の高坏坏部(第18図71)以外はすべて住居埋土中から出土し、V様式系の甕の細片が多い。(駒井・山元)

**土坑39**(第12図) 調査区最西端で確認した深さ数cmの浅い土坑である。その南北両端は調査区外に延びるため全体の規模は明らかにできなかったが、南北長2.8m以上、東西長は5.0mを測る。埋土は微細な焼土片、炭化物片などを含む黒褐色シルトである。遺物は土師質の土器片を少量確認したにとどまる。遺構の性格については、その埋土中の焼土片、炭化物片などを重視するならば本来堅穴住居であった可能性も否定できない。

**土坑43**(第12~14図) c4-Ⅳ区においてその大半を堅穴住居44に切られる形で検出した土坑である。確認長1.7m、同幅60cm、深さ12cmを測り、埋土には褐灰色シルトが充填されていた。遺物は出土

していない。遺構の性格は、土坑南東隅部がほぼ直角であることから方形の竪穴住居の可能性もある。

**土坑34**（第12図） c 4 - I 区で確認した不整形な浅い落ち込み状の土坑である。調査区北壁側溝、溝15に切られているが、本来の規模は南北長2.3m、幅1.3mほどであったと考えられる。深さは約10cmを測る。埋土には礫の混じる黒褐色シルトが充填されていた。近江系の甕片（第18図82）をはじめとした古墳時代初頭（庄内期）の土器が出土している。なお西接する土坑33から遺物は出土していないものの、浅い落ち込み状を呈する点、あるいは埋土の質が似る点などから考えて、土坑34と同一の性格を有する遺構と考えてよいだろう。



第15図 ピット36実測図

**ピット36、46～48、65**（第12、15図） c 3 - II ~ c 4 - I 区にかけて検出したピット群である。直径20cm、深さ10cm程度を測り、埋土はいずれも黒褐色シルトである。ピット36から庄内期とみられる高坏脚部が、正位で出土し（第18図81）、ピット65からは布留式の壺片（同83）を確認した。これらのピットは竪穴住居44に伴う何らかの施設の可能性があるが、ピット65出土の壺は若干時期が下るかもしれない。

**弥生土器集中地点**（第12図） c 3 ~ 4 区、溝7東岸やや東方の4層上面において、弥生後期前半の土器（第18図84～87）が集中する個所を確認した。調査時には明確な遺構は検出できなかったが、その確認地点が溝7によって3層さらには4層の上半が大きく削られたところであることを考慮するならば、本来何らかの遺構が存在した可能性が高い。（山元）



第2表 遺構一覧表

番号	種類	遺構面	地区	計測値 (cm)			埋土	備考
				長径	短径	深さ		
1	溝	上面	A12b5・c5	390	22.5	5	2.5Y4/2暗灰黄色シルト (粘質弱い)	土師器小片2片含む。最大1.5cm大の小石わずかに含む。
2	溝	上面	A12c3	300	30	2	2.5Y4/2暗灰黄色シルト?	
3	溝	上面	A12c2・d2	735	25	5	2.5Y4/2暗灰黄色シルト (粘質弱い)	マンガン含む。攪乱により南端不明。
4	溝	上面	A12c2・d2	750	21.5	2	2.5Y4/2暗灰黄色シルト (粘質弱い)	北端を側溝に切られる (調査区外に続く可能性有)。
5	溝	上面	A12c2・d2	920	30	3	2.5Y4/2暗灰黄色シルト (粘質弱い)	東側調査区へ続く。
6	溝	上面	A12c2・d2	680	25	3	2.5Y4/2暗灰黄色シルト?	
7	溝	中面	A12c2・d2・c3・d3	2650	550	180	断面図参照	北端・東端とも調査区外に続く。
8	溝	中面	A12c3-Ⅲ・Ⅳ	350	140	16	10YR6/1褐灰色砂質土	溝7西肩(テラス)部の段状の浅い溝。攪乱により南端切られる。
9	井戸	中面	A12d2	200	170.2	230	断面図参照	溝7埋没後すぐに掘削。上面土師器(奈良時代前半)含む。
10	溝	中面	A12d2・d3	157.5	50	36.2	10YR3/2黒褐色細砂 7.5YR3/1黒褐色粘土	
11	土器棺	中面	A12c4-Ⅳ	40	28	9.5	10YR2/2黒褐色シルト	奈良時代の小形甕2個、口縁部を合わせる。
12	溝	中面	A12b5-Ⅳ A12c5-Ⅰ	560	34	10	7.5YR3/2黒褐色シルト	ほぼ南北にのびる。土師器・須恵器片含む。
13	溝	中面	A12c4-Ⅱ・Ⅳ	570	34	10	10YR2/3黒褐色シルト	土師器片含む。2~3cm大の小石含む。ほぼ南北にのびる。
14	溝	中面	A12c4-Ⅰ・Ⅳ	690	41	11	10YR2/3黒褐色シルト	土師器・弥生土器含む。ほぼ南北にのび、北端側溝に切られる。
15	溝	中面	A12c4-Ⅰ・Ⅳ	895	27	9	10YR2/3黒褐色シルト	土師器・弥生土器含む。ほぼ南北にのびる。
16								欠番
17	ピット	中面	A12b5-Ⅳ	44	36	10	10YR3/2黒褐色シルト	土師器片含む。
18	ピット	中面	A12b4-Ⅲ	36	32	13	10YR3/2黒褐色シルト	
19	ピット	中面	A12c4-Ⅱ	40	38	11	10YR3/3暗褐色シルト	礫混じり。
20	ピット	中面	A12c4-Ⅱ	50	48	23	10YR3/3暗褐色シルト	土師器片・礫混じり。
21	土坑	中面	A12c4-Ⅲ・Ⅳ A12c5-Ⅰ	220	134	7	10YR3/3暗褐色シルト	
22	ピット	中面	A12c4-Ⅲ	67	40	9.5	10YR3/3暗褐色シルト	礫混じり。
23	ピット	中面	A12c4-Ⅲ	50	36	11	10YR3/2黒褐色シルト	東側、溝13に切られる。土師器片・礫混じり。
24	土坑	中面	A12c4-Ⅲ	140	72	12.5	10YR3/2黒褐色シルト	礫・黄色ブロック混じり。南端側溝に切られる。
25	ピット	中面	A12c4-Ⅲ	62	32	8	10YR2/2黒褐色シルト	南端側溝に切られる。
26								欠番
27	ピット	中面	A12c4-Ⅲ・Ⅳ	42	40	10	10YR3/2黒褐色シルト	土師器片含む。
28	ピット	中面	A12c4-Ⅱ	50	40		10YR3/2黒褐色シルト	下層部5~6cm大の礫やや混じる。
29								欠番
30	ピット	中面	A12c4-Ⅱ	42	34	23	10YR2/1黒色シルト	礫混じり。
31	ピット	中面	A12c4-Ⅱ	70	60	29.5	10YR3/2黒褐色シルト	土師器片・礫混じる。
32	ピット	中面	A12b4-Ⅲ	50	30		10YR3/2黒褐色シルト	土師器片含む。北端側溝に切られる。
33	土坑	下面	A12b4-Ⅲ・Ⅳ A12c4-Ⅰ・Ⅱ	250	180	9	10YR3/3暗褐色シルト	大粒礫混じり。北端側溝に切られる。
34	土坑	下面	A12c4-Ⅰ	180	85	9	10YR2/2黒褐色シルト	土師器・礫混じり。溝15・北端側溝に切られる。
35								欠番
36	ピット	下面	A12c3-Ⅱ	25	24	8.5	7.5YR3/2黒褐色シルト	高坏脚部1つ含む。
37	ピット	中面	A12c4-Ⅱ	60	44	10	10YR3/3暗褐色シルト	土師器片有。検出時ピット20北半としていたが、ピット37に変更。
38	ピット	下面	A12c4-Ⅰ	42	38	10	10YR3/1黒褐色シルト	下層部に礫混じる。
39	土坑	下面	A12b5-Ⅲ・Ⅳ	510	200	9	10YR3/1黒褐色シルト	北端・南端とも側溝に切られる。
40	ピット	中面	A12b5-Ⅲ	49	37	9	10YR2/2黒褐色シルト	土師器片・礫・炭含む。
41	ピット	中面	A12b5-Ⅲ	36	33.5	20.5	10YR3/2黒褐色シルト	土師器片・炭含む。方形プラン。
42	ピット	中面	A12b5-Ⅲ	53.5	50	17	10YR2/2黒褐色シルト	土師器片・炭・礫含む。
43	土坑	下面	A12c4-Ⅳ	170	60	12	10YR4/1褐灰色シルト	住居44に切られる。
44	住居	下面	A12c3-Ⅱ・Ⅲ A12c4-Ⅰ・Ⅳ	620	530	23	断面図参照	
45	土器棺	中面	A12c4-Ⅳ	33.5	28.5	20	10YR4/3にふい黄褐色礫混じりシルト	布留式甕。
46	ピット	下面	A12c3-Ⅱ	19	18	8	10YR2/2黒褐色シルト	土師器片含む。
47	ピット	下面	A12c3-Ⅱ	24	22.5	8.5	10YR2/2黒褐色シルト	礫混じり。
48	ピット	下面	A12c3-Ⅱ	22	22	9	10YR3/1黒褐色シルト	
49	ピット	中面	A12c3-Ⅱ	19	18	10	10YR2/2黒褐色シルト	
50	ピット	中面	A12c3-Ⅱ	39	27	13	10YR3/2黒褐色シルト	
51								欠番
52	ピット	中面	A12c3-Ⅱ	50	23	4.5	10YR3/2黒褐色シルト	
53	ピット	中面	A12c3-Ⅱ	32	15	6.5	10YR3/2黒褐色シルト	

54									欠番
55	ピット	中面	A12c3-II	23	20	2	10YR3/2黒褐色シルト		
56	ピット	中面	A12c3-II	30	20	4	10YR3/2黒褐色シルト		
57	ピット	中面	A12c3-II	24	17	10	10YR3/2黒褐色シルト		
58	溝	中面	A12c3-II	640	82	10	10YR3/2黒褐色シルト		溝7西肩(テラス)部の段状の浅い溝
59	溝	中面	A12c3-II・III A12c4-IV	1100	70	48	10YR3/2黒褐色シルト		マンガン多い。土器片含む。
60	土坑	中面	A12c2-III・IV	120	80	10	10YR3/2黒褐色シルト		下層に礫混じる。
61	ピット	中面	A12c2-IV A12d2-I	74	60	19	10YR3/2黒褐色シルト		炭・土器片・黄褐色ブロック混じる。底に炭多く入る。
62	ピット	下面	A12c3-III	30	25	23	10YR3/2黒褐色シルト		礫少量含む。住居44内。
63	ピット	下面	A12c3-III	32	23	22	10YR4/1褐灰色シルト		ピット63に切られる。住居44内。
64	土坑	中面	A12d2-III A12d3-IV	154	136	43	上層：10YR2/2黒褐色砂礫層 下層：10YR3/4暗褐色砂礫層		溝7内。
65	ピット	下面	A12c3-III	23	22	18	7.5YR2/2黒褐色シルト		0.5~1cm大の石混じる。布留式壺含む。
66	ピット	下面	A12c4-IV	44	39	9.5	10YR3/2黒褐色礫混じりシルト(粘質)		住居44内。
67	ピット	下面	A12c4-IV	27	22	8.5	10YR3/2黒褐色礫混じりシルト(粘質)		住居44内。
68	ピット	下面	A12c4-IV	18	16	5.5	10YR3/2黒褐色礫混じりシルト(粘質)		住居44内。
69	ピット	下面	A12c4-IV	57	34	54	10YR2/2黒褐色礫混じりシルト(粘質)		住居44内。両側は柱の抜き取り跡か？
70	ピット	下面	A12c4-IV	36	30	6	10YR3/2黒褐色礫混じりシルト(粘質)		住居44内。
71	ピット	下面	A12c4-I・IV	38	37	13	10YR3/1黒褐色礫混じりシルト(粘質)		住居44内。
72	ピット	下面	A12c4-V	30	25	26	10YR3/2黒褐色礫混じりシルト(粘質)		住居44内。
73	ピット	下面	A12c4-V	21	20	21	10YR3/2黒褐色礫混じりシルト(粘質)		住居44内。
74	ピット	下面	A12c4-V	24	20	33	10YR2/2黒褐色礫混じりシルト(粘質)		住居44内。
75	ピット	下面	A12c4-V	23	17	7	10YR3/2黒褐色礫混じりシルト(粘質)		住居44内。
76	ピット	下面	A12c4-V	50	40	23	10YR3/1黒褐色礫混じりシルト(粘質)		住居44内。
77	ピット	下面	A12c3-III A12c4-IV	28	28	20	10YR3/2黒褐色礫混じりシルト(粘質)		住居44内。
78	ピット	下面	A12c3-III	36	34	16	10YR3/3暗褐色礫混じりシルト(粘質)		住居44内。
79	ピット	下面	A12c3-III A12d3-II	27	25	8	10YR4/3にぶい黄褐色礫混じりシルト(粘質)		住居44内。
80	溝	中面	A12d2-II・IV A12d3-III	1130	150	30	上層：10YR3/2黒褐色シルト 下層：10YR4/2灰黄褐色中~細砂		西端は溝7で切られる。東端は調査区外へ続く可能性あり。
81	溝	中面	A12d2-I・II A12d1-II	870	52	8	10YR3/2黒褐色シルト		西端は攪乱で切られる。
82	ピット	下面	A12c4-IV	15	10	6.8	10YR3/2黒褐色礫混じりシルト(粘質)		住居44内。
83	ピット	下面	A12c4-IV	47	42	15	10YR2/3黒褐色礫混じりシルト(粘質強い)		住居44内。

### 第3節 出土遺物

#### (1) 遺構出土遺物

遺構出土の遺物は第3表の通りであり、大半が溝7の出土である。以下主要な遺構の遺物について列挙していく。

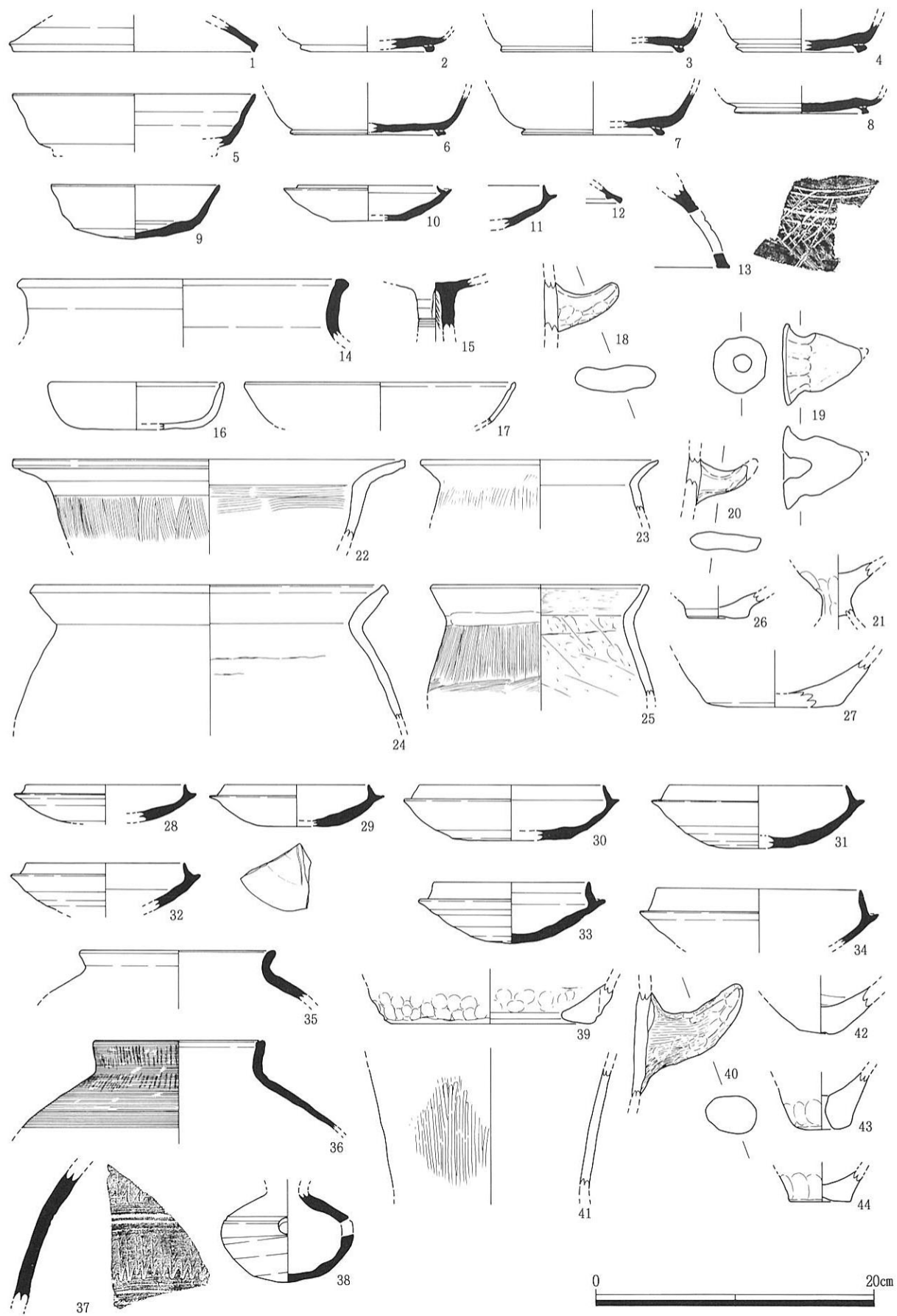
溝7 (1~60) (1~27) は上層、(28~44) は中層、(45~60) は下層 (最下部を含む) 出土である。

上層出土遺物 (1~15) は須恵器である。(1・12) は坏蓋。(1) は器高がやや高めで下端部をつまみだし気味におわり、(12) は小破片で短小なかえりを有する。(2~11) は坏。(2~4・6~8) はやや外側に開いた高台をもち、接地面も丁寧にナデを施す。大半は底部外寄りに高台が付き、坏部は緩やかに外反するが、(7) の高台は底部内寄りで坏部はやや丸みを帯びる。(5) はごくわずかに高台部分が残る。(13) は器台脚裾部。縦方向の長方形のスカン孔をもつ。外面は回転ナデののち沈線を施し、さらに斜方向の格子状へら描き文を乱雑に施す。(14) は甕。口縁部1/12未満の小破片で口縁は直立気味に外反する。(15) は高坏脚部。脚柱内面には絞り目がみられる。外面は回転ナデののち2条の沈線を施す。坏との接合部分に長さ2cmほどの縦方向の切込みが2ヶ所対角上にみられる。

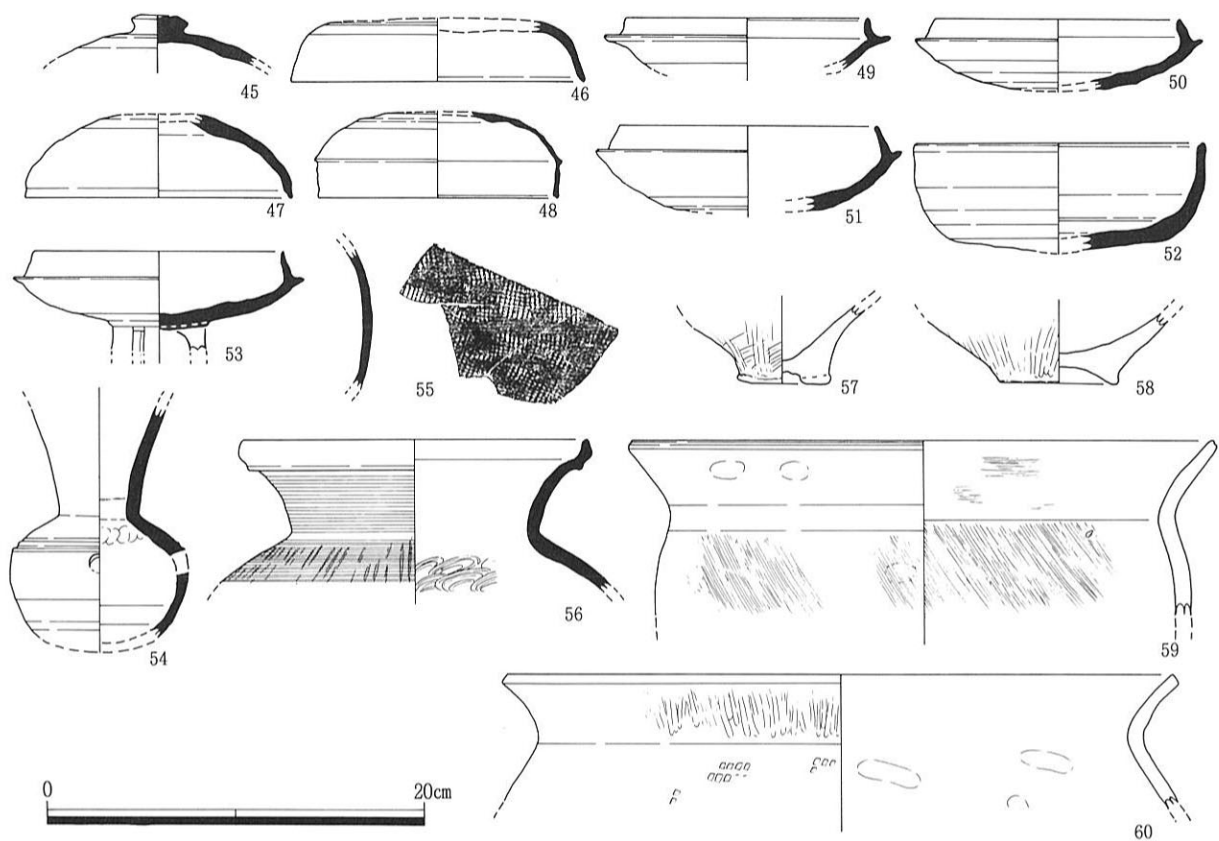
(16~25) は土師器である。(16・17) は坏。どちらも摩滅が著しく調整不明であるが、口縁端部を

第3表 遺構出土遺物一覧表 (破片数)

遺 構	須恵器 8c	須恵器 7c	須恵器 6c	須恵器 5c	須恵器 その他	須恵器 「生焼」	黒色土器 A類	土師器 8c	土師器 古式	土師器 その他	V様式 庄内含	II~IV 様式	弥生 その他	合計
土器棺11	2													2
土器棺45										38	2		2	42
土坑21	1									19	1		2	23
土坑24		1								3				4
土坑34										61	5		3	69
土坑39					2	2				38				40
土坑43										10				10
ビット17					1					11				12
ビット20					2	1				33				35
ビット27										1	1			2
ビット30					2					9				11
ビット31					2					39				41
ビット36											1			1
ビット37								1		4				5
ビット40										4				4
ビット42		1			1	1		5		13				20
ビット46										1				1
ビット47										5				5
ビット49										1				1
ビット57										1				1
ビット61					1					10				11
ビット62										4				4
ビット65										1				1
井戸9	1	2		1	5	3		1		39				49
住居44					5	2				332	65		142	544
溝1										1				1
溝7 上層	13	12	14	2	226	30	1	34		771	25	2	1	1101
中層		11	40	1	310	28		1		422	20		16	821
下層			41	8	102	17			1	138	18	1	10	319
最下部			3	4	1	3			1	13			2	24
「テラス」		1	2	1	40	4		2		237	40		37	360
溝8						1				23	2			25
溝10										3				3
溝12	2									23				25
溝13										8				8
溝14					3	1				53				56
溝15					2					44	3		2	51
溝58	1				1	1				41	7			50
溝59			1							48	11		9	69
溝80			5		12	1				21				38
溝81					3					3				6
合計	20	28	106	17	721	95	1	44	2	2526	201	3	226	3895



第16图 出土遺物実測图(1)



第17図 出土遺物実測図(2)

やや巻込んだ形跡がみられる。(18~20)は把手。(19)は先端が欠損し、内面中央には円錐形の窪みがある。(21)はミニチュア高坏。(22)は埴。体部内面に横ハケを施すが、体部上方以下ハケをナデ消す。(23~25)は甕。(23)は口縁端部にわずかに面をなし、頸部内面の屈曲はややシャープである。体部外面に下から上方向の粗いハケを施し、その一部は口縁部に及ぶ。(24)は摩滅が著しいが、口縁端部は上端をつまみ出し、明瞭な面をもつ。(25)の内面は口縁部に横ハケ、体部に下から上方向のケズリを施す。外面は体部上半を上から下方向のハケを、体部下半に横ナデを施す。

(26・27)は弥生土器で、甕・鉢あるいは壺の底部である。

**中層出土遺物** (28~38)は須恵器である。(28~34)は坏。(28・29・32)はいずれも短く内傾した立ち上がりをもつ。(29)は底部外面にヘラ記号のような浅い線刻がみられる。(33)は坏部外面中央にケズリを施す。(34)は直線的でやや内傾した長めの立ち上がりをもつ。(35・36)は壺の口頸部。(36)は直立した口頸部をもち、端部は面をもつ。外面は口頸部及び体部上方に縦方向のタタキののち、カキメを施す。(37)は甕の口頸部。波状文と2条一組の沈線を交互に配す。(38)は甕。体部最大径よりやや上に沈線1条を施したのち、復原径1.3cmの孔を穿つ。

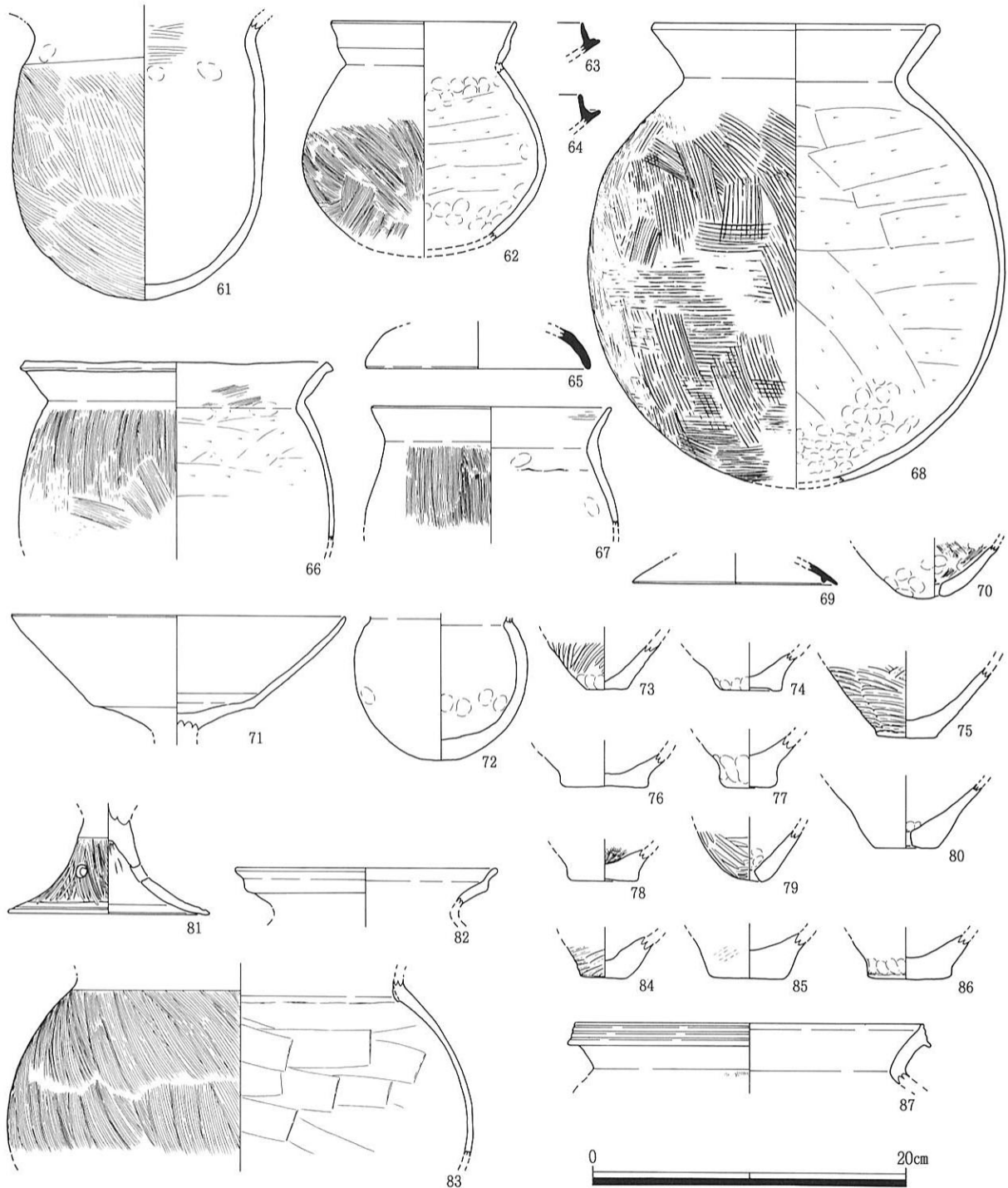
(39・40)は土師器である。(39)は甕底部。内外面に指オサエを施し、底部中央に直径10.4cmの孔をもつ。(40)は把手。

(42)は庄内期末の甕の底部。全体的に丸みを帯び凹凸は激しいが、わずかに平底である。

(41・43・44)は弥生土器。(41)は生駒西麓産胎土の長頸壺である。(43)は甕の底部、(44)は甕の底部である。いずれも体部下端に指オサエを施す。

**下層出土遺物** (45~56)は須恵器である。(45~48)は坏蓋。(45)は擬宝珠つまみを有す。(48)





第18図 出土遺物実測図(3)

は全体的に器壁が薄い。体部と口縁部の境にしっかりした稜を、端面は内傾した凹面をもつ。(49~52)は坏。(49)は折り込みによって外弯した立ち上がりをもつのに対し、(50・51)はやや内弯気味である。(53)は有蓋高坏で、脚部に3方スカシ孔を有し、その成形時の切込みがみられる。(54)は甗。外面はやや肩の張った球形の体部の肩部に沈線1条を施し、肩部直下に復原径1.1cmの孔を穿つ。内面は頸部下方に指オサエを施す。(55・56)は甕。(55)は体部外面に格子タタキののちカキメを施す。内面は丁寧なナデで当て具痕を擦り消す。(56)は口縁端部を強くつまみあげ、下端部もややつまみ出す。外面は口縁部にカキメを、体部は縦方向のタタキののちカキメを施す。内面には同心円状の当て具痕を残す。

(59・60)は土師器の甕である。(59)は口縁端部に面をなす。外面は体部に斜め方向のハケを施したのち頸部に指ナデを加える。内面は口縁部に横ハケのあとナデ消し、体部に下から上方向のハケを施す。頸部付近に粉殻痕がみられる。(60)は溝7の底面にはりついたかたちで出土した。外面は口縁に下から上方向のヘラミガキを施し、体部には格子タタキののち横ナデを施す。胎土は他の土器に比べ、チャートの含有量が多い。韓式系土器の可能性が高い。

(57・58)は弥生土器の壺である。(57)は外面にタタキののちヘラミガキを下から上に施すが、タタキが部分的に残る。底部は輪台技法による成形と思われる、ドーナツ状を呈する。(58)はやや凹んだ底部をもつ。

遺物の時期は、時期不明の破片が多いため一概にいえませんが、上層は概ね中村編年のⅢ-3~Ⅳ(7世紀末~8世紀前半)、中層は概ね中村編年Ⅱ-3~5(6世紀半ば~後半)、下層は中村編年Ⅱ-2~3(6世紀中頃)が主体である。しかし、下層においては(48)のように中村編年Ⅰ-4(5世紀後半)のものもみられ、図示し得なかったものも含め、5世紀代のもものが少ないながらも存在する。

なお、各層より弥生土器が出土しているが、(26・43・44)はV様式の後半~末、(57)はV様式後半、(41)はV様式前半で、(27・58)はIV様式の様相をもつが、V様式の所産と思われる。

**井戸9(61)** 奈良時代の甕。口縁部は欠損している。全体的に肉厚で重量感がある。底部外内面ともに煤の付着がみられるため、煮炊きに使用したのち、釣瓶に転用したのであろう。

**溝80(62~64)** (63・64)は須恵器の坏の細片。(64)は全体的に薄手で、焼成不良のためやや暗い灰赤色をなす。(62)は小形の甕。口縁部は内弯気味に立ち上がる。外面は体部上方をナデ、下方にハケを施す。体部内面の調整は三分割でき、上方と下方に指オサエを施し、残りに横方向のケズリを施す。復原口径11.6cm、復原体部最大径15.4cmを測る。(63・64)を共伴することから、中村編年Ⅱ-4前後のものであろう。

**溝59(65)** 須恵器坏蓋で、中村編年Ⅱ-4に属する。

**土器棺11(66・67)** 奈良時代の甕。(66)は口縁に平坦な面をもち、口縁下端部をつまみ出す。体部外面にハケを施すが、下方はかなり摩滅する。内面は口縁部が摩滅しているが、ハケメが残り、体部は右から左方向にケズリを施す。復原口径19.0cmを測る。(67)は全体的に摩滅し、特に口縁部は著しい。体部外面にハケを施す。内面は口縁部にハケが一部残存し、体部にはナデを施すが接合痕・指頭圧痕が残る。復原口径15.2cmを測る。

**土器棺45(68)** 布留式の甕。口縁部は体部から緩やかに外反し、口縁端部はやや丸みをもって肥厚する。器壁が厚く、やや長胴化しており、焼成もあまい。外面は体部に多方向の粗いハケを施す。内面は体部に左から右、下から上方向のケズリを上2/3に、下方1/3に指オサエを施す。口径18.2cm、復原高29.5cm、体部最大径26.5cmを測る。布留期後半、米田編年布留Ⅳ期のものと思われる。

**土坑24(69・70)** (69)は須恵器坏蓋。中村編年Ⅲ-2~3に属す。(70)は甗の底部。かなり球形に近い。径0.7cmの孔をもつ。内面に多方向のハケ、外面は底部にケズリ、体部に上方向へのナデを施す。布留式直前のもものとみられ、米田編年庄内Ⅴ期に相当する。

**竪穴住居44(71~80)** (71)は高坏坏部。摩滅が著しく調整は不明である。坏部は稜をもって屈曲し、外上方に向って直線的に緩やかに開く。器壁は全体的に薄い。(72)は小形壺。球形に近く、わずかに平坦な面をもつ。底部外面は不調整である。(73~78)は甕もしくは鉢の底部。(73・75)は外面にタタキを施し、内面に強いナデを施す。(74・76~78)はやや突出した底部をもち、伝統的なV様式の

系譜をひく。(74)は輪台技法による底部形成か。(78)は内面にくもの巣状のハケメを施す。(79・80)は甗。(79)は球形に近いごく小さな平底をもち、外面はタタキを施す。

甗・鉢・壺など伝統的V様式の系譜をひく底部が多くみられるが、これは摂津において庄内期後半～末まで残る傾向がある。底部の中にはまだ完全球形のものはみられないものの、球形に近いものが存在する点、高坏の坏が直線的に開く点などは、庄内期の新しい様相を含む。したがって、遺物の時期は庄内期後半～末になるかと思われる。

ピット36(81) 弥生終末期～庄内期前半の高坏脚部。脚柱部から裾部に向ってなだらかに広がりラッパ状に開く。外面に縦方向のヘラミガキを施し、円孔を3方に配す。

土坑34(82)は搬入土器。近江系受口状口縁の甗である。受口がかなり退化している。時期的には列点文消滅後の庄内併行期のものであろう<sup>1)</sup>。

ピット65(83) 布留式の壺か。体部のみ残存する。外面は摩滅が激しいが丁寧なハケを施したのち、頸部に横ナデを施す。内面はケズリを施して器壁を薄くし、横方向に強いナデを施す。頸部内面に接合痕が顕著に認められる。布留期前半のものと思われる。

溝7東岸弥生土器集中地点(84～87) V様式の甗である。(84～86)はやや突出した底部をもつ。(87)は口頸部の破片。やや内傾する口縁端面をもち、上下端をつまみ出す。端面に擬凹線を施す。摂津V-0の所産であろう。

## (2) 3層上面・3層出土遺物

当調査区において遺構外出土遺物は第4表のとおりである。以下、3層上面及び3層の主だった遺物を列挙していく。なお、3層上面の遺物は、3層の遺構検出を目的とした精査時出土のものであり、大半は3層に包含されるが、本来2層下部に含まれていたであろう中世遺物も少ないながら認められる。

3層上面(88～114) (88～101)は古墳時代後期～奈良時代の須恵器である。(88～97)は坏。(88)は坏部にヘラ描きのような焼成前の線刻がみえるが、ヘラ描き文ではなく、半乾き時についた傷と思われる。(97)は焼成不良で橙色を呈する。(98～100)は甗。(98)は口縁下端部を折り返す。(99)は口縁部に幅広の凹線2条と波状文を施す。(100)は口頸部で外面にカキメ、波状文、沈線3条を施す。(101)は壺の底部。

(102)は瓦器碗である。高台は「ハ」の字状に開く。12世紀前半のものであろう。

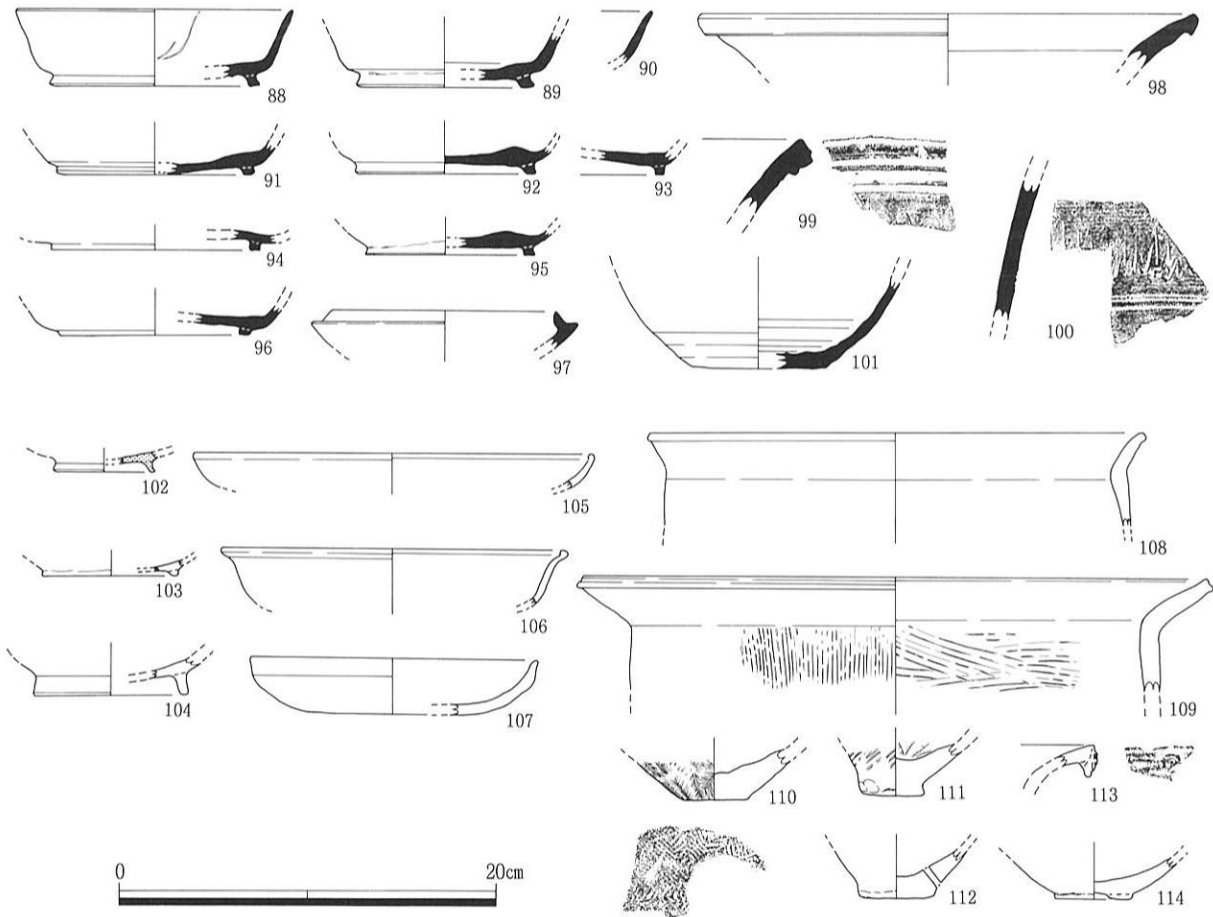
(103～109)は土師器である。(103・104)は碗。(103)の高台は小さい。(104)は丈長でしっかりとした高台をもち、接地面にナデを施す。(105)は奈良時代の皿。やや内弯気味に開き、口縁端部をやや巻き込む。(106・107)は奈良時代の坏。(106)は口縁端部近くで強く外反して開き、口縁端部を内側にやや巻き込む。(108・109)は甗の口縁。(109)は口縁端部に面をもち、端面の上端を弱くつまみ出す。頸部の屈曲はきつく、口縁部は強く外反する。

(110・111)は弥生時代後期末～庄内期前半の甗の底部。(110)はいわゆる有茎矢羽根状タタキの甗で、文様は連続しない。底部のため矢羽根の方向は多方向で重複する。このタイプの矢羽根状タタキを有する甗は、淀川・猪名川水系ではV様式系の甗に施文されることが多い。(112)は体部下端部に径5mmの焼成前穿孔が1つみられ、甗かと思われる。

(113・114)は弥生土器の壺である。(113)は広口壺の口縁。口縁端部に擬凹線4条を施し、その上に竹管文施文の円形浮文を有す。復原口径18.0cm前後の中形品であろう。大形壺の影響下に摂津V-1

第4表 包含層出土遺物一覧表（破片数）

層位	須恵器 8c	須恵器 7c	須恵器 6c	須恵器 5c	須恵器 その他	須恵器 「生焼」	瓦器	土師器 9c	土師器 8c	土師器 7c	土師器 その他	V様式 (庄内含)	弥生 その他	合計
表採		1			2	1					12	4		19
側溝	7	4	1		89	9			11		520	82		714
2層					1						3			4
2層下部	14		2		182	26	2		16		393	50		659
3層上面	7	3	2		112	12	3	1	2		433	184		747
3層	9	20	17	1	209	30			65	1	1749	117	72	2260
合計	37	28	22	1	595	78	5	1	94	1	3110	437	72	4403

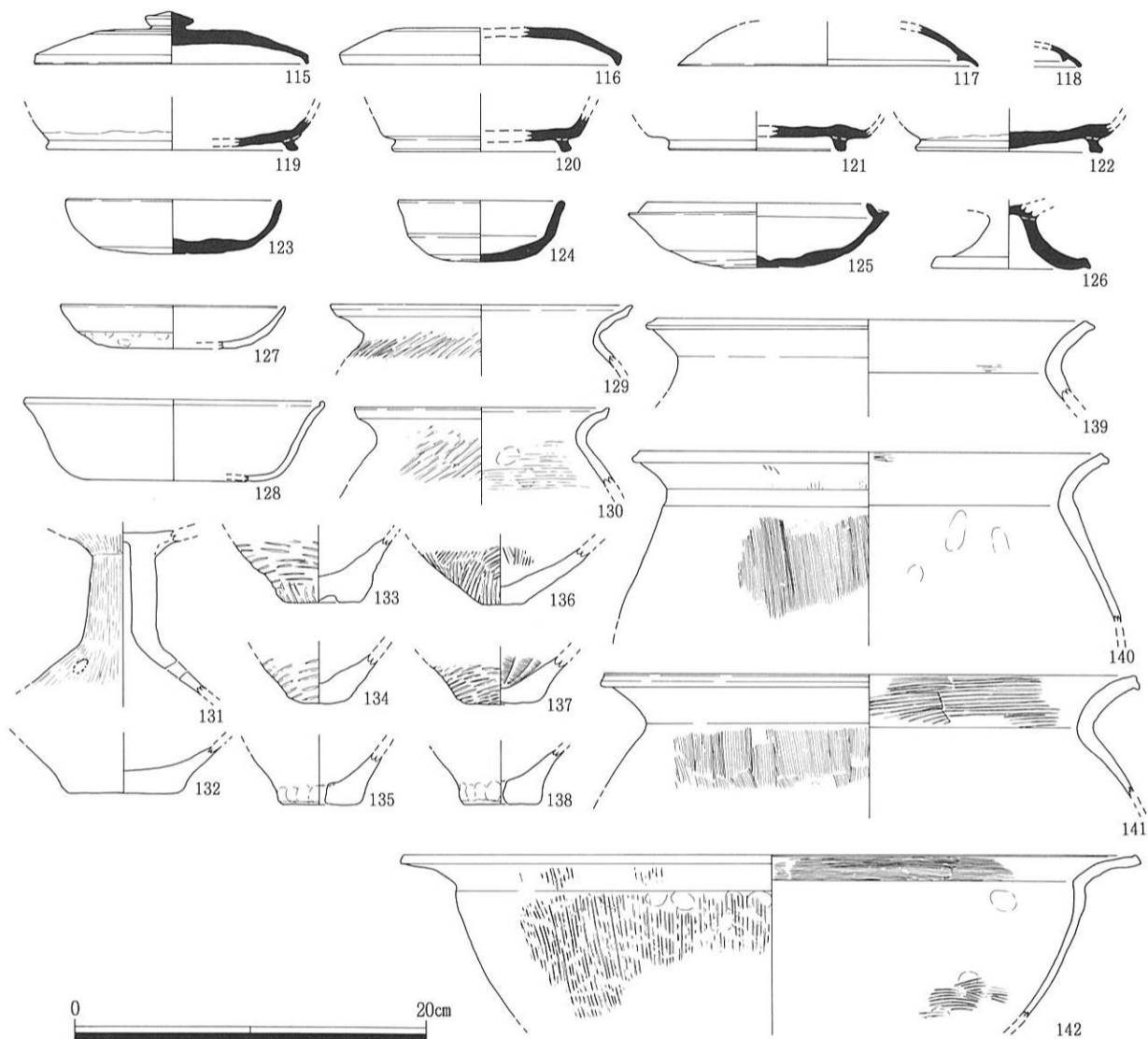


第19図 出土遺物実測図（4）

で成立したと思われる、口縁下端部に粘土帯を付加して拡張する手法及び口縁部の施文パターンをもつ。(114)の底部は輪台技法によって作られ、やや突出している。

3層(115~142) (115~126)は須恵器である。(115~118)は坏蓋。(115)は宝珠つまみを有し、(117・118)は小さなかえりを有す。(119~121・123~125)は坏。(119~121)は高台をもつ。高台が坏底部外側に寄るもの(119・120)とやや内側に寄るもの(121)がある。(124)は小形品。(122)は台付壺の底部。外側へやや開く高台がつく。(126)は高坏脚部。脚下端部をつまみ出して横ナデを施す。

(127・128・131・139~142)は土師器である。(127・128)は奈良時代の坏でどちらも摩滅が激しい。(127)は外面を指オサエののちナデを施す。(128)は口縁端部をやや巻き込む。(131)は古墳時代の高坏脚部。外面に縦方向のヘラミガキを施し、内面は棒状工具によると思われる調整痕が残る。内面から径0.9cmほどの円孔が認められるが、脚部の欠損が多いために外面からは確認できず、断面にて確認し得るのみである。脚部と坏部の接合部に円盤充填はみられない。(139~141)は奈良時代の甕。いずれ



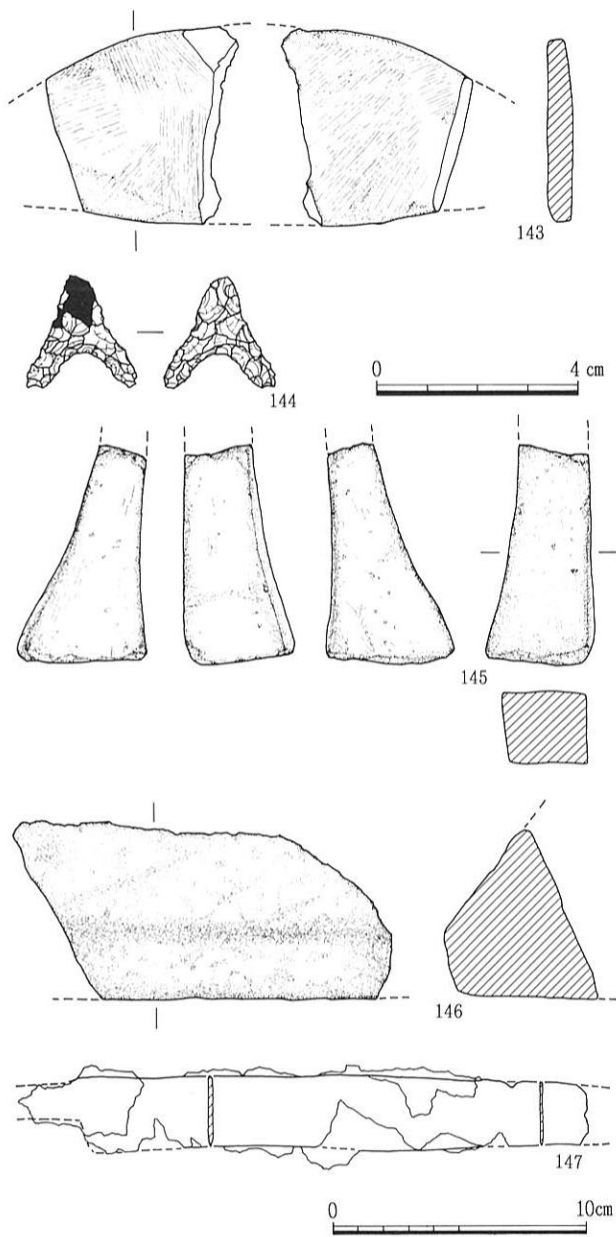
第20図 出土遺物実測図（5）

も口縁端部は面をもち、下端部をつまみ出す。(139)は摩滅が著しい。(140・141)は口縁内部、体部外面にハケを施す。(142)は奈良時代の埴である。口縁端部は上端部をやや巻き込む。外面は口縁から体部に粗いハケを施し、口縁部のハケはナデ消す。内面は口縁部に横ハケを施し、体部に粗いハケを施したのちナデ消す。復原口径41.4cmを測る。

(129・130・133～138)は弥生時代後期末～庄内期前半にかけての土器である。(129・130)は口縁叩き出し技法による。(133)はタタキを体部外面に施したのち、底部にも施す。なお、底部のタタキは体部上に及ぶ。(136)は小さな平底を有し、体部外面には細かいタタキを施す。(137)は内面にくもの巣状ハケ目を施し、弥生的様相が強い。(135・138)は甗である。

(132)は弥生土器の底部。IV様式の様相を残すがV様式の範疇に入ると思われる。





第21図 出土遺物実測図(6)

(147)は短刀である。残存長22.5cm、最大幅2.8cm、身部幅1.2mmを測るが、本来の身部長は25cm前後であったと推測される。両端部と刃部の一部が欠損する。全体に錆化が進み、特に関部と身部中位で顕著である。c 3-IV区3層上面から出土した。出土層位からみて奈良時代の可能性が高い。

(148)は砂岩製の自然礫である(図版10)。長さ10.6cm、幅4.9cm、厚さ3.6cmのを測り、重さは0.13kgである。一平面のほぼ全体にわたって赤色顔料が付着しており、分析の結果ベンガラであることが判明した(第IV章第2節参照)。堆積層中の鉄分が礫上に流れこんで付着した可能性も考えられるが、その他の各面においても少量ながら認められることから、人為的な付着の可能性を想定したい。ただその本来の用途は不明である。溝7上層から出土した。(山元)

### (3) その他出土遺物

当調査区においてその他の遺物は石製品5点、鉄器1点が出土した。図化し得たのは石製品4点、鉄器1点である。

(143~146)は石製品である。(143)は直線刃外湾背の石庖丁片か。石材はやや接触変成作用を受けた黒色頁岩である。両面に擦痕が大変多くみられるが、側辺は研磨されて面をなし、刃がみられない。破損後転用された可能性がある。3層上面より出土した。(144)はサヌカイト製の凹基式石鏃である。全長2.2cm、最大幅2.2cm、厚さ0.4cmを測り、重量0.93gである。先端が一部欠損している。縄文時代前期のものか。3層の出土である。(145)は中砥の砥石。石材は変質流紋岩で、長側面4面とも使用痕がみられる。溝7上層より出土した。(鈴木)

(146)は、長さ15.0cm、幅6.0cm、高さ6.6cmを測る角尖石黒雲母花崗岩製の石片である。重さは0.7kgである。実測図での両端と一側面は明らかに欠損し、残存部に3面の平滑な面が認められる。すなわち最大幅5.5cmの下面から直角に近い角度で幅2.5cmの側面が続き、さらにその上方に45度の角度で最大幅5.0cmの斜面を作り出している。この石材は一見したところ家形石棺の蓋端部片のようにも見えるが、その石材が同棺では一般的ではない花崗岩であることからみてその可能性は低く、本来の用途は不明といわざるを得ない。溝7中層から出土した。

注1) 森岡秀人氏のご教示によると、断面に黒色芯が観察されることから野洲川左岸域のものであるとのことである。

第5表 出土遺物観察表

番号	種類	出土地点	計測値	残存率	色調	特徴	時期
1	須恵器蓋	A12c3-I 溝7上層	口径17.2cm 残存高2.1cm	全体の10%未満	外)7.5Y6/1灰 内)N6/0灰 断)N6/0灰 10YR6/2灰黄褐	やや「生焼け」	8世紀
2	須恵器 坏B	A12c3-IV 溝7上層	残存高1.1cm (高台径9.6cm)	底部の40%	外)N6/0灰 内)N6/0灰 断)N4/0灰		7世紀後半～ 8世紀
3	須恵器 坏B	A12c3-I 溝7上層	残存高2.1cm (高台径13.0cm)	底部の15%	外)N7/0灰白 内)N7/0灰白 断)N7/0灰白		8世紀
4	須恵器 坏B	A12c3-I 溝7上層	残存高2.2cm 底径8.2cm	全体の10%	外)N7/0灰白 内)N6/0灰 断)N7/0灰白		8世紀
5	須恵器 坏B	A12d3-IV 溝7上層	(口径17.2cm) 残存高3.9cm	全体の10%	外)5B6/1青灰 内)N6/0灰 断)N7/0灰白		7世紀後半～ 8世紀
6	須恵器 坏B	A12d3-I 溝7上層	残存高2.8cm 高台径10.0cm	全体の20%	外)5B6/1青灰 内)N7/0灰白 断)N7/0灰白		8世紀
7	須恵器 坏B	A12c3-IV 溝7上層	残存高3.2cm (高台径10.2cm)	底部の20%	外)5Y8/1灰白 内)5Y8/1灰白 断)5Y8/1灰白	「生焼け」	7～8世紀
8	須恵器 坏B	A12c3-I 溝7上層	残存高1.2cm 高台径8.6cm	全体の20%	外)N6/0灰 内)N7/0灰白 断)N4/0灰		8世紀
9	須恵器 坏A	A12d3-II 溝7上層	器高3.9cm 口径12.0cm	全体の80%	外)7.5Y8/1灰白 内)5Y7/1灰白 断)7.5Y5/1灰	全体的に生焼け状 口縁端部は灰色	7世紀
10	須恵器 坏	A12e2-III 溝7上層	残存高2.6cm (口径10.0cm)	全体の25%	外)7.5Y3/2オリーブ黒 内)N6/0灰 断)10R5/1赤灰	外面 焼成時砂等溶 解付着のため黄色味 帯びる	7世紀初
11	須恵器 坏	A12c3-I 溝7上層	残存高3.1cm (口径14.0cm)	全体の10%	外)N4/0灰 内)N7/0灰白 断)7.5R5/2灰赤	外面 焼成時砂等溶 解付着のため黄色味 帯びる	6世紀末
12	須恵器 蓋	A12d2-II 溝7上層	残存高1.3cm (口径15.0cm)	口縁端部の10%	外)N7/0灰白 内)N7/0灰白 断)N7/0灰白		7世紀末
13	須恵器 器台	A12d3-II 溝7上層	残存高5.8cm (底径26.0cm)	全体の1%未満	外)N7/0灰白 内)N7/0灰白 断)N7/0灰白	4条の沈線ののち格 子状のヘラ描き文を 施文	
14	須恵器 甕	A12d3-III 溝7上層	(口径23.0cm)	全体の10%未満	外)N7/0灰白 内)N7/0灰白 断)N8/0灰白		8世紀?
15	須恵器 高坏	A12d3-II 溝7上層	残存高3.8cm	全体の10%未満	外)N4/0灰 内)N7/0灰白 断)N7/0灰白	脚柱に2ヶ所の切り こみ	7世紀前半
16	土師器 坏A	A12d3-II 溝7上層	(器高3.4cm) (口径12.2cm)	全体の20%	外)5YR7/6橙 内)5YR8/4淡橙 断)5YR7/6橙		8世紀?
17	土師器 坏A	A12c3-IV 溝7上層	残存高3.1cm (口径18.2cm)	全体の10%	外)5YR7/6橙 内)5YR7/6橙 断)5YR7/6橙	磨耗著しく調整不明	8世紀前半
18	土師器 把手	A12c3-I 溝7上層	—	—	外)7.5YR8/6浅黄橙 内)7.5YR8/6浅黄橙 断)7.5YR8/6浅黄橙	上面に煤痕付着	8世紀
19	土師器 把手	A12c3-I 溝7上層	—	—	外)5YR7/6橙 内)7.5YR8/3浅黄橙 断)7.5YR8/3浅黄橙	基部に径1.2cmの円 錐状の窪み	
20	土師器 把手	A12c3-I 溝7上層	—	—	外)5YR7/4にぶい橙 内)5YR5/2灰褐 断)5YR7/6橙		8世紀?
21	土師器 ミニチュア 高坏	A12c3-I 溝7上層	残存高3.9cm	全体の20%	外)10YR8/3浅黄橙 内)10YR7/4にぶい黄橙 断)5YR6/6橙	手捏ね	
22	土師器 埴	A12c3-II 溝7上層	(口径27.8cm) 残存高5.3cm	全体の10%未満	外)10YR5/2灰黄褐 内)7.5YR6/4にぶい橙 断)5YR6/6橙		8世紀
23	土師器 甕	A12d3-II 溝7上層	(口径16.8cm) 残存高3.9cm	全体の10%未満	外)10YR6/2灰黄褐 内)10YR6/3にぶい黄橙 断)7.5YR6/6橙	外面一部黒斑あり	8世紀
24	土師器 甕	A12d3-II 溝7上層	(口径24.8cm) 残存高9.7cm	全体の10%未満	外)7.5YR7/6橙 内)7.5YR8/6浅黄橙 断)10YR8/2灰白		8世紀
25	土師器 甕	A12c3-IV 溝7上層	(口径15.4cm) 残存高6.7cm	全体の55%	外)5YR6/6橙 内)5YR7/6橙 断)5YR6/6橙		8世紀

26	弥生土器 甕か鉢	A12c3-II 溝7上層	残存高1.9cm 底径3.9cm	全体の10%未満	外)10YR3/4暗褐 内)2.5Y5/1黄灰 断)2.5Y8/4淡黄	外面一部黒斑あり 磨耗著しく調整不明	弥生後期
27	弥生土器 甕か壺	A12d3-III 溝7上層	残存高3.4cm (底径9.8cm)	全体の10%未満	外)5YR6/6橙 内)10YR8/3浅黄橙 断)N6/0灰	外面一部黒斑あり	弥生中期末～ 後期前半
28	須恵器 坏	A12d3-I 溝7中層	残存高2.8cm (口径11.4cm)	全体の15%	外)N4/0灰 内)N4/0灰 断)N5/0灰		6世紀末
29	須恵器 坏	A12d3-I 溝7中層	器高3.0cm (口径10.3cm)	全体の20%	外)N6/0灰 内)N7/0灰白 断)N6/0灰	底部外面にへら記号?	6世紀末
30	須恵器 坏	A12d2-III 溝7中層	器高4.0cm (口径13.2cm)	全体の25%	外)N7/0灰白 内)N7/0灰白 断)7.5YR5/1褐灰		6世紀後半
31	須恵器 坏	A12d2-III 溝7中層	器高4.5cm (口径12.7cm)	全体の25%	外)N6/0灰 内)N6/0灰 断)N6/0灰		6世紀後半
32	須恵器 坏	A12d3-I 溝7中層	残存高3.1cm (口径11.3cm)	全体の20%	外)N5/0灰 内)N7/0灰白 断)N6/0灰		6世紀後半～ 末
33	須恵器 坏	A12d2-II 溝7中層	器高4.4cm	全体の40%	外)N5/0灰 内)5P6/1紫灰 断)N6/0灰		6世紀中葉
34	須恵器 坏	A12d3-II 溝7中層	残存高4.0cm	坏部上半の20%	外)N7/0灰白 内)N7/0灰白 断)N7/0灰白		6世紀前半
35	須恵器 壺	A12c3-I 溝7中層	残存高5.2cm	口縁端部の20%	外)N6/0灰 内)N6/0灰 断)N6/0灰		6世紀
36	須恵器 短頸壺	A12c3-I 溝7中層	(口径12.0cm) 残存高6.2cm	体部上半部分の 25%	外)N7/0灰白 内)N6/0灰 断)N7/0灰白		6世紀
37	須恵器 甕	A12d3-I 溝7中層	残存高9.6cm	全体の10%未満	外)N4/0灰 内)5PB5/1青灰 断)5YR5/1褐灰	外面に波状文帯	6世紀
38	須恵器 甕	A12c3-III 溝7中層	残存高7.0cm 胴部径9.4cm	全体の35%	外)N5/0灰 内)N6/0灰 断)N7/0灰白		6世紀後半
39	土師器 甕	A12d3-I 溝7中層	残存高2.9cm 底径15.2cm	全体の10%	外)7.5YR8/4浅黄橙 内)7.5YR8/4浅黄橙 断)2.5Y4/1黄灰	外面一部黒斑あり	5～6世紀
40	土師器 把手	A12d2-III 溝7中層	—	全体の10%	外)7.5YR7/4にぶい橙 内)5YR6/6橙 断)10YR8/4浅黄橙		5～6世紀
41	弥生土器 長頸壺	A12d3-I 溝7中層	残存高8.5cm	全体の40%	外)7.5YR5/4にぶい褐 内)7.5YR5/4にぶい褐 断)10YR5/4にぶい黄褐	生駒西麓産	弥生後期
42	庄内式 甕	A12d3-I 溝7中層	残存高3.4cm 底径2.4cm	全体の10%未満	外)10YR8/2灰白 内)10YR6/1褐灰 断)10YR5/1褐灰	外面一部黒斑あり	庄内後半～末
43	弥生土器 甕	A12c3-III 溝7中層	残存高4.1cm 底径4.0cm	底部完存	外)7.5YR8/3浅黄橙 内)7.5YR8/3浅黄橙 断)10YR6/1褐灰		弥生後期
44	弥生土器 甕	A12d3-I 溝7中層	残存高2.2cm 底径4.2cm	底部完存	外)10YR8/3浅黄橙 内)10YR5/1褐灰 断)10YR8/2灰白		弥生後期
45	須恵器 蓋	A12c3-IV 溝7下層	残存高2.5cm	蓋上半の15%	外)N6/0灰 内)N6/0灰 断)N7/0灰白		6世紀後半
46	須恵器 蓋	A12c3-I 溝7下層	(口径15.2cm) 残存高3.2cm	口縁部の15%	外)N6/0灰 内)N6/0灰 断)7.5R5/2灰赤		6世紀前半
47	須恵器 蓋	A12c3-I 溝7下層	(口径14.0cm) 残存高4.4cm	全体の25%	外)N7/0灰白 内)N7/0灰白 断)N7/0灰白		6世紀後半
48	須恵器 蓋	A12d2-II 溝7下層	(口径13.4cm) 残存高4.5cm	全体の30%	外)N7/0灰白 内)N7/0灰白 断)N6/0灰		5世紀中葉
49	須恵器 坏	A12c3-III 溝7下層	(口径12.6cm) 残存高2.7cm	全体の10%	外)N6/0灰 内)N6/0灰 断)N7/0灰白		6世紀後半
50	須恵器 坏	A12c3-IV 溝7下層	(口径15.0cm) 残存高3.8cm	全体の25%	外)N6/0灰 内)N6/0灰 断)N6/0灰		6世紀後半
51	須恵器 坏	A12c3-I 溝7下層	(口径16.0cm) 残存高4.6cm	全体の25%	外)5Y6/1灰 内)7.5Y5/1灰 断)7.5Y5/1灰		6世紀中葉

52	須恵器 坏?	A12c3-III 溝7下層	(口径15.0cm) 残存高5.7cm	全体の30%	外)7.5Y7/1灰白 内)N7/0灰白 断)N8/0灰白		6世紀?
53	須恵器 有蓋高坏	A12d3-I 溝7下層	(口径13.0cm) 残存高5.2cm	坏部の50%	外)N7/0灰白 内)N7/0灰白 断)N7/0灰白	脚は3方透かし?	6世紀前半
54	須恵器 甕	A12d2-II 溝7下層	残存高12.2cm 胴部径9.4cm	全体の60%	外)N6/0灰 内)N6/0灰 断)N7/0灰白		6世紀前半
55	須恵器 甕	A12c3-IV 溝7下層	—	—	外)2.5Y7/1灰白 内)N7/0灰白 断)5Y6/1灰	外面「生焼け」状 格子目タタキ	5世紀
56	須恵器 甕	A12d3-I 溝7下層	(口径18.6cm) 残存高8.1cm	口縁部～体部に かけての15%	外)N6/0灰 内)N6/0灰 断)7.5Y7/1灰白		6世紀
57	弥生土器 壺	A12 溝7下層	残存高4.2cm 底径4.8cm	底部のみ完存	外)10YR8/3浅黄橙 内)10YR7/3にぶい黄橙 断)10YR8/4浅黄橙	輪台技法	弥生後期後半
58	弥生土器 壺	A12c3-I 溝7下層	残存高3.8cm 底径6.2cm	底部の99%	外)10YR8/3浅黄橙 内)2.5Y5/1黄灰 断)10YR6/4にぶい黄橙		弥生中期末～ 後期前半
59	土師器 甕	A12e2-III 溝7下層	(口径30.4cm) 残存高9.2cm	全体の20%	外)7.5YR6/6橙 内)7.5YR7/6橙 断)7.5YR7/4にぶい橙	内面粉痕あり	5～6世紀
60	韓式系土器? 甕	A12c3-IV 溝7下層	(口径34.9cm) 残存高7.1cm	全体の20%	外)5YR7/6橙 内)5YR7/6橙 断)5YR6/6橙	体部に格子タタキ 口縁部にヘラミガキ チャート多く含む	
61	土師器 甕	A12d3-I 井戸9	残存高17.8cm	全体の80%	外)10YR3/2黒褐 内)10YR2/1黒 断)10YR4/3にぶい黄褐	口縁部のみ欠損。 釣瓶に転用か 底部内外面に煤痕	8世紀
62	土師器 小形甕	A12d1-III 溝80	(口径11.6cm) 残存高11.2cm	全体の45%	外)5YR6/6橙 内)5YR6/4にぶい橙 断)7.5YR6/4にぶい橙		6世紀末
63	須恵器 坏	A12d1-III 溝80	残存高2.0cm	全体の5%	外)N4/0灰 内)5PB4/1暗青灰 断)N5/0灰		6世紀後半
64	須恵器 坏	A12d1-III 溝80	残存高1.9cm	全体の5%	外)2.5YR6/2灰赤 内)2.5YR6/2灰赤 断)2.5YR6/3にぶい橙		6世紀後半
65	須恵器 蓋	A12c3-IV 溝59	(口径14.0cm) 残存高2.7cm	全体の10%	外)5Y6/1灰 内)N7/0灰白 断)N7/0灰白		6世紀後半 (中村II-4)
66	土師器 甕	A12d4-I 土器棺11	(口径19.0cm) 残存高11.3cm	全体の35%	外)5YR7/4にぶい橙 内)5YR7/4にぶい橙 断)5YR8/4淡黄橙		8世紀
67	土師器 甕	A12d4-I 土器棺11	(口径15.2cm) 残存高7.6cm	全体の35%	外)5YR6/4にぶい橙 内)5YR7/4にぶい橙 断)5YR7/4にぶい橙		8世紀
68	布留式 甕	A12c4-IV 土器棺45	口径18.2cm 残存高29.2cm	全体の60%	外)10YR8/2灰白 内)10YR7/2にぶい黄橙 断)10YR8/3浅黄橙	外面一部黒斑あり	布留IV期
69	須恵器 蓋	A12c4-III 土坑24	(口径12.6cm) 残存高1.4cm	全体の10%	外)N6/0灰 内)N7/0灰白 断)N7/0灰白		7世紀後半
70	庄内式 甕	A12c4-III 土坑24	残存高3.4cm 底径2.5cm	全体の15%	外)7.5YR7/4にぶい橙 内)7.5YR7/4にぶい橙 断)10YR7/4にぶい黄橙		庄内V期
71	庄内式 有稜高坏	A12c3-III 住居44	口径21.1cm 残存高7.3cm	坏部の90%	外)7.5Y8/3淡黄 内)2.5Y7/3浅黄 断)2.5Y6/1黄灰	磨耗著しく調整不明	庄内後半～末 (庄内V期?)
72	庄内式 小形壺	A12c4-IV 住居44	残存高9.1cm	全体の45%	外)10YR8/3浅黄橙 内)10YR8/2灰白 断)10YR5/1褐灰	口縁部欠損。	庄内後半～末 (庄内V期?)
73	庄内式 甕	A12c4-IV 住居44	残存高3.1cm 底径2.4cm	底部完存	外)7.5YR6/2灰褐 内)10YR6/4にぶい黄橙 断)7.5YR7/6橙		庄内
74	弥生形 甕か鉢	A12c4-IV 住居44	残存高2.4cm 底径3.8cm	底部完存	外)2.5Y7/2灰黄 内)2.5Y6/1黄灰 断)10YR7/3にぶい黄橙	輪台技法か。 外面一部黒斑あり	庄内
75	弥生形 甕	A12c4-IV 住居44	残存高4.5cm 底径3.8cm	全体の20% 底部完存	外)10YR8/2灰白 内)10YR8/3浅黄橙 断)10YR8/2灰白	外面一部黒斑あり	庄内
76	弥生形 甕か鉢	A12c4-IV 住居44	残存高2.1cm 底径5.1cm	底部完存	外)7.5YR8/4浅黄橙 内)10YR5/1褐灰 断)10YR7/2にぶい黄橙		庄内
77	弥生形 甕か鉢	A12c4-IV 住居44	残存高3.3cm 底径2.7cm	底部完存	外)2.5Y5/1黄灰 内)10YR6/4にぶい黄橙 断)10YR7/3にぶい黄橙		庄内

78	弥生形甕	A12c4-IV 住居44	残存高2.0cm 底径4.2cm	底部完存	外)5YR7/4にぶい橙 内)7.5YR7/4にぶい橙 断)7.5YR6/2灰褐		庄内
79	庄内式甕	A12c4-IV 住居44	残存高3.2cm 底径1.6cm	底部完存	外)10YR7/2にぶい黄橙 内)10YR6/3にぶい黄橙 断)10YR5/4にぶい黄褐		庄内
80	弥生形甕	A12c4-IV 住居44	残存高4.1cm 底径3.8cm	底部完存	外)2.5Y8/1灰白 内)10YR7/4にぶい黄橙 断)10YR8/4浅黄橙	摩滅激しく調整不明 瞭	庄内
81	弥生土器 高坏	A12c4-I ピット36	残存高7.1cm 底径12.7cm	全体の50%	外)2.5YR6/8橙 内)2.5Y8/4淡黄 断)10YR6/1褐灰		弥生末～庄内
82	受口状口縁 甕	A12c4-I 土坑34	(口径16.2cm) 残存高2.4cm	全体の10%	外)10YR8/2灰白 内)10YR8/1灰白 断)2.5Y4/1黄灰	近江系。黑色芯	庄内中葉
83	布留式 壺?	A12c3-III ピット65	残存高11.2cm	全体の15%	外)5YR6/6橙 内)10YR6/4にぶい黄橙 断)10YR4/2灰黄褐		布留前半
84	弥生土器 甕	A12c3-III 溝7テラス 中層	残存高2.6cm 底径2.8cm	底部完存	外)10YR8/3浅黄橙 内)10YR8/3浅黄橙 断)10YR6/1褐灰		弥生後期
85	弥生土器 甕	A12c3-III 溝7テラス 中層	残存高2.5cm 底径4.8cm	底部完存	外)2.5YR6/4にぶい橙 内)10YR4/1褐灰 断)5YR5/3にぶい赤褐		弥生後期
86	弥生土器 甕	A12c3-III 溝7テラス 中層	残存高2.8cm 底径5.3cm	底部完存	外)10YR8/3浅黄橙 内)10YR8/3浅黄橙 断)10YR8/3浅黄橙		弥生後期
87	弥生土器 甕	A12c3-III 溝7テラス 中層	残存高3.8cm (口径22.0cm)	口縁部の8%	外)10YR8/3浅黄橙 内)10YR8/2灰白 断)2.5Y8/1灰白	擬凹線	弥生後期 (摂津V-0)
88	須恵器 坏B	A12c3-I 2層下部	(口径14.5cm) 器高4.1cm	全体の10%	外)N7/0灰白 内)N7/0灰白 断)N5/0灰		7～8世紀
89	須恵器 坏B	A12b6 3層上面	残存高2.9cm (底径8.2cm)	全体の10%	外)N7/0灰白 内)N8/0灰白 断)N7/0灰白		8世紀
90	須恵器 坏	A12c3-IV 2層下部	残存高2.8cm	全体の10%未満	外)N6/0灰 内)N7/0灰白 断)N7/0灰白		7～8世紀
91	須恵器 坏B	A12c3-I 2層下部	残存高1.9cm (底径9.5cm)	全体の15%	外)7.5Y6/1灰 内)7.5YR7/1灰白 断)7.5Y7/1灰白	磨耗激しく調整不明 瞭	7～8世紀
92	須恵器 坏B	A12c2-II 2層下部	残存高1.4cm (底径8.5cm)	底部の20%	外)N5/0灰 内)N7/0灰白 断)N8/0灰白		8世紀
93	須恵器 坏B	A12d2-II 2層下部	残存高1.3cm	底部の10%未満	外)N7/0灰白 内)N7/0灰白 断)N7/0灰白		8世紀
94	須恵器 坏B	A12c3-III 2層下部	残存高1.1cm (底径11.0cm)	底部の10%未満	外)N7/0灰白 内)N7/0灰白 断)N7/0灰白		7～8世紀
95	須恵器 坏B	A12c3-I 3層上面	残存高1.3cm (高台径8.3cm)	全体の10%	外)N6/0灰 内)N7/0灰白 断)N8/0灰白		7～8世紀
96	須恵器 坏B	A12c3-I 3層上面	残存高1.6cm (高台径9.6cm)	底部の20%	外)N6/0灰 内)N6/0灰 断)10R5/2灰赤		8世紀
97	須恵器 坏	A12d2-II 2層下部	残存高2.0cm (口径11.6cm)	口縁部の10%	外)5YR7/6橙 内)5YR7/6橙 断)5YR7/6橙	「生焼け」	6世紀後半
98	須恵器 甕	A12c2-III 3層上面	(口径25.8cm) 残存高2.9cm	全体の10%未満	外)7.5Y8/1灰白 内)N8/0灰白 断)N8/0灰白	「生焼け」	
99	須恵器 甕	A12c2-IV 2層下部	残存高4.0cm	口縁部の10%未 満	外)N6/0灰 内)7.5Y6/1灰 断)2.5YR6/1赤灰	波状文	6世紀?
100	須恵器 甕	A12d4 3層上面	残存高7.4cm	口縁部の10%未 満	外)N6/0灰 内)N6/0灰 断)5YR5/1赤灰	波状文	6世紀 (中村II-5?)
101	須恵器 壺	A12c3-I 2層下部	残存高5.0cm (底径7.0cm)	底部の20%	外)5Y4/1灰 内)5Y7/1灰白 断)5Y6/1灰		
102	瓦器 碗	A12c3-II 3層上面	残存高1.1cm (底径5.4cm)	底部の15%	外)N3/0暗灰 内)N3/0暗灰 断)2.5Y8/1灰白		12世紀前半
103	土師器 碗	A12c4-II 3層上面	残存高0.9cm (底径7.0cm)	底部の16%	外)7.5YR8/4浅黄橙 内)7.5YR7/4にぶい橙 断)7.5YR8/4浅黄橙		



104	土師器 壺	A12c3-I 2層下部	残存高2.0cm (底径8.0cm)	底部の12%	外)5YR7/6橙 内)5YR8/4淡橙 断)5YR7/6橙	低部(高台より内側) やや黒色化	
105	土師器 皿A	A12c3-III 3層上面	残存高1.8cm (口径21.0cm)	口縁部の6%	外)7.5YR7/4にぶい橙 内)5YR6/6橙 断)7.5YR8/4浅黄橙		8世紀前半
106	土師器 坏A	A12c3-I 2層下部	残存高3.0cm (口径18.0cm)	口縁部の10%	外)5YR7/6橙 内)5YR7/6橙 断)7.5YR8/4浅黄橙		8世紀前半
107	土師器 坏A	A12c3-I 2層下部	残存高2.9cm (口径15.0cm)	口縁部の5%	外)5YR6/6橙 内)5YR6/6橙 断)5YR6/6橙		8世紀
108	土師器 長胴甕	A12c3-I 2層下部	残存高4.9cm (口径26.0cm)	口縁部の12%	外)7.5YR8/4浅黄橙 内)10YR8/4浅黄橙 断)10YR8/4浅黄橙	磨耗著しく調整不明	5~6世紀
109	土師器 広口甕	A12c3-I 2層下部	残存高6.0cm (口径33.0cm)	口縁部の10%	外)7.5YR8/4浅黄橙 内)5YR8/4淡橙 断)10YR8/2灰白		7~8世紀
110	弥生土器 甕	A12c3-II 3層上面	残存高2.0cm 底径3.5cm	底部の80%	外)5YR7/4にぶい橙 内)7.5YR8/3浅黄橙 断)5YR8/3淡橙	矢羽根状タタキ 底部に黒斑あり	弥生末~庄内 前半
111	弥生形 甕	A12c3-III 3層上面	残存高2.8cm 底径3.2cm	底部完存	外)7.5YR8/6浅黄橙 内)10YR6/1褐灰 断)7.5YR6/3にぶい褐	外面一部黒斑あり	庄内
112	弥生形 甕?	A12c3-III 3層上面	残存高2.6cm 底径3.8cm	底部の90%	外)10YR8/3浅黄橙 内)10YR8/3浅黄橙 断)10YR8/3浅黄橙	磨耗著しく調整不明 体部下端に斜方向の 焼成前穿孔	庄内
113	弥生土器 広口壺	A12c4-I 3層上面	残存高1.7cm	口縁部の5%	外)10YR8/3浅黄橙 内)7.5YR7/4にぶい橙 断)10YR8/2灰白	擬凹線4条・円形浮 文	弥生後期 (摂津V-2?)
114	弥生土器 甕	A12c3-III 3層上面	残存高2.7cm 底径4.1cm	底部の40%	外)7.5YR8/4浅黄橙 内)7.5YR8/4浅黄橙 断)10YR8/2灰白	輪台技法	弥生後期
115	須惠器 蓋	A12c5 側溝	口径15.3cm 器高3.0cm	全体の25%	外)N7/0灰白 内)N7/0灰白 断)N6/0灰		8世紀
116	須惠器 蓋	A12c2 側溝	(口径15.8cm) 残存高2.1cm	口縁部の15%	外)5Y7/1灰白 内)5Y7/1灰白 断)5Y7/1灰白	「生焼け」	8世紀
117	須惠器 蓋	A12c4-II 3層	(口径17.0cm) 残存高2.4cm	全体の15%	外)7.5Y8/1灰白 内)7.5Y8/1灰白 断)7.5Y8/1灰白		7世紀末
118	須惠器 蓋	A12b5 側溝	残存高1.3cm	全体の1%未満	外)N7/0灰白 内)N7/0灰白 断)N7/0灰白		7世紀末
119	須惠器 坏B	A12c4 3層	残存高2.0cm (高台径14.2cm)	底部の15%	外)7.5Y7/1灰白 内)7.5Y7/1灰白 断)7.5Y7/1灰白		8世紀前半
120	須惠器 坏B	A12c3 側溝	残存高2.2cm (高台径9.4cm)	底部の20%	外)N7/0灰白 内)N7/0灰白 断)N6/0灰		7~8世紀
121	須惠器 坏B	A12c1-III 3層	残存高1.3cm (高台径9.6cm)	底部の25%	外)N5/0灰 断)N5/0灰 内)N6/0灰		7世紀末
122	須惠器 台付壺	A12d2-I 3層	残存高1.7cm 高台径10.4cm	底部の90%	外)N7/0灰白 内)N7/0灰白 断)N7/0灰白		8世紀
123	須惠器 坏G	A12b5 側溝	口径12.0cm 器高3.1cm	全体の20%	外)5Y8/1灰白 内)5Y8/1灰白 断)5Y8/1灰白	「生焼け」	7世紀前半
124	須惠器 坏G	A12b5 側溝	口径9.2cm 器高3.5cm	全体の40%	外)7.5Y5/1灰 内)7.5Y6/1灰 断)N4/0灰		7世紀前半
125	須惠器 坏	A12b4-III 3層	口径12.4cm 器高3.9cm	全体の90%	外)N6/0灰 内)N7/0灰白 断)N8/0灰白		6世紀後半
126	須惠器 高坏	A12d2-IV 3層	残存高7.0cm 脚部径8.8cm	脚部の60%	外)N7/0灰白 内)N7/0灰白 断)N7/0灰白		7世紀
127	土師器 坏A	A12c5 側溝	(口径12.6cm) 器高2.5cm	全体の10%	外)5YR6/6橙 内)5YR6/8橙 断)5YR7/6橙		
128	土師器 坏A	A12b5 側溝	(口径16.8cm) 器高4.6cm	全体の20%	外)2.5YR6/8橙 内)5YR5/8明赤褐 断)2.5YR6/8橙		8世紀前半
129	弥生土器 甕	A12b4 側溝	(口径17.0cm) 残存高3.1cm	口縁部の15%	外)7.5YR7/4にぶい橙 内)7.5YR7/4にぶい橙 断)7.5YR5/4にぶい褐	口縁叩き出し技法	弥生末~庄内 前半

130	弥生土器 甕	A12b4 側溝	(口径14.5cm) 残存高4.5cm	口縁部の5%	外)10YR8/2灰白 内)7.5Y8/4浅黄橙 断)7.5YR7/6橙	口縁叩き出し技法	弥生末～庄内 前半
131	土師器 高坏	A12c3-Ⅲ 3層	残存高9.2cm	全体の40%	外)2.5YR6/6橙 内)10YR8/3浅黄橙 断)10YR8/2灰白		古墳時代
132	弥生土器 壺	A12c4-Ⅳ 3層	残存高2.7cm 底径6.3cm	底部の45%	外)10YR8/2灰白 内)7.5YR8/2灰白 断)10YR8/1灰白	磨耗著しい	弥生中期末～ 後期前半
133	弥生形 甕	A12c4-Ⅳ 3層	残存高3.6cm 底径4.5cm	底部完存	外)7.5YR8/2灰白 内)2.5Y6/1黄灰 断)2.5Y6/1黄灰	外面一部黒斑あり	庄内Ⅰ～Ⅱ
134	弥生形 甕	A12d4 側溝	残存高2.9cm 底径2.3cm	底部完存	外)7.5YR8/3浅黄橙 内)2.5Y5/1黄灰 断)2.5Y6/1黄灰		庄内
135	弥生形 甕	A12c4-Ⅳ 3層	残存高3.0cm 底径4.6cm	底部完存	外)10YR8/2灰白 内)10YR7/2にぶい黄橙 断)10YR6/1褐灰	外面一部黒斑あり	庄内前半
136	弥生形 甕	A12c4-Ⅳ 3層	残存高3.2cm 底径2.3cm	底部の80%	外)2.5Y5/2暗灰黄 内)7.5YR8/4浅黄橙 断)2.5Y5/1黄灰	外面一部黒斑あり	弥生末～庄内 前半
137	弥生形 甕	A12c3-Ⅲ 3層	残存高2.7cm 底径4.2cm	底部完存	外)7.5YR7/3にぶい橙 内)5YR6/4にぶい橙 断)7.5YR7/4にぶい橙	くもの巣状ハケメ	弥生末～庄内 前半
138	弥生形 甕	A12c3-Ⅲ 3層	残存高3.1cm 底径4.4cm	底部完存	外)7.5YR8/3浅黄橙 内)10YR8/2灰白 断)10YR8/2灰白	内面一部黒斑あり	庄内
139	土師器 甕	A12b5 側溝	(口径24.0cm) 残存高4.6cm	口縁部の8%	外)10YR7/3にぶい黄褐 内)10YR7/3にぶい黄橙 断)7.5YR7/4にぶい橙	磨耗著しく調整不明 瞭	
140	土師器 甕	A12b5 側溝	(口径26.0cm) 残存高9.6cm	口縁部の10%	外)2.5YR7/8橙 内)5YR7/6橙 断)5YR7/6橙		8世紀
141	土師器 甕	A12c5-Ⅰ 3層	(口径29.8cm) 残存高7.1cm	口縁部の12%	外)5YR7/4にぶい橙 内)5YR8/4淡橙 断)10YR8/3浅黄橙		8世紀
142	土師器 埴	A12c5-Ⅰ 3層	(口径41.4cm) 残存高9.2cm	全体の12%	外)10YR7/2にぶい黄橙 内)10YR7/2にぶい黄橙 断)10YR8/3浅黄橙		8世紀

凡例 計測値の( )付は復原値である。

# 第V章 分 析

## 第1節 花粉分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

住吉宮の前遺跡（大阪府池田市空港2丁目所在）は、猪名川左岸の沖積地上に立地する遺跡である。今回の調査により、弥生時代～平安時代の遺構（住居跡、流路、井戸など）や遺物が検出されている。今回は古墳時代～奈良時代の溝と遺物包含層について珪藻分析と花粉分析を行い、溝の埋積過程や周辺植生に関する情報を得る。

### （1）試料

試料は、北壁断面の溝7埋土で2点（試料番号1～2）、北壁断面東端で7点の計9点である。珪藻分析に関しては溝7の2点を、花粉分析に関してはすべての試料を分析する。分析試料の詳細について第6表に示す。

### （2）分析方法

#### 珪藻分析

湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プレパラートで封入して、永久プレパラートを作製する。

検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の側線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、Krammer, K. and Lange-Bertalot (1986・1988・1991a・1991b)、Krammer, K. (1992)、原口ほか (1998)などを参照する。

同定結果は、アルファベット順に並べた一覧表で示す。また、環境指標種については安藤 (1990)、伊藤・堀内 (1991)、Asai, K. & Watanabe, T. (1995)を参考にし、生活型などについては、Vos, P. C. and H. de Wolf (1993)を参考とする。

第6表 分析試料一覧

試料番号	遺構名	採取地点	層位	層相	分析項目	
					珪藻分析	花粉分析
1	溝7	北壁断面 溝7埋土	下層	5Y7/2 灰白色砂	○	○
2			下層		○	○
3	北壁断面東側		2層	2.5Y5/3 黄褐色礫まじりシルト		○
4			3層			○
5			3層	2.5Y3/2 黒褐色シルト		○
6			3層			○
7			3層	10YR4/1 褐灰色礫混じりシルト		○
8			4層	10YR4/1褐灰色・10YR6/8明黄褐色淘汰の悪い砂礫		○
9			4層			○

第7表 珪藻分析結果

種 類	生態性			環境 指標種	1	2
	塩分	pH	流水			
Achnanthes crenulata Grunow	Ogh-ind	al-bi	l-ph	T	-	1
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		3	-
Eunotia pectinalis var. undulata (Ralfs) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	1
Eunotia praerupta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB, O, T	-	1
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1
Fragilaria ulna (Nitzsch) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		1	1
Fragilaria spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	1
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA, S	-	1
珪藻化石総数					6	7

凡例

H.R.: 塩分濃度に対する適応性    pH: 水素イオン濃度に対する適応性    C.R.: 流水に対する適応性  
 Ogh-ind : 貧塩不定性種    al-bi : 真アルカリ性種    l-ph : 好止水性種  
 Ogh-hob : 貧塩嫌塩性種    al-il : 好アルカリ性種    ind : 流水不定性種  
 Ogh-unk : 貧塩不明種    ac-il : 好酸性種    unk : 流水不明種  
 unk : pH不明種

環境指標種群

O: 沼沢湿地付着生種 (以上は安藤, 1990)  
 S: 好汚濁性種, T: 好清水性種 (以上は Asai, K. & Watanabe, T., 1986)  
 R: 陸生珪藻 (RA:A群, RB:B群, 伊藤・堀内, 1991)

花粉分析

試料約10gについて、塩酸によるカルシウム分の除去、フッ化水素酸による泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、アセトリシス処理によるセルロースの除去、水酸化カリウムによる有機酸の除去の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類について同定・計数する。

3. 結果

(1) 珪藻分析

結果を第7表に示す。珪藻化石は、2試料とも非常に少なく、淡水生種がわずかに検出された程度である。また、化石の保存が悪く、大部分が破片であり原形を留めているものはほとんどない。

試料番号1は *Cymbella* spp.、*Fragilaria* spp.、試料番号2は *Eunotia pectinalis* var. *undulata*、*E. praerupta* などが産出した。試料番号2から産出した種類は、沼よりも浅く水深が1m前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や更に水深の浅い湿地で優勢な出現の見られる沼沢湿地付着生種群（安藤, 1990）とされるものである。

花粉分析

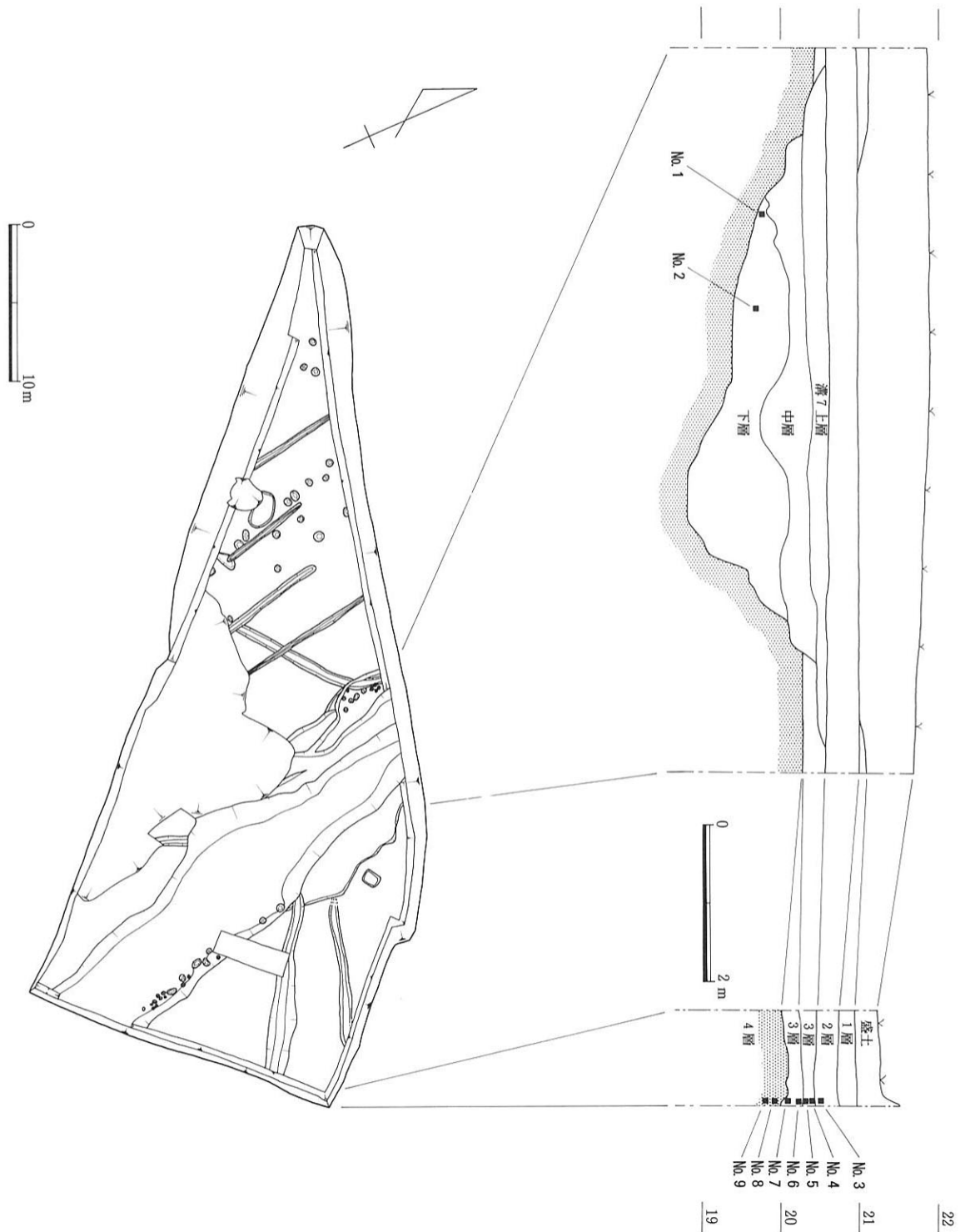
結果を第8表に示す。花粉化石に関しては保存が悪く針葉樹が若干検出されるのみである。シダ類胞子は試料番号3～5でやや多くみられるものの、全体的に少なく、表面には風化の痕跡もみられる。

第8表 花粉分析結果

種 類	試料番号									
		1	2	3	4	5	6	7	8	9
木本花粉		-	-	-	-	-	1	-	-	-
ツガ属		-	-	1	-	-	1	-	-	-
モミ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-
トウヒ属		1	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属		-	-	-	1	-	-	-	-	-
草本花粉		-	-	-	-	-	1	-	-	-
キク亜科		-	-	-	-	-	1	-	-	-
シダ類胞子		-	3	17	39	14	4	6	-	-
シダ類胞子		-	3	17	39	14	4	6	-	-
合計		1	3	18	40	14	7	6	0	0
総計 (不明を除く)		1	3	18	40	14	7	6	0	0

4. 考察

溝7の埋土は、珪藻化石そのものが非常に少なく、ほとんどのものが壊れて破片状になっている。珪藻化石は死後シルト粒子以下の細粒堆積物と挙動を共にするとされるが（小杉, 1989）、溝の埋土は砂であることから、堆積物中の珪藻化石量は極端

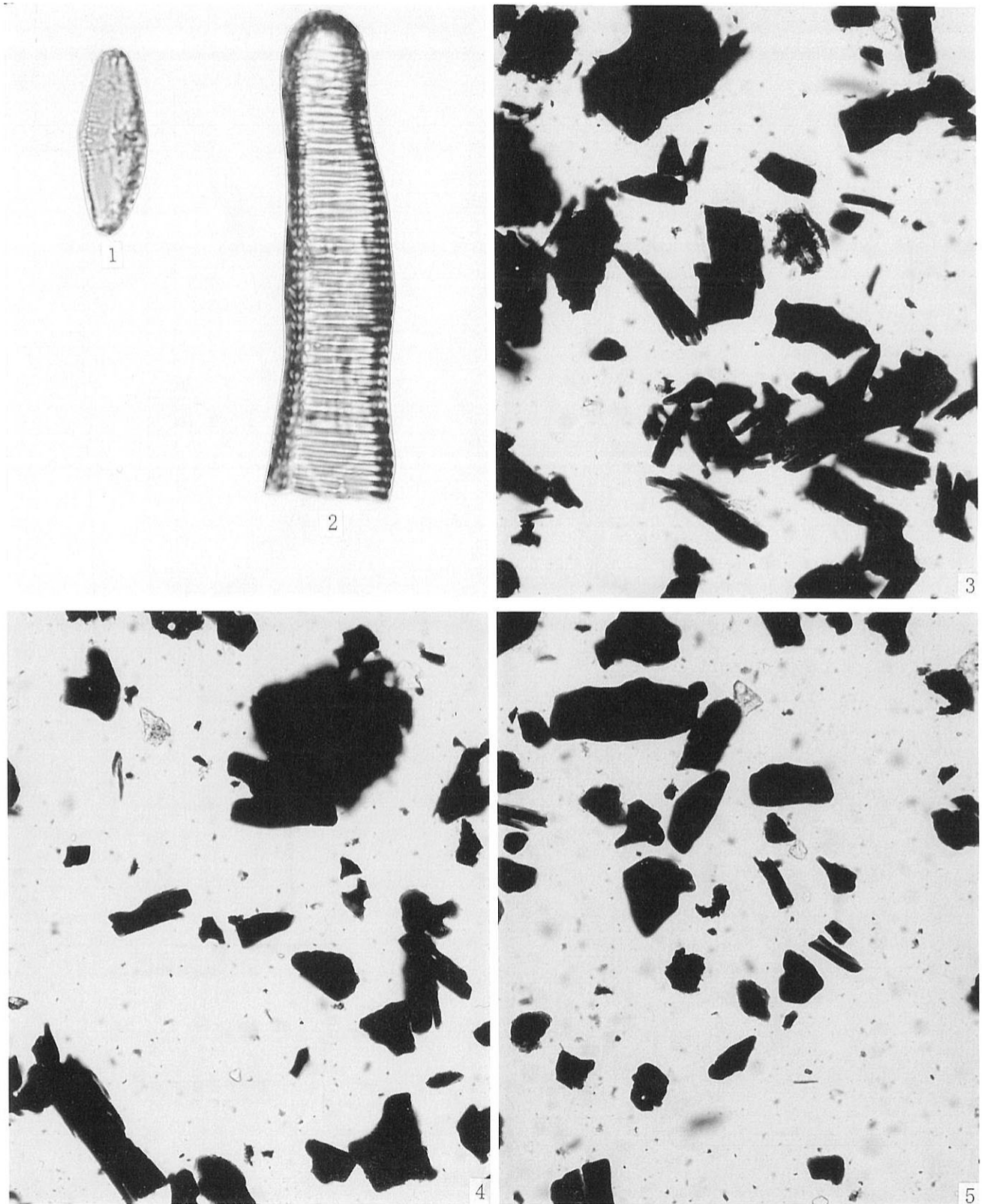


第22図 花粉分析試料採取地点

に少なかったと考えられる。さらに、珪酸分の風化などの影響が加わり、珪藻化石がほとんど含まれなくなった可能性がある。したがって、珪藻化石群集から当時の堆積環境に関する情報を得ることは難しいが、短期間のうちに埋積するような環境であった可能性がある。

一方花粉分析の結果をみると、花粉化石・シダ類胞子の保存状態が悪く、ほとんど検出されない試料もある。検出される種類はほとんどがシダ類胞子や針葉樹花粉であるが、これらは花粉・胞子化石の中





1. *Navicula mutica* Kuetzing (No. 2 溝 7)  
 2. *Eunotia pectinalis* var. *undulata* (Ralfs) Rabenhorst (No. 2 溝 7)  
 3. 状況写真 (No. 2 溝 7)    4. 状況写真 (No. 8)  
 5. 状況写真 (No. 6)

10  $\mu$  m    100  $\mu$  m  
 (1, 2)    (3-5)

写真 1 珪藻化石・花粉分析プレパラート内の状況

でも風化に比較的強い種類であることから残存したと考えられ、周辺の植生を反映しているものではないと思われる。これまで豊中市周辺で行われた古墳時代頃の花粉分析結果をみても、保存が悪かった地点が全体的に多い（パリノ・サーヴェイ株式会社，未公表）。なお、近畿地方の花粉化石群集と古植生変遷をまとめた研究例（前田、1984；古谷・田井，1993など）では、当時の古植生に関して次のように考えられている。この時期は前田（1984）の照葉樹林Ⅱ期の後半に相当する。この時期の特徴として、アカガシ亜属、シイ属中心の照葉樹林を基調にしながら、スギ、モミ属、ツガ属、コウヤマキ属、ブナ属、エノキ属—ムクノキ属が増加したとされる。また、人為的影響が強く現れる時期であるとされ、このうちマツ属の増加、草本花粉の増加、栽培植物の出現があげられる。本遺跡は丘陵に近いことから、スギ、モミ属、ツガ属、コウヤマキ属などの温帯針葉樹林が丘陵を中心に分布していたと推測される。さらに、段丘上を中心に遺跡が多く分布していることから、マツ属の増加、草本花粉の増加、栽培植物の出現など人為的植生改変も顕著に現れている可能性がある。今後、化石の保存状態がよい場所での調査が進み、情報が蓄積されることによって、より詳細な成果が得られることが期待される。

#### 引用文献

- 安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, p.73–88.
- Asai, K. and Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophylic and saproxenous taxa. Diatom, 10, p.35–47.
- 古谷正和・田井昭子（1993）大阪層群と段丘堆積層・沖積層の花粉化石. 「大阪層群」, 市原実編著, p.247–255, 創元社.
- 原口和夫・三友 清・小林 弘（1998）埼玉の藻類 珪藻類. 埼玉県植物誌, 埼玉県教育委員会, p.527–600.
- 伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, p.23–45.
- 小杉正人（1989）珪藻化石群集の形成過程と古生態解析. 日本ベントス研究会誌, 35/36, p.17–28.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae  
Band 2/1 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae.  
Band 2/2 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae.  
Band 2/3 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae,  
Kritische Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von: Die  
Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA  
DIATOMOLOGICA BAND 26, p.1–353., BERLIN • STUTTGART.
- 前田安夫（1984）花粉分析学的研究よりみた近畿地方の洪積（更新）世後期以降の植生変遷.  
「日本植生誌 近畿」, 宮脇 昭編著, p.87–99. 至文堂.
- Vos, P.C. and H. de Wolf (1993) Reconstruction of sedimentary environments in Holocene coastal deposits of the southwest Netherlands; the Poortvliet boring, a case study  
of palaeoenvironmental diatom research. Twelfth International Diatom Symposium, p.297–296.

## 第2節 胎土分析

(株) 第四紀 地質研究所 井上 巖

### (1) 実験条件

#### 試料

分析に供した試料は第9表胎土性状表に示すとおりである。X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。化学分析は土器をダイヤモンドカッターで小片に切断し、表面を洗浄し、乾燥後、試料表面をコーティングしないで、直接電子顕微鏡の鏡筒内に挿入し、分析した。

#### X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製JDX-8020 X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40kV, Current: 30mA, ステップ角度: 0.02°

計数時間: 0.5秒。

#### 化学分析

元素分析は日本電子製5300LV型電子顕微鏡に2001型エネルギー分散型蛍光X線分析装置をセットし、実験条件は加速電圧: 15kV、分析法: スプリント法、分析倍率: 200倍、分析有効時間: 100秒、分析指定元素10元素で行った。

### (2) X線回折試験・蛍光X線分析結果の取扱い

実験結果は第9表胎土性状表に示すとおりである。第9表右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。

電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回折試験で得られたムライト (Mullite)、クリストバライト (Cristobalite) 等の組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

#### 組成分類

##### 1) Mont-Mica-Hb 三角ダイアグラム

第23図に示すように三角ダイアグラムを1~13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。Mont、Mica、Hbの三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。三角ダイアグラムはモンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb) のX線回折試験におけるチャートのピーク強度をパーセント (%) で表示する。モンモリロナイトは  $\text{Mont}/(\text{Mont} + \text{Mica} + \text{Hb}) \times 100$  でパーセントとして求め、同様に Mica, Hb も計算し、三角ダイアグラムに記載する。三角ダイアグラム内の1~4は Mont, Mica, Hb の3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。位置分類についての基本原則は第23図に示すとおりである。

##### 2) Mont-Ch, Mica-Hb 菱形ダイアグラム

第23図に示すように菱形ダイアグラムを1~19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) の

第9表 胎土性状表

試料 NO	遺物 番号	タイプ 分類	組成分類		粘土鉱物及び造岩鉱物											備考									
			Mo-Mi-Hb	Mo-Ch,Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Crist	Mullite	K-fels	Halloy	Kaol	Pyrite	Au	器種	時代	出土層位				
住吉宮の前-1	48	B	14	20						2480	68	408	127							115	環蓋	6世紀前葉	溝7下層		
住吉宮の前-2	33	B	14	20						2602	72	365	189							192	環	6世紀後葉	溝7中層		
住吉宮の前-3	125	B	14	20						2832	90	138	90							77	環	6世紀末	3層		
住吉宮の前-4	11	B	14	20						1715	89	394	192							189	環	7世紀初	溝7上層		
住吉宮の前-5	117	B	14	20						3025	181	114	62								環蓋	7世紀末	3層		
住吉宮の前-6	3	B	14	20						3729	65	223	143							112	環蓋	8世紀	溝7上層		
住吉宮の前-7	1	B	14	20						3005	89	121	127							109	環蓋	8世紀	溝7上層		
住吉宮の前-8	28	B	14	20						800	472										環	7世紀初	溝7中層		
住吉宮の前-9	32	B	14	20						3222	82	571	187							158	環	6世紀後葉	溝7中層		
住吉宮の前-10	89	B	14	20						2797	89	127	170							14	環	8世紀	3層上面		
住吉宮の前-11	91	B	14	20						5172	65	77	90							103	81	環	8世紀	3層上面	
住吉宮の前-12	95	B	14	20						1901	95	270	181								164	環	8世紀	3層上面	
住吉宮の前-13		B	14	20						2163	93	988	159								130	環	6世紀後葉	溝7中層	
住吉宮の前-14		A	5	20						844	118	977	201								165	環	5世紀末	溝7上層	
住吉宮の前-15		B	14	20						2486	102	886	177								176	環	6世紀初	溝7下層	
住吉宮の前-16		B	14	20						1637	103	401	174								158	環	6世紀末	溝7中層	
住吉宮の前-17		B	14	20						2548	82	186	116								110	環	6世紀末	溝7中層	
住吉宮の前-18		B	14	20						1654	92	141	174								147	環	8世紀	溝7上層	
住吉宮の前-19		B	14	20						2184	94	116	212								104	191	環	8世紀	3層

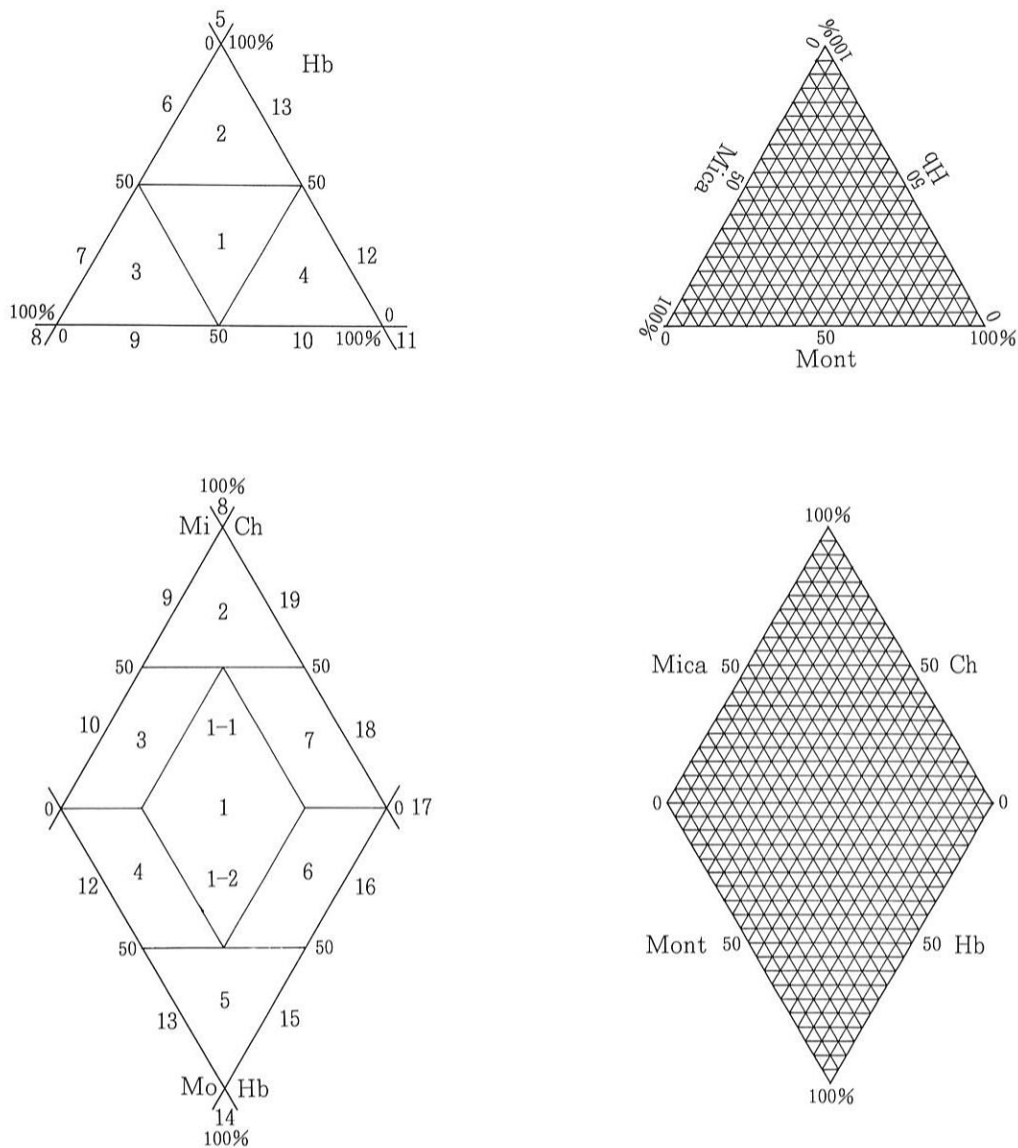
Mont:モンモリロナイト Mica:雲母類 Hb:角閃石 Ch:緑泥石 (Ch:Fe 一次反射、Ch:Mg 二次反射) Qt:石英 Pl:斜長石 Crist:クリストブライト Mullite:ムライト K-fels:カリ長石 Halloy:ハロイサイト Kaol:カオリナイト Pyrite:黄鉄鉱 Au:普通輝石 Py:紫蘇輝石

第10表 化学分析表

試料 No	Na <sub>2</sub> O	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	MnO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	NiO	Total	器種	時代
住吉宮の前-1	0.15	0.11	22.46	65.68	2.45	0.22	1.08	0.96	6.89	0.00	100.00	環蓋	6世紀前葉
住吉宮の前-2	0.37	0.00	20.33	67.47	2.65	0.23	0.87	0.39	7.72	0.00	100.00	環	6世紀後葉
住吉宮の前-3	0.41	0.14	23.68	61.01	2.48	0.29	1.13	0.44	10.42	0.02	100.02	環	6世紀末
住吉宮の前-4	0.93	0.21	20.21	68.61	3.02	0.58	0.85	0.36	5.20	0.05	100.02	環	7世紀初
住吉宮の前-5	0.42	0.75	24.42	63.24	3.17	0.27	1.08	0.06	6.60	0.00	100.01	環蓋	7世紀末
住吉宮の前-6	0.25	0.00	22.88	59.67	2.37	0.14	0.93	1.12	12.62	0.01	99.99	環	8世紀
住吉宮の前-7	0.44	0.26	18.29	66.82	4.63	0.23	1.12	0.70	7.37	0.15	100.01	環蓋	8世紀
住吉宮の前-8	1.18	0.85	22.95	57.84	1.33	1.92	1.63	0.53	11.70	0.07	100.00	環	7世紀初
住吉宮の前-9	0.48	0.00	23.55	67.37	2.23	0.20	0.86	0.15	5.17	0.00	100.01	環	6世紀後葉
住吉宮の前-10	0.23	0.00	23.27	68.41	3.26	0.32	0.61	0.25	3.65	0.00	100.00	環	8世紀
住吉宮の前-11	0.24	0.16	19.00	67.60	2.49	0.16	0.66	0.31	9.34	0.04	100.00	環	8世紀
住吉宮の前-12	0.60	0.16	23.97	65.48	3.05	0.27	1.22	0.27	4.93	0.04	99.99	環	8世紀
住吉宮の前-13	0.50	0.00	18.33	71.20	2.58	0.20	1.17	0.39	5.63	0.00	100.00	環	6世紀後葉
住吉宮の前-14	0.63	0.17	22.19	61.47	2.22	0.30	0.80	0.32	11.72	0.18	100.00	環	5世紀末
住吉宮の前-15	0.21	0.00	18.13	73.49	1.89	0.09	0.81	0.42	4.96	0.00	100.00	環	6世紀初
住吉宮の前-16	0.69	1.10	22.26	65.88	2.90	0.51	1.12	0.33	5.15	0.05	99.99	環	6世紀末
住吉宮の前-17	0.82	0.00	20.21	67.47	3.28	0.33	0.77	0.47	6.60	0.06	100.01	環	6世紀末
住吉宮の前-18	1.01	0.46	22.44	62.82	4.82	0.40	1.01	0.64	6.13	0.26	99.99	環	8世紀
住吉宮の前-19	0.75	0.00	20.66	67.46	3.15	0.31	1.23	0.52	5.91	0.00	99.99	環	8世紀

第11表 土器分類

試料 No	分類	原産地	SiO <sub>2</sub> 分類	Qt-Pl 分類	器種	時代
住吉宮の前-1	B	桜井谷: I			環蓋	6世紀前葉
住吉宮の前-5	B	桜井谷: I ?		焼成があまり	環蓋	7世紀末
住吉宮の前-12	B	桜井谷: I			環	8世紀
住吉宮の前-2	B	桜井谷: II			環	6世紀後葉
住吉宮の前-4	B	桜井谷: II			環	7世紀初
住吉宮の前-9	B	桜井谷: II			環	6世紀後葉
住吉宮の前-10	B	桜井谷: II			環	8世紀
住吉宮の前-17	B	桜井谷: II			環	6世紀末
住吉宮の前-19	B	桜井谷: II			環	8世紀
住吉宮の前-13	B	桜井谷: III			環	6世紀後葉
住吉宮の前-15	B	桜井谷: III			環	6世紀初
住吉宮の前-16	B	緑丘			環	6世紀末
住吉宮の前-3	B	不明-1	SiO <sub>2</sub> 低		環	6世紀末
住吉宮の前-6	B	不明-1	SiO <sub>2</sub> 低		環	8世紀
住吉宮の前-14	A	不明-1	SiO <sub>2</sub> 低	Qt 強度低	環	5世紀末
住吉宮の前-7	B	不明-2			環蓋	8世紀
住吉宮の前-11	B	不明-2		Qt 強度高	環	8世紀
住吉宮の前-8	B	不明? 異質	SiO <sub>2</sub> 低	Pl 強度高	環	7世紀初
住吉宮の前-18	B	不明?	SiO <sub>2</sub> 低		環	8世紀



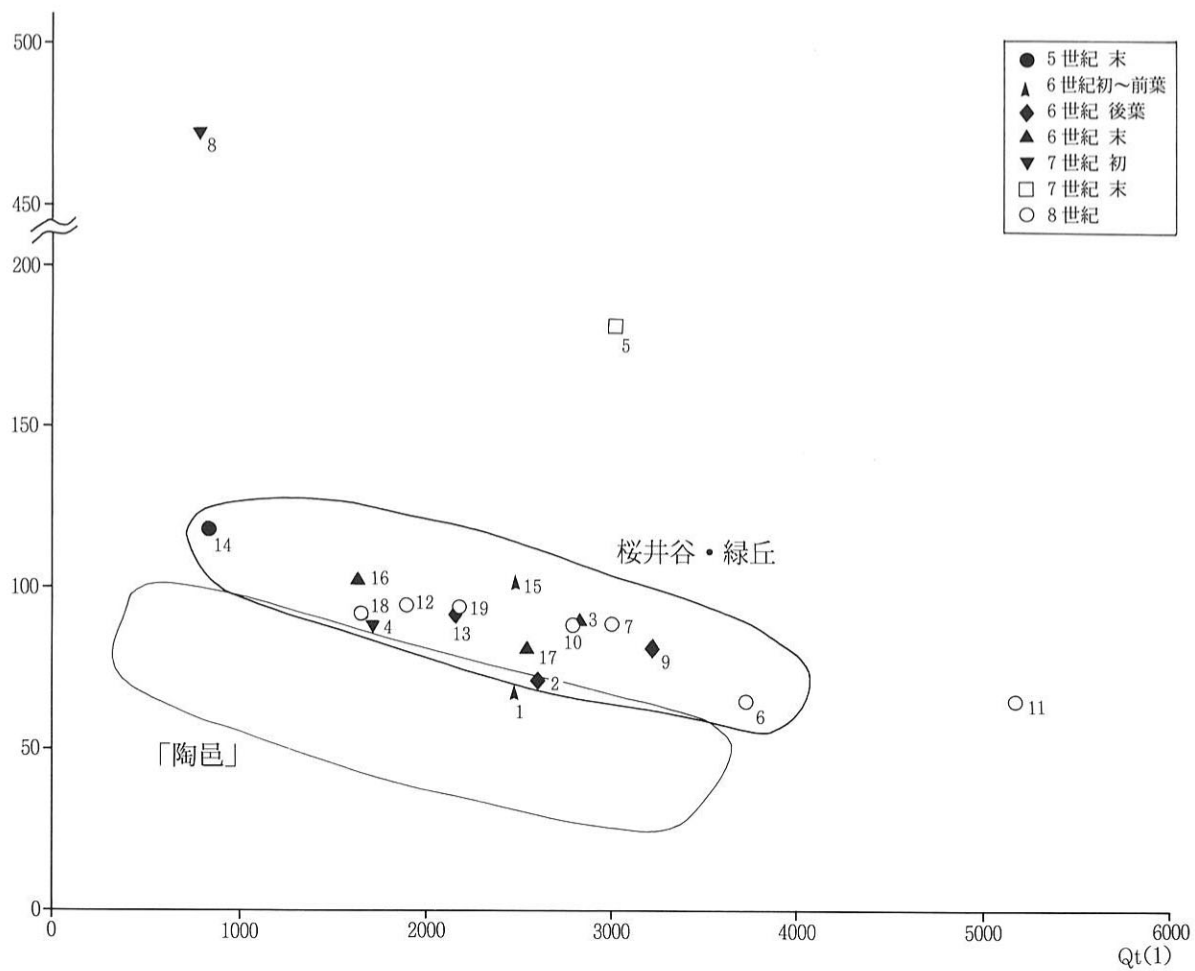
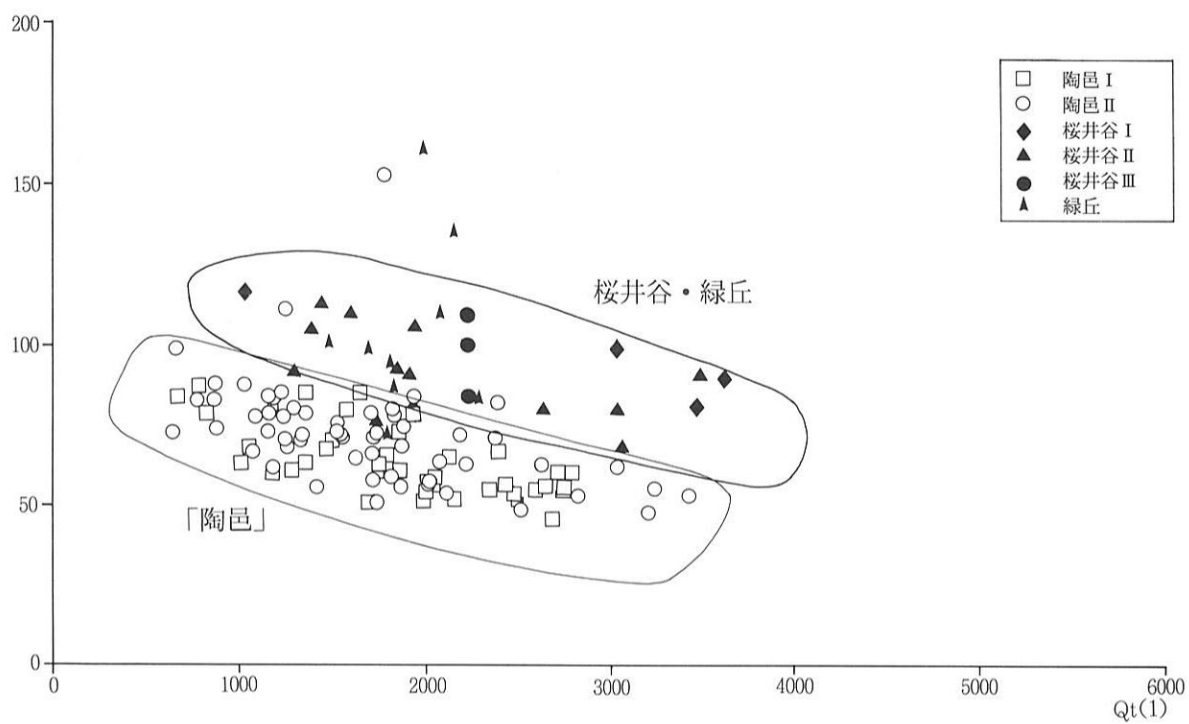
第23図 ダイアグラム

うち、a) 3成分以上含まれない、b) Mont, Chの2成分が含まれない、c) Mica, Hbの2成分が含まれない、の3例がある。菱形ダイアグラムはMont-Ch, Mica-Hbの組合せを表示するものである。Mont-Ch, Mica-HbのそれぞれのX線回折試験のチャートの強度を各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、 $\text{Mont}/(\text{Mont}+\text{Ch}) \times 100$ と計算し、Mica, Hb, Chも各々同様に計算し、記載する。菱形ダイアグラム内にある1~7はMont, Mica, Hb, Chの4成分を含み、各辺はMont, Mica, Hb, Chのうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。位置分類についての基本原則は第2図に示すとおりである。

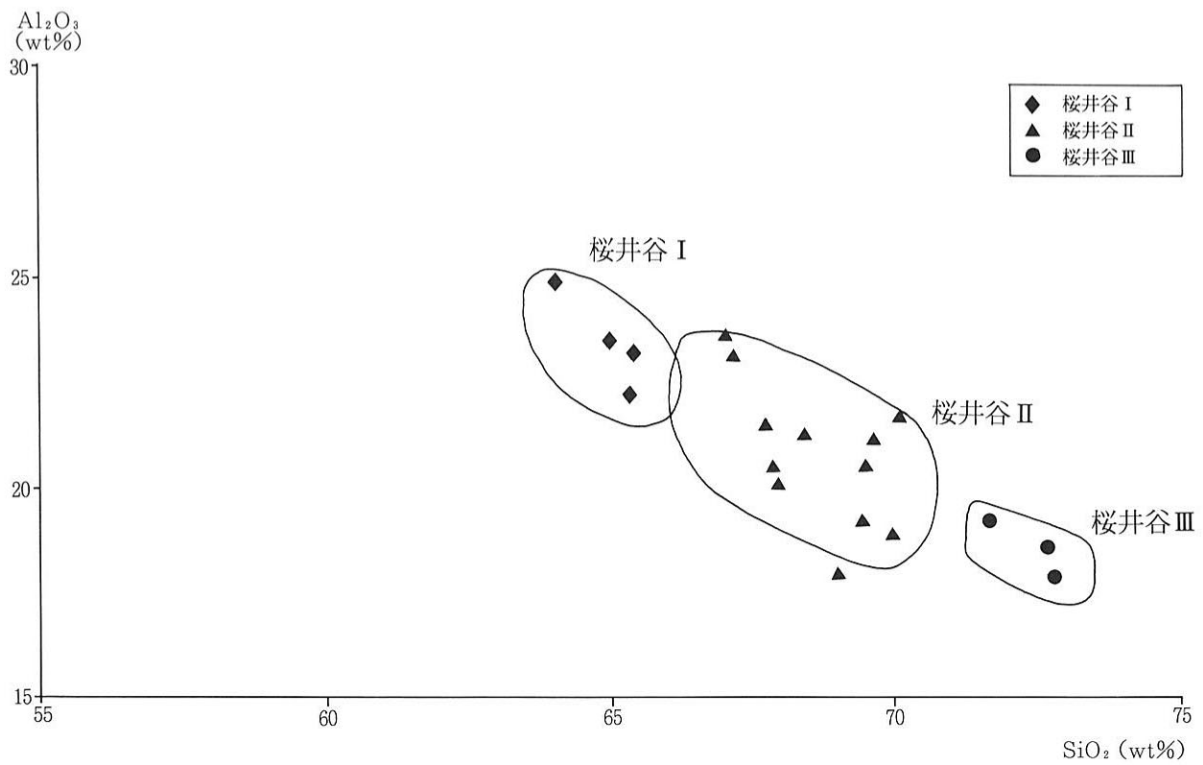
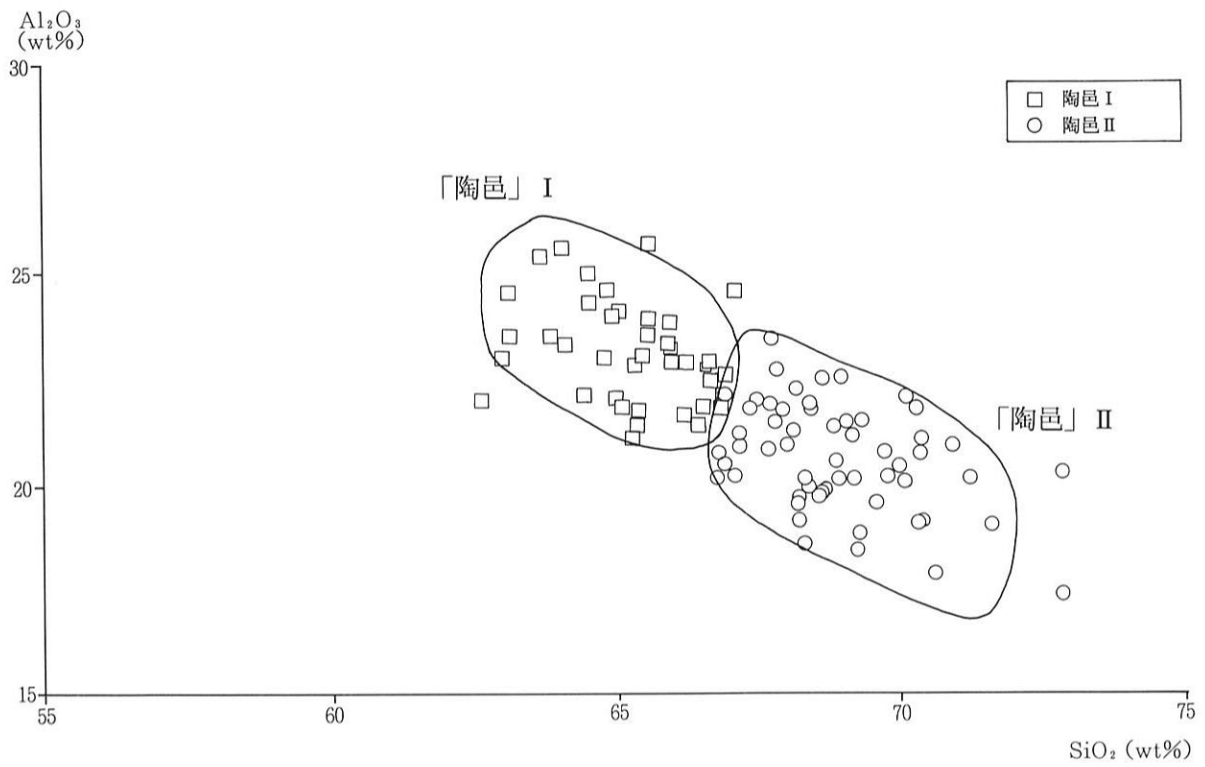
### 3) 化学分析結果の取り扱い

化学分析結果は酸化物として、ノーマル法(10元素全体で100%になる)で計算し、化学分析表を作成した。化学分析表に基づいて $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ 図、 $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-MgO}$ 図、 $\text{K}_2\text{O-CaO}$ 図の各図を作成した。これらの図をもとに、土器類を元素の面から分類した。

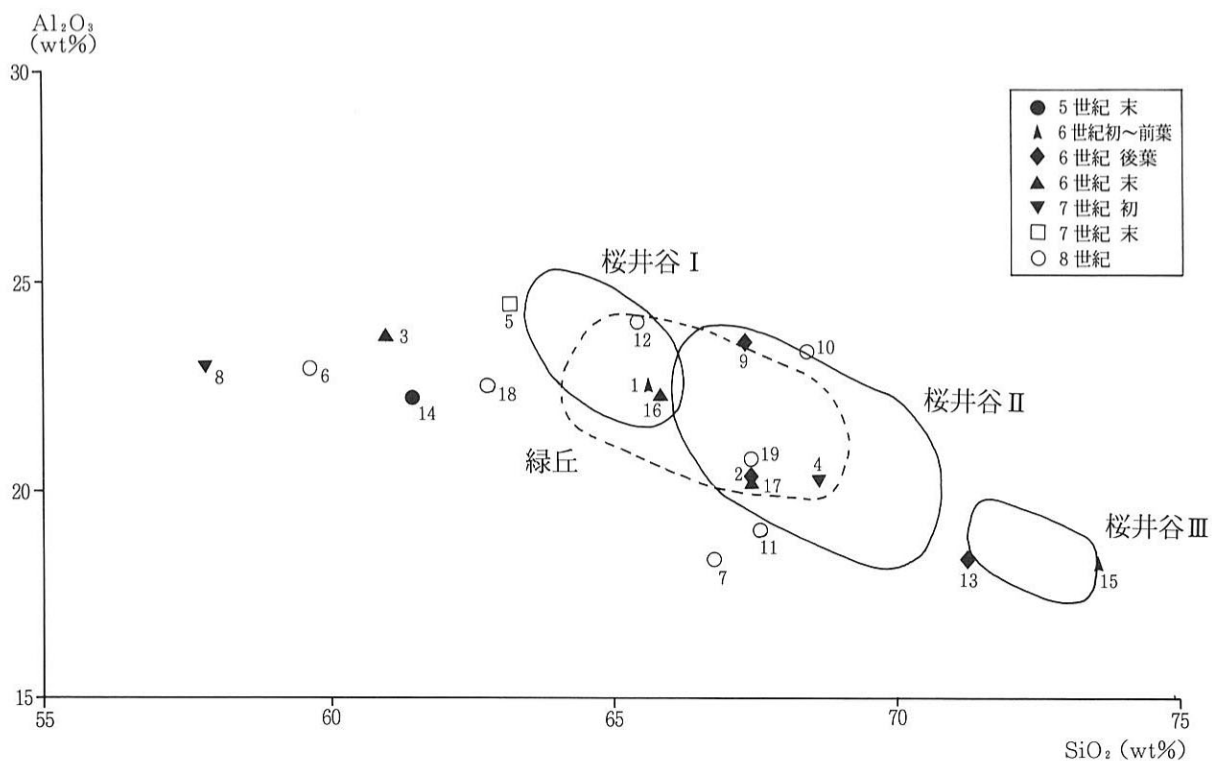
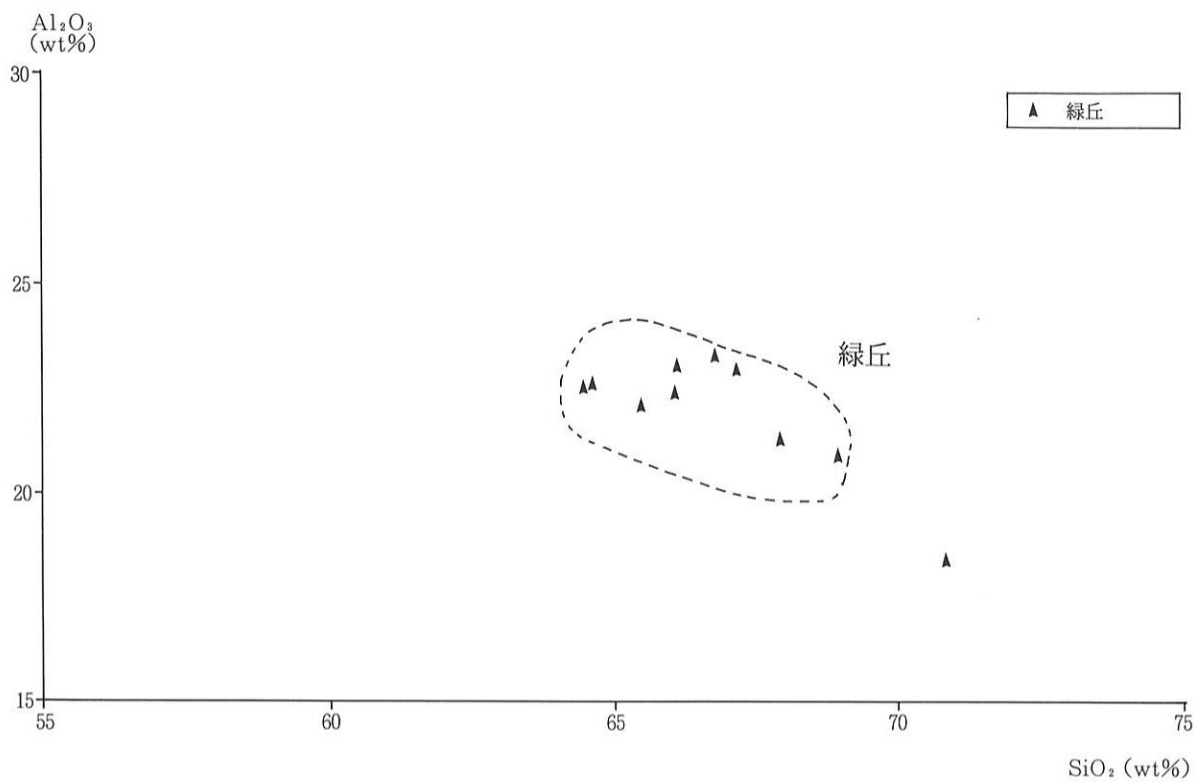




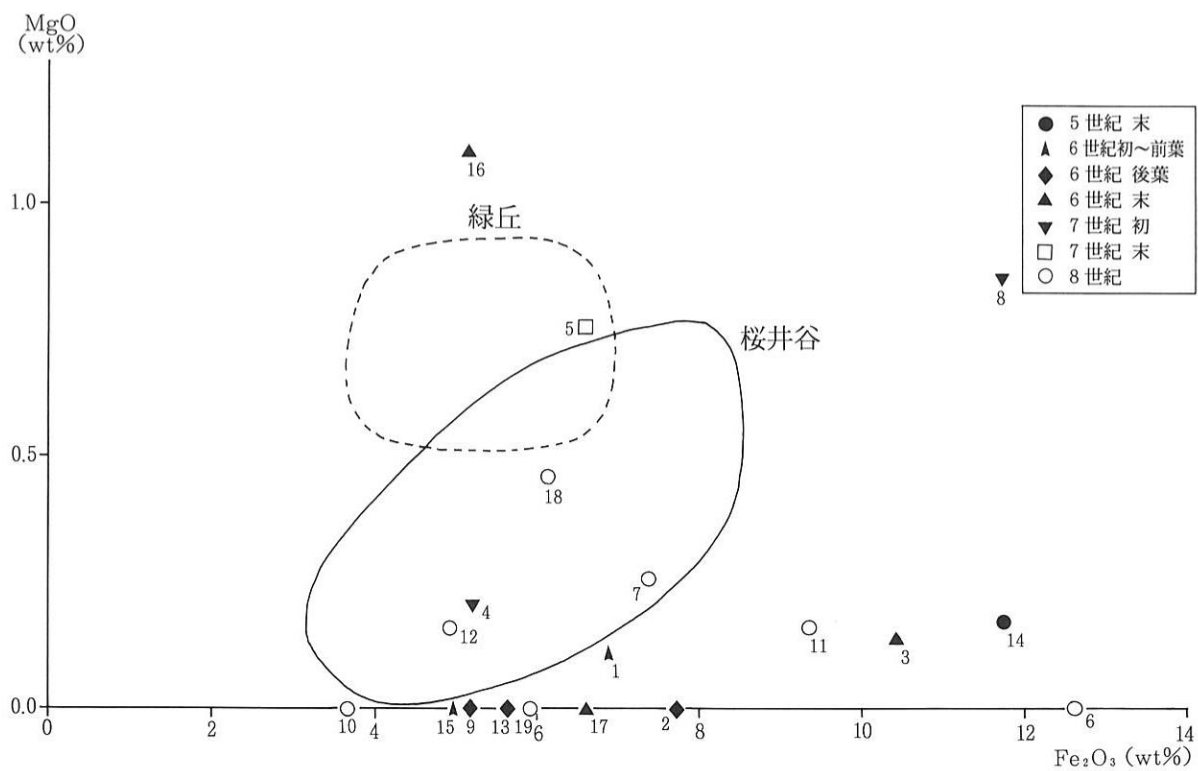
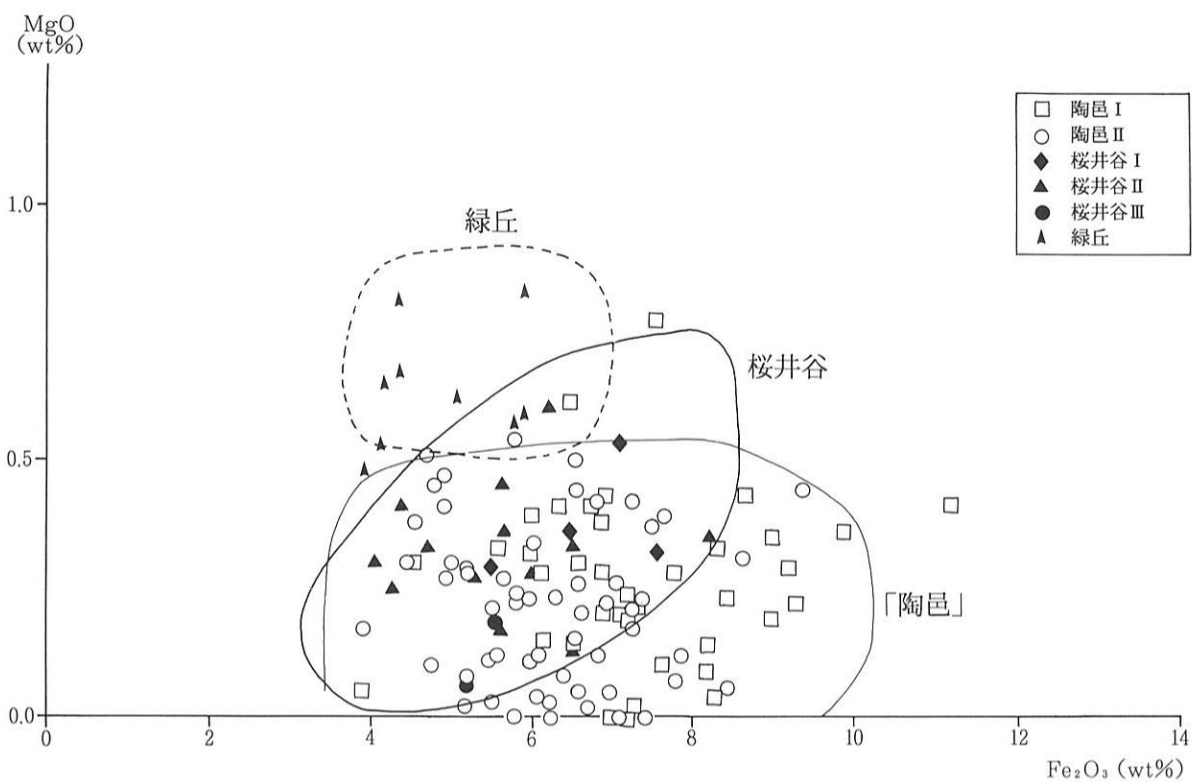
第24図 Qt-PI 相関図



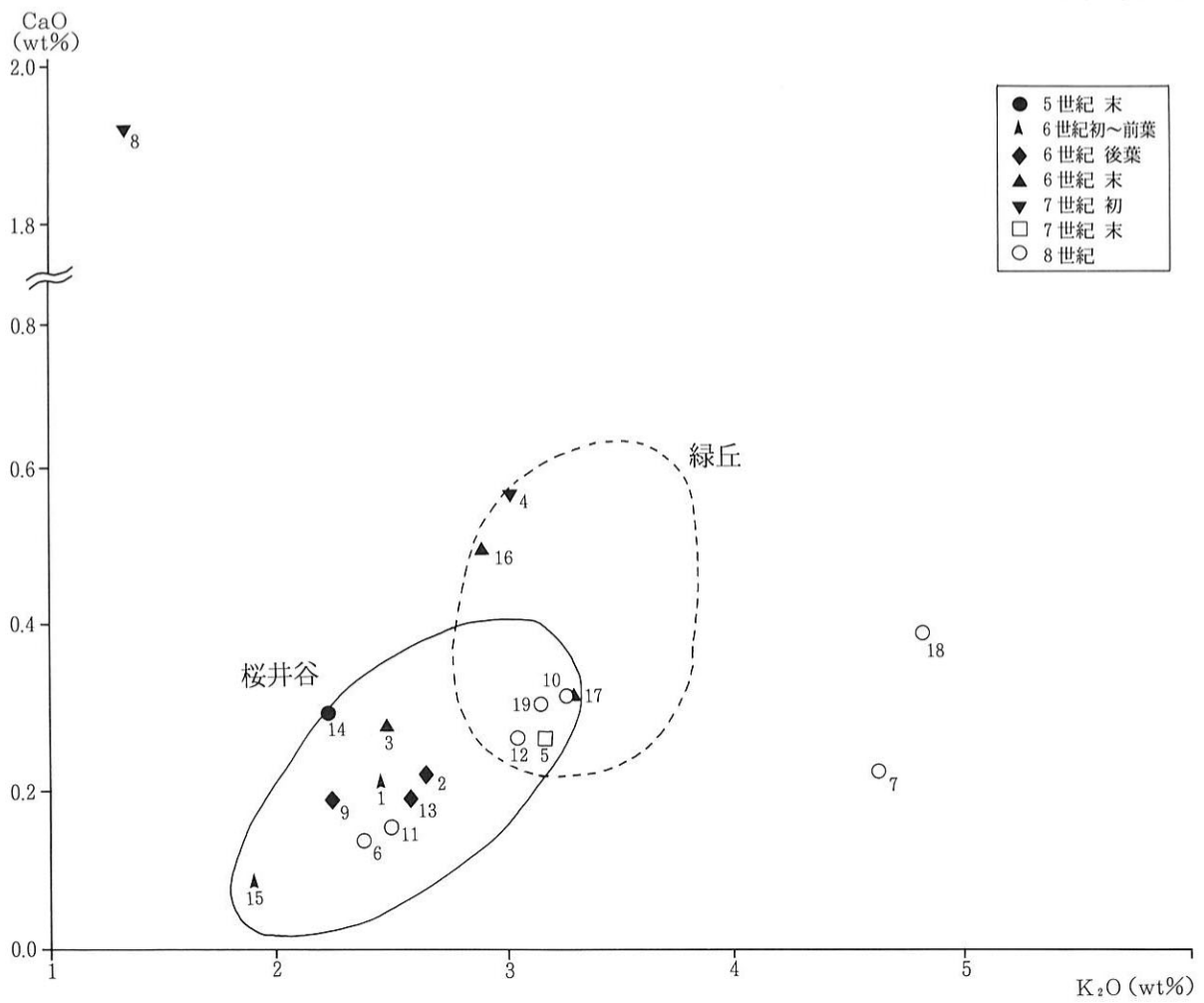
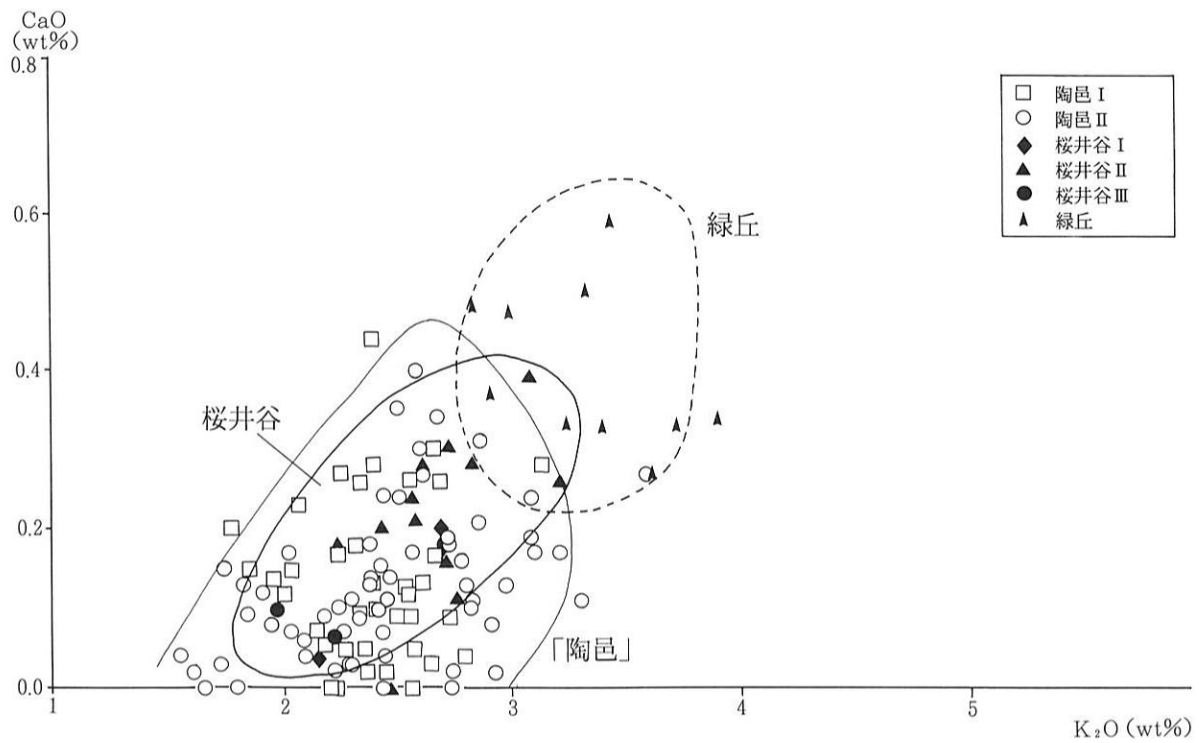
第25図 SiO<sub>2</sub>-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>図 (1)



第26図 SiO<sub>2</sub>-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> 図 (2)



第27図 Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-MgO図



第28図 K<sub>2</sub>O-CaO図

### (3) X線回折試験結果

#### タイプ分類

第9表胎土性状表には住吉宮の前遺跡より出土した土器の分析結果が記載してある。第9表に示すように土器胎土はAとBの2タイプ検出された。

Aタイプ：Hbの1成分を含み、Mont, Mica, Chの3成分に欠ける。

Bタイプ：Mont, Mica, Hb, Chの4成分に欠ける。焼成温度が高く鉱物は分解してガラスに変質している。

#### 石英 (Qt) - 斜長石 (Pl) の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を製作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器製作上の固有の技術であると考えられる。自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地の砂は各々固有の石英と斜長石比を有しているといえる。第24図 Qt-Pl 図には既分析の陶邑窯跡群 (5~6 C)、桜井谷窯跡群 (7 C)、緑丘窯跡とともに住吉宮の前遺跡出土土器が記載してある。

陶邑窯跡群：Qtの強度が100~3700、Plの強度が40~100の領域に集中する。

桜井谷窯跡群：Qtが700~4000、Plが70~130の領域に集中し、緑丘窯跡の土器と領域を同じくする。

住吉宮の前遺跡：桜井谷窯跡群の領域と共存する。

住吉宮の前遺跡の土器は陶邑窯跡群の土器とは明らかに異なる領域にあり、陶邑窯跡群ではないと推察される。

住吉-5と8はPlの強度が高く、焼成温度が低く、異質である。住吉-11はQtの強度が高く、異質である。住吉-14はQtの強度が低く、異質である。

### (4) 化学分析結果

第10表化学分析表には住吉宮の前遺跡出土土器が記載してある。分析結果に基づいて第25・26図  $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$  図、第27図  $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-MgO}$  図、第28図  $\text{K}_2\text{O-CaO}$  図を作成した。第25図~第28図には既分析の陶邑窯跡群 (5~6 C)、桜井谷窯跡群 (7 C)、緑丘窯跡の土器とともに住吉宮の前遺跡出土土器が記載してある。ここでは陶邑窯跡群の土器と住吉宮の前遺跡の土器は Qt-Pl 相関で関連性がないと結論されたので、桜井谷窯跡群と緑ヶ丘窯跡の土器と住吉宮の前遺跡の土器を対比し、検討する。

#### $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ の相関について

第25・26図  $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$  図に示すように、桜井谷窯跡群の I と II タイプ、緑丘窯跡の土器は  $\text{SiO}_2$  が 63~72%、 $\text{Al}_2\text{O}_3$  が 18~25% の領域で共存する。桜井谷窯跡群 III は  $\text{SiO}_2$  が 72~74%、 $\text{Al}_2\text{O}_3$  が 17~20% の領域にある。住吉宮の前遺跡の土器のうち  $\text{SiO}_2$  が 57~64%、 $\text{Al}_2\text{O}_3$  が 21~24% の領域に集中する  $\text{SiO}_2$  が低領域タイプ、桜井谷窯跡群と緑丘窯跡の領域で共存するタイプ、桜井谷窯跡群 III と共存するタイプ、これらのいずれにも属さないタイプに分類される。

#### $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-MgO}$ の相関について

第27図  $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-MgO}$  図に示すように、桜井谷窯跡群の土器は  $\text{Fe}_2\text{O}_3$  が 3.0~9.0%、 $\text{MgO}$  が 0~0.7% の領域に集中し、緑丘窯跡の土器は  $\text{Fe}_2\text{O}_3$  が 3.0~7.0%、 $\text{MgO}$  が 0.4~0.8% の領域に集中し、領域が異なる。住吉宮の前遺跡の土器は桜井谷窯跡群の領域に近い。住吉-3、6、11、14の4個は  $\text{Fe}_2\text{O}_3$



が9～13%の領域にあり、明らかに領域を異にする。住吉-8は $\text{Fe}_2\text{O}_3$ と $\text{MgO}$ の値がともに高く、異質である。住吉-16は緑丘窯跡の領域よりは $\text{MgO}$ の値がいくぶん高い。

#### $\text{K}_2\text{O}$ - $\text{CaO}$ の相関について

第28図 $\text{K}_2\text{O}$ - $\text{CaO}$ 図に示すように、桜井谷窯跡群の土器は $\text{K}_2\text{O}$ が1.8～3.5%、 $\text{CaO}$ が0～0.4%の領域に集中し、緑丘窯跡の土器は $\text{K}_2\text{O}$ が2.5～4.5%、 $\text{CaO}$ が0.2～0.6%の領域に集中し、領域が異なる。住吉宮の前遺跡の土器はその多くが桜井谷窯跡群の土器の領域にある。住吉-8は $\text{CaO}$ が1.8%と高く、異質である。住吉-7と18は $\text{K}_2\text{O}$ が4.5～5.0%と高く、異質である。住吉-16は緑丘窯跡の領域にある。

#### 岩石に付着する赤色顔料について

自然礫(図版10-148)に付着した赤色顔料は分析の結果、 $\text{Fe}_2\text{O}_3$ が73.17%、 $\text{Hg}$ が1.15%であり、鉄を主体とするもので、ベンガラである。

#### (6) まとめ

土器胎土の分析結果は第11表土器分類表に示すとおりである。

- 1) 桜井谷窯跡群の土器に対比されるもののうち、桜井谷：Iタイプは住吉-1、5、15で、5は焼成があまい。桜井谷：IIタイプは住吉-2、4、9、10、17、19の6個で最も多い。桜井谷：IIIタイプは住吉-13、15の2個である。
- 2) 緑丘窯跡の土器に対比されるものは住吉-16の1個だけである。
- 3)  $\text{SiO}_2$ の値が低い領域にあり、桜井谷窯跡群と緑丘窯跡の土器とは明らかに違うものとして、住吉-3、6、14があり、この3個は同じ組成をするもので、不明-1とした。住吉-7と11は類似するように見受けられるが定かではなく、不明-2とした。住吉-8と18はともに明らかに組成が特殊で、各々が異なる窯で製作されたものであろう。
- 4) 岩石に付着する赤色顔料は化学分析の結果、 $\text{Fe}_2\text{O}_3$ が73.17%と高く、ベンガラである。

注) 桜井谷窯跡群とした試料は、桜井谷2-17号窯(坊主山窯)灰原出土のものである。また、緑丘窯も地理的には桜井谷窯跡群内の一窯(桜井谷2-27号窯)であるが、前者をはじめとした桜井谷窯跡群の大半の窯が大阪層群上の窯であるのに対し、後者はその基盤層である神戸層群上に立地している。

## 第VI章 ま と め

### 第1節 住吉宮の前遺跡の時間的変遷

今回の調査では、古墳時代前期（庄内期～布留期）、古墳時代後期後葉～末、飛鳥時代末～奈良時代、平安時代後期の遺構を確認した（第29図）。以下では第IV章で述べた調査成果をもとにそれらの遺構の時間的変遷を述べていきたい。なお調査では他に縄文時代の石鏃、弥生時代中期、同後期、古墳時代中期、同後期前葉の土器などが出土しているが、各々の時期の明確な遺構は確認していない。

第I期 古墳時代前期前半（庄内期～布留期前半） 竪穴住居1基（竪穴住居44）と若干の土坑、ピットを確認しており、居住域であったことは明白である。遺構は調査区の中央、c3、4区付近に集中する傾向があるが、調査区西端で確認した土坑39を竪穴住居と想定するならば、集落の範囲が今回調査区の西側に続く可能性もある。調査区東半部については、古墳時代後期の溝7によって大半が削平されており、詳細は不明である。

第II期 古墳時代前期後半（布留期後半） 竪穴住居44の埋土掘削時に確認した土器棺45のみで、詳細は不明である。

第III期 古墳時代後期後葉（中村編年Ⅱ-4） 調査区中央の溝59のみで、詳細は不明である。

第IV期 古墳時代後期後葉～末（同Ⅱ-4～5） 溝7と小溝（溝10、80、81）を確認している。後者は溝7からの導水用の溝の可能性が高く、周辺、特に調査区より南方に水田が広がっていた可能性が高い。ただ溝7も第IV期のうちにその大半が埋まってしまったようである。

第V期 飛鳥時代末～奈良時代（同Ⅲ-3～Ⅳ） 数条の溝、十数個のピット、土器棺墓1基などを確認した。土器棺以外の遺構についてはその性格がよくわからないが、ピットについては柱穴の可能性があり、居住域であったのかもしれない。窪地状に残っていた溝7が埋まりきったのも第V期であり、井戸9もこの期の可能性が高い。なお出土須恵器は奈良時代初頭のものが多いようである。

第VI期 平安時代 南北に走る耕作跡を確認し、生産域であったことが窺える。

以上のように今回の調査では、弥生時代後期前半から平安時代まで断続的ながら人々の生活が営まれていたことが明らかになった。ただ古墳時代前期前半そして奈良時代は集落域、古墳時代後期後半～末、平安時代は生産域、さらに古墳時代前期後半には土器棺のみが確認されているなど、その土地利用のあり方についてはかなり変化が激しかったようである。

### 第2節 住吉宮の前遺跡出土の須恵器について

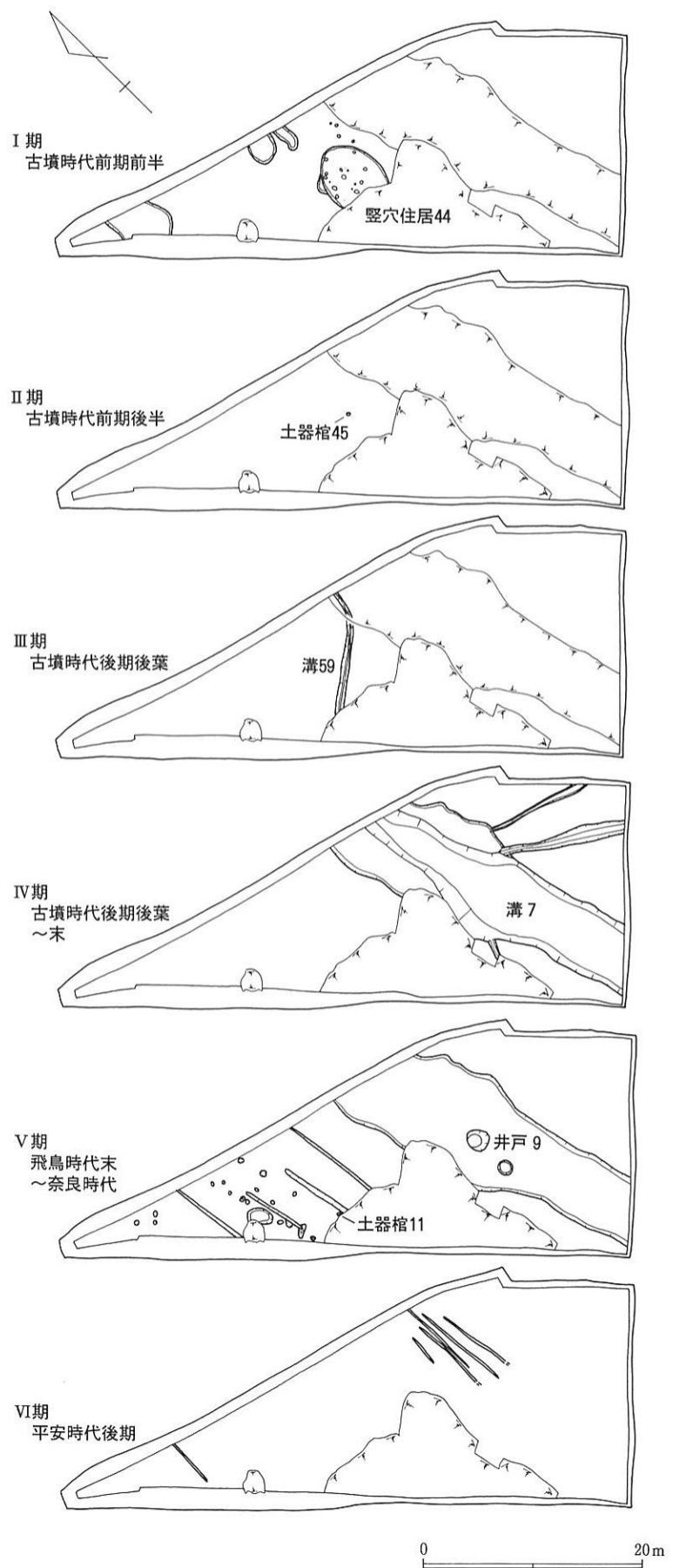
どこで焼かれたか（第30図） 今回報告書作成にあたり、（株）第四紀地質研究所に委託して須恵器試料19点の胎土分析をおこない、その焼成窯、具体的には桜井谷窯跡群、緑丘窯、「陶邑」窯跡群のいずれであるかを追究した。なお桜井谷窯跡群とした分析用試料は2-17号窯（坊主山窯）灰原出土の須恵器片を用いているが、位置的には2-27号窯（緑丘窯）も、桜井谷窯跡群中の一須恵器窯である。ただその地質学上の立地は前者を含む群内の大半の窯が大阪層群上に、後者がより古い神戸層群上にあるという対照をなしており、おそらくそのことが原因となって、胎土分析においても両窯で焼成された須

恵器は比較的明瞭に峻別しえることが明らかになっている<sup>1)</sup>。したがって本稿では2-17号窯、2-27号窯の各試料と分析結果が整合性を有するという意味において各々桜井谷産、緑丘窯産と呼称するが、それはあくまで便宜的なものである。

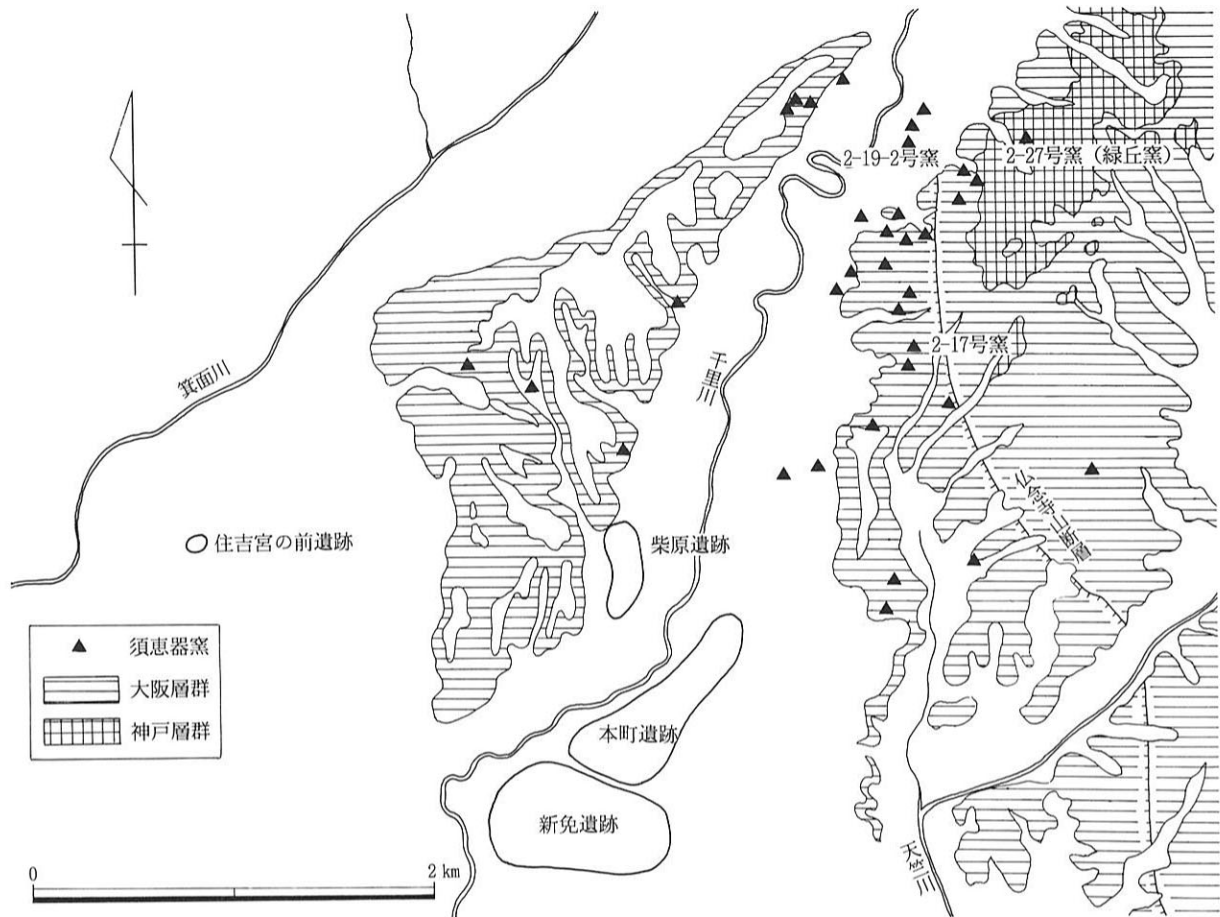
分析結果の詳細については第V章に記したように、今回の試料19点は桜井谷産11点、緑丘窯産1点、不明7点と判定され、「陶邑」産は確認されなかった。桜井谷窯跡群の製品が多いのはその距離的な近さからみて当然であろう。その時期も6~8世紀に及ぶ。ただ産地不明も全体の1/3(計7点)に達しており、住吉宮の前遺跡への須恵器供給が決して一元的なものでなかった可能性もあり、興味深い。

7世紀末~8世紀(中村編年Ⅲ-3~Ⅳ)に限ると、桜井谷産4、不明4点の結果を得ており、桜井谷2-27号窯以外の桜井谷窯跡群の窯から住吉宮の前遺跡に製品が供給されていたことが明らかになった。当時の須恵器窯としては豊嶋郡内では桜井谷窯跡群の2-27号窯(緑丘窯)と2-19-2号窯<sup>6)</sup>(いずれも住吉宮の前遺跡の北東約4km)が知られるのみであり、両窯はその間の距離も500mと比較的近接している。したがって7世紀末~8世紀の桜井谷における須恵器生産地、ひいては上記桜井谷産試料の焼成窯も、両窯の存在する桜井谷窯跡群北端部に自ずと限られてこよう。ただし2-27号窯は先述したようにその立地は神戸層群上で、2-19-2号窯は段丘堆積層上である。

一方今回の分析で緑丘窯産とされた



第29図 遺構変遷図



第30図 桜井谷窯跡群

試料が現在同窯で確認されていない6世紀末(中村編年Ⅱ-4~5)のものであることは、神戸層群上の6世紀の窯から本遺跡が須恵器の供給を受けていたことを示唆している。ただ先に述べたように神戸層群上で確認されている窯は現状では2-27号窯(緑丘窯)だけである。未知の窯が存在するのだろうか。

今後消費地、あるいは中継地の試料の分析を進めることは当然であるが、生産地不明の試料が多いことから窺えるように、周辺諸窯試料のバックデータの充実が特に望まれるところである。

どのように運ばれてきたのか 還元焼成が十分でない、所謂「生焼け」のものが今回出土した須恵器破片総数のほぼ1割を占めている(第3表)。この比率は、溝7の各層ごと、あるいは3層出土須恵器で算出しても大差が認められないことから、住吉宮の前遺跡の6~8世紀を通じての傾向と考えられよう。ただ焼け歪みの認められるものや、窯体の付着したものは確認されていない。

ところで住吉宮の前遺跡の南東2km、千里川左岸の豊中台地上に位置する新免遺跡では、5世紀末~6世紀初頭(中村編年Ⅰ-5~Ⅱ-1)の焼け歪み、「生焼け」の認められる須恵器不良品が大量に出土しており、それらが全個体数に占める比率も約4割に達する。ただ窯体の付着したもの、あるいは全く使用に耐えないまでに焼け歪んだ個体はほとんど認められないようである<sup>4)</sup>。

不良品の比率が高く、「生焼け」、焼け歪みの両者が認められる新免遺跡を従来から指摘されているように桜井谷窯跡群で焼かれた須恵器の選別、搬出入に関わる遺跡とみるならば、不良品の比率が低く、特に焼け歪みが全く認められない住吉宮の前遺跡は、須恵器の生産、搬出入に直接関わることのなかった当時の一般的な集落の状況を示していると考えられよう。

以上の遺跡の状況をやや模式的にまとめるならば、1) 窯跡、2) 窯体の付着した個体、あるいは極端に焼け歪んだ個体が多く出土する遺跡、3) 軽度の焼け歪みと「生焼け」の須恵器が多く出土する遺跡、4) 完成品と少量の「生焼け」の須恵器が出土する遺跡に大別でき、須恵器は1) の生産地で焼かれ、2)、3) の遺跡で選別された後、4) の最終的な消費地に至ったと想定される。ただ2) は、窯の前面に広がる灰原から出土した不良品をみてもわかるように1) と空間的に峻別されるものではないだろう。新免遺跡と住吉宮の前遺跡が各々、3)、4) に属するのはいうまでもなく、6世紀前葉(中村編年Ⅱ-2頃)の須恵器不良品が大量に出土している柴原遺跡も3) の一例と考えられる<sup>5)</sup>。

ただここで注意すべきことは、3) の諸遺跡が現状では桜井谷窯跡群の最盛期とほぼ重なる5世紀末から6世紀前葉のものに限られることである。したがって住吉宮の前遺跡出土の桜井谷産の須恵器がすべて先に想定した体制下で供給されたと断定することはできない。むしろ桜井谷窯跡群が衰退に向う6世紀中葉以降は、この体制自体も崩壊に向ったと考えるのが自然であろう。

- 注1) 井上巖「蛸池東・蛸池遺跡出土土器胎土分析」『宮の前遺跡・蛸池東遺跡・蛸池遺跡・蛸池西遺跡1992・1993年度発掘調査報告書』1994 大阪文化財センター、同「蛸池南地区他出土土器胎土分析」『宮の前遺跡・蛸池東遺跡・麻田藩陣屋跡・蛸池遺跡・蛸池南地区・蛸池西遺跡 1993-1996年度発掘調査報告書』1997 大阪文化財センター
- 2) 『桜井谷窯跡群2-17号窯』1982 少路窯跡遺跡調査会
- 3) 『緑丘窯跡-緑丘団地建設に伴う遺跡確認調査-』1984 緑丘団地遺跡調査団
- 6) 『桜井谷窯跡群2-19号窯・2-24号窯跡』1977 桜井谷窯跡群発掘調査団
- 4) 山元建「須恵器生産の始まりと集落」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』3 1995 (財)大阪府埋蔵文化財協会
- 5) 『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1984年度』1985 豊中市教育委員会

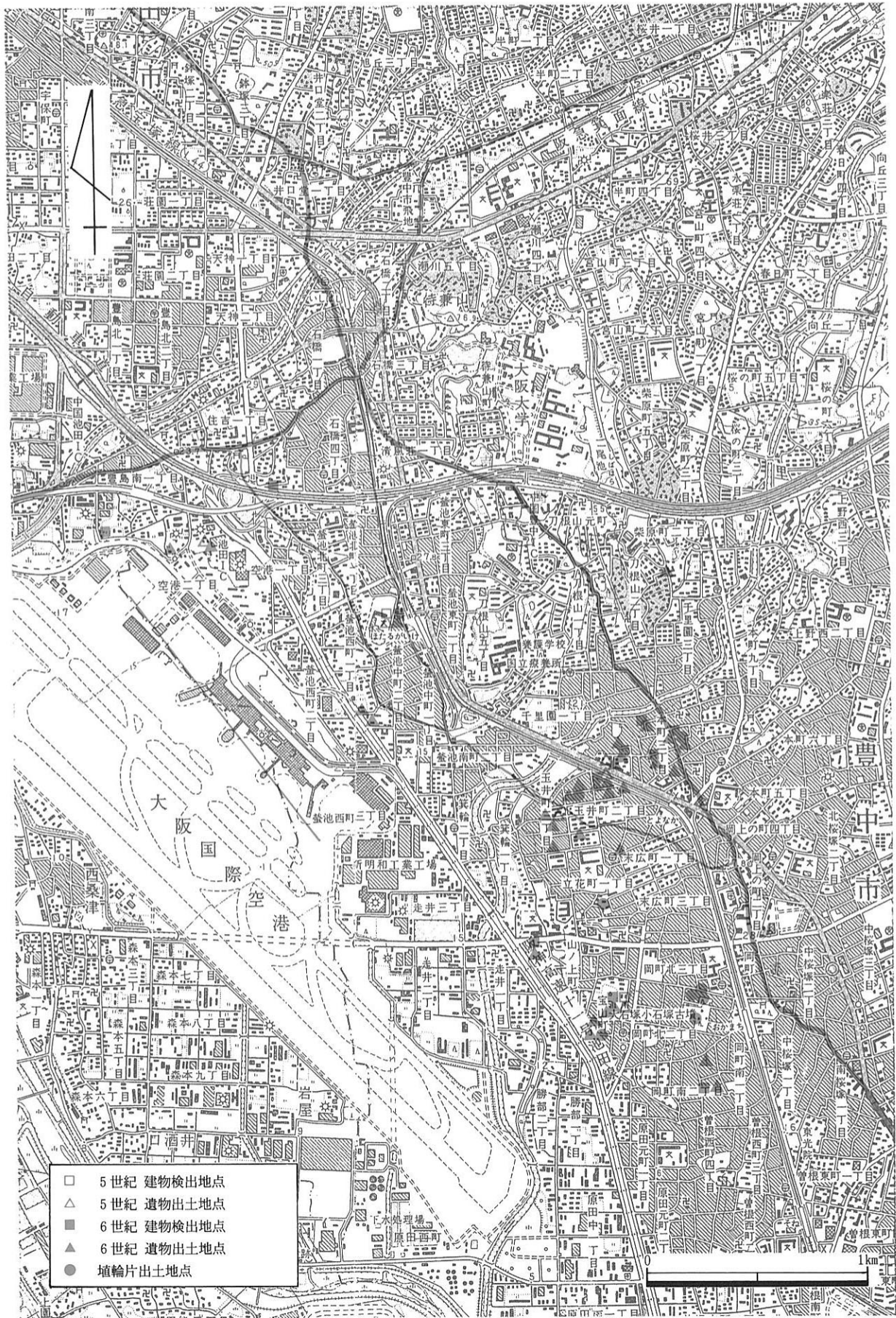
### 第3節 奈良時代における千里丘陵西端部の集落分布について

今回、住吉宮の前遺跡の調査では、奈良時代の遺構として井戸を検出し、また、調査区内より多くの当該期の遺物が出土した。これらはこの近くに集落が存在することを窺わせるものである。ここではそれに関連して、先述の周辺の既往調査も踏まえ、豊嶋郡域の千里丘陵西端部において奈良時代の集落分布について気づいたことなど二三列挙してみたいと思う。豊嶋郡の千里丘陵西端部周辺に広がる郷は、豊嶋郡衙が置かれたとされる豊嶋郷をはじめ秦下・駅家・桑津・余戸の各郷である(第3図参照)。

第31図は古墳時代(5~6世紀)、第32図は飛鳥~奈良時代(7~8世紀)の豊嶋郡域の千里丘陵西端部にある遺跡から出土した当該期遺構・遺物の分布図<sup>1)</sup>であり、集落分布を示す。実線は古道である<sup>2)</sup>。

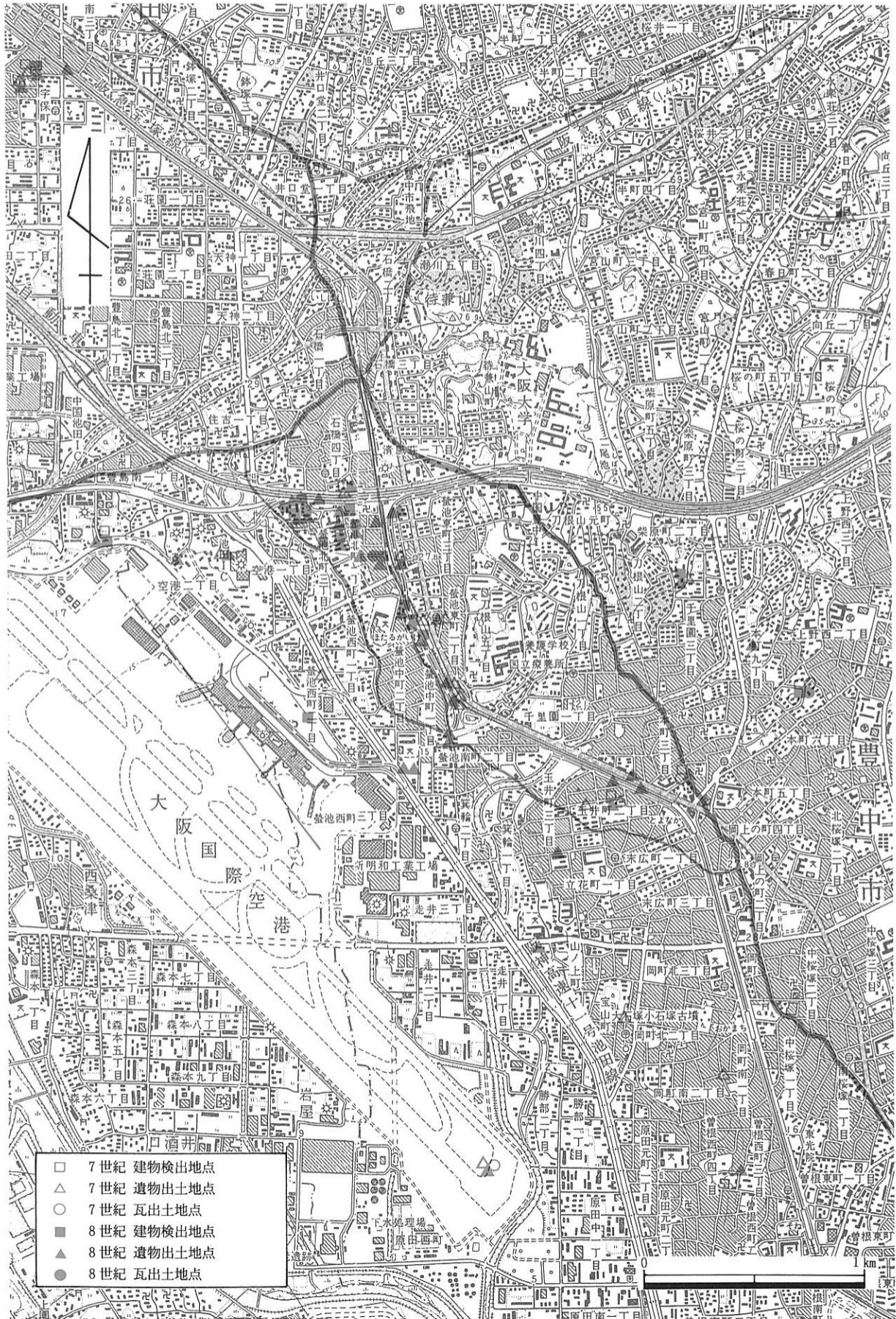
まず、分布図をみると6世紀と8世紀のものが多くみられる。古墳時代は、豊中台地北西端部の新免遺跡・本町遺跡に集中し、その北西の蛸池東遺跡、宮の前(蛸池北)遺跡(以下宮の前遺跡とする)、住吉宮の前遺跡、豊島南遺跡にそれぞれ小規模ながらまとまって分布する。それに対して奈良時代において状況は一転する。奈良時代は豊嶋郷に所在すると思われる蛸池東遺跡、宮の前遺跡、住吉宮の前遺跡、豊島南遺跡に集中し、特に宮の前遺跡においては多くの建物や遺物が出土する。奈良時代になるとあれほど集中していた新免遺跡・本町遺跡(余戸郷域にあったと考えられる)にはあまりみられない。





第31図 遺構・遺物分布図(1)





第32図 遺構・遺物分布図(2)

また禅城寺遺跡周辺（現池田駅近く）には秦下郷に属するであろう集落が形成される。つまり、古墳時代の集落分布と奈良時代のそれとは明らかに様相が異なるのである。この違いはどこからくるのだろうか。

分布図における新免遺跡・本町遺跡の集落は、5世紀に少しみられ6世紀に激増するものの、7世紀にはかなり減少する。その山の手には桜井谷窯跡群が存在し、その操業は5世紀末に始まり6世紀前葉にピークをむかえ、7世紀前半には衰退する。これは分布図に見られる集落の推移にも呼応する。つまり、古墳時代、千里川中流に展開する桜井谷窯跡群の下流に立地する新免遺跡・本町遺跡にいた人々は、集落内より「生焼け」や焼け歪みの須恵器が多量に出土していることから、須恵器の生産・選別・流通に関わっていた集団であるといえ、その集落の繁栄も須恵器生産に規制されたものであった。

ところが、第32図の豊嶋郷域と思われる部分の分布をながめるとあることに気づく。南北に走る吉野嶺道（能勢道）は余部郷の旧新免村（現豊中駅近く）のところで分岐する。本道はそのまま刀根山に入り、北北西にやまますぐ北上する。もう一方は西進し、千里丘陵の山麓の台地上に降り、旧麻田村（現蛍池駅付近）よりさらに分岐する。一つは山裾を通過して山陽道・吉野嶺道の合流する旧石橋村（現石橋駅付近）へむかって北上、吉野嶺道に戻る道、もう一つは台地上の縁辺部を北上し旧宮ノ前村（現池田I.C.東付近）に抜け、山陽道に合流する道である。奈良時代の集落分布はこの2道の間で集中的に広がるのである。つまり、奈良時代の集落の分布状況がこの2道に沿って広がっているということは、その道が古代まで遡る可能性がある。これらのことから以下のことが考えられる。

①2道はもともと集落道であったのが、計画道として引かれた吉野嶺道の傾斜のきつい刀根山を回避するのに利用され、その道沿いに集落が発展した。そうだとすればこの部分に限らず、千里丘陵の山裾を走る間道が旧麻田村以南に延びていた可能性もある。

②道の合流点、交通の要所としての重要性から集落が集中した。台地上にあり、すぐ西方には標高差10mの段丘崖がひかえ見通しはよい。なお、吉野嶺道と山陽道合流点の旧石橋村付近には奈良時代の集落がみられないのは、多少の高台とはいえ箕面川の氾濫原であったからである<sup>3)</sup>。

③豊嶋郡豊嶋郷に属すること及び②から、かつてより豊嶋郡衙の可能性が示唆されてきた。周囲に郡寺が発見されていないものの、「寺」〔寿カ〕と記した墨書土器片、緑釉陶器片や硯片が少ないながら出土している。建物配置などにはさほど厳格性はみられないが、豪族居宅型の郡衙施設<sup>4)</sup>もありうるから、宮之前遺跡調査会の調査<sup>5)</sup>や蛍池北遺跡9次調査<sup>6)</sup>などにみられる建物遺構は注目に値する点ではあろう。このようなことから、宮の前周辺の建物分布状況から郡衙とするには論拠が弱く、積極的評価はできないが<sup>7)</sup>、郡衙に関わる周辺施設か官人クラスの集落の可能性は高いと思われる。

以上、分布図より主に奈良時代を中心に千里丘陵西端部の集落についてまとめてみたが、調査事例の粗密からやや豊嶋郷及び余戸郷域に偏ったものとなってしまった。上記のことは現状では可能性を示唆しうるにとどまる。今後の周辺域の調査が大いに期待される。

注1) 当センター普及資料課蔵書の報告書及び、本書「住吉宮の前遺跡周辺の既往調査」使用文献資料等より作成した。遺構は建物と井戸に限り、遺物は破片1点でも出土すれば印をつけている。ただし、現状では調査によって差があるため、古代集落の実態全てを示すものではない。

2) 『歴史の道調査報告書第6集 西国・丹波街道』 1990 大阪府教育委員会、足利健亮『日本古代地理研究』 1985 大明堂 両書より抜粋、一部1885年の大日本帝国陸地測量部作成地図をもとに加筆した。また、古墳時代に官道は造られてい

ないが分かりやすくするために加えた。道に関しては両書を参照した。

- 3) 石橋周辺の遺跡状況については池田市教育委員会田上雅則氏のご教示による。
- 4) 山中敏史・佐藤興治『古代日本を発掘する―5 古代の役所』 1985 岩波書店 郡衙に関しては本書によるところが大きい。
- 5) 『宮之前遺跡発掘調査概報』 1970 宮之前遺跡調査会
- 6) 現地説明会資料によると、奈良時代の遺構としては2間×2間の掘立柱建物及びそれに並行する柵列をL字状に検出している。
- 7) 同様なことは茨木市の総持寺北遺跡〔当センターによる調査で『総持寺遺跡』(1998)として報告されているが、『大阪府埋蔵文化財包蔵地図』では総持寺北遺跡として現状では認識されている。〕でもいえる。総持寺北遺跡では「周防」と書かれた墨書土器、石製巡方、硯、緑釉陶器などが出土し、飛鳥時代～平安時代までの整然とした掘立柱建物群を多数検出している。しかしながら、官衙的性質を積極的に評価していない。

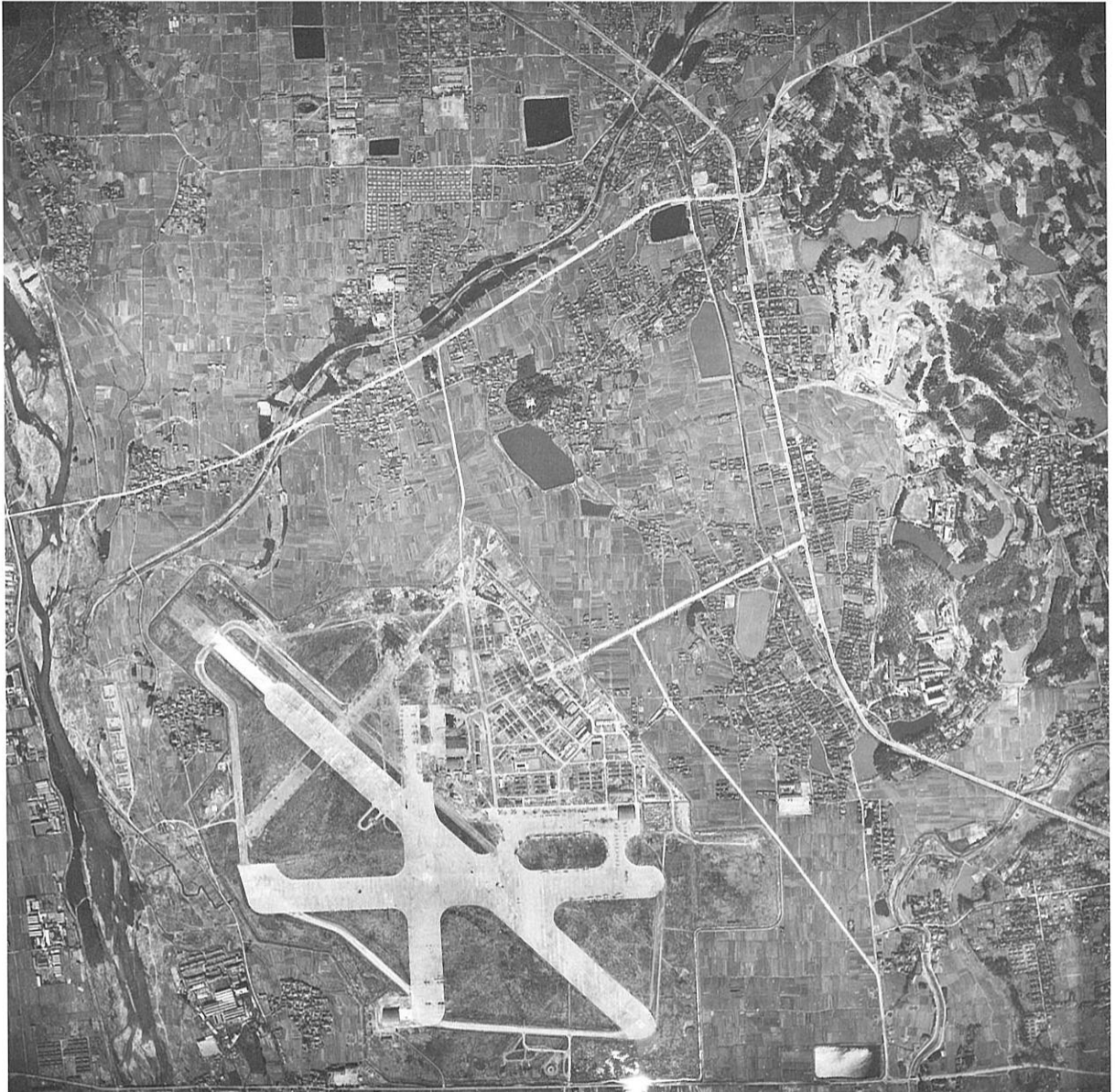


# 図 版









この空中写真は、建設省国土地理院長の承認を得て米軍撮影の空中写真を複製したものである。  
承認番号 平12近複 第263号  
(1948年3月19日撮影 約1:22,000 上が北)





(1) 上面検出遺構 (東より)



(2) 中・下面検出遺構 (東より)

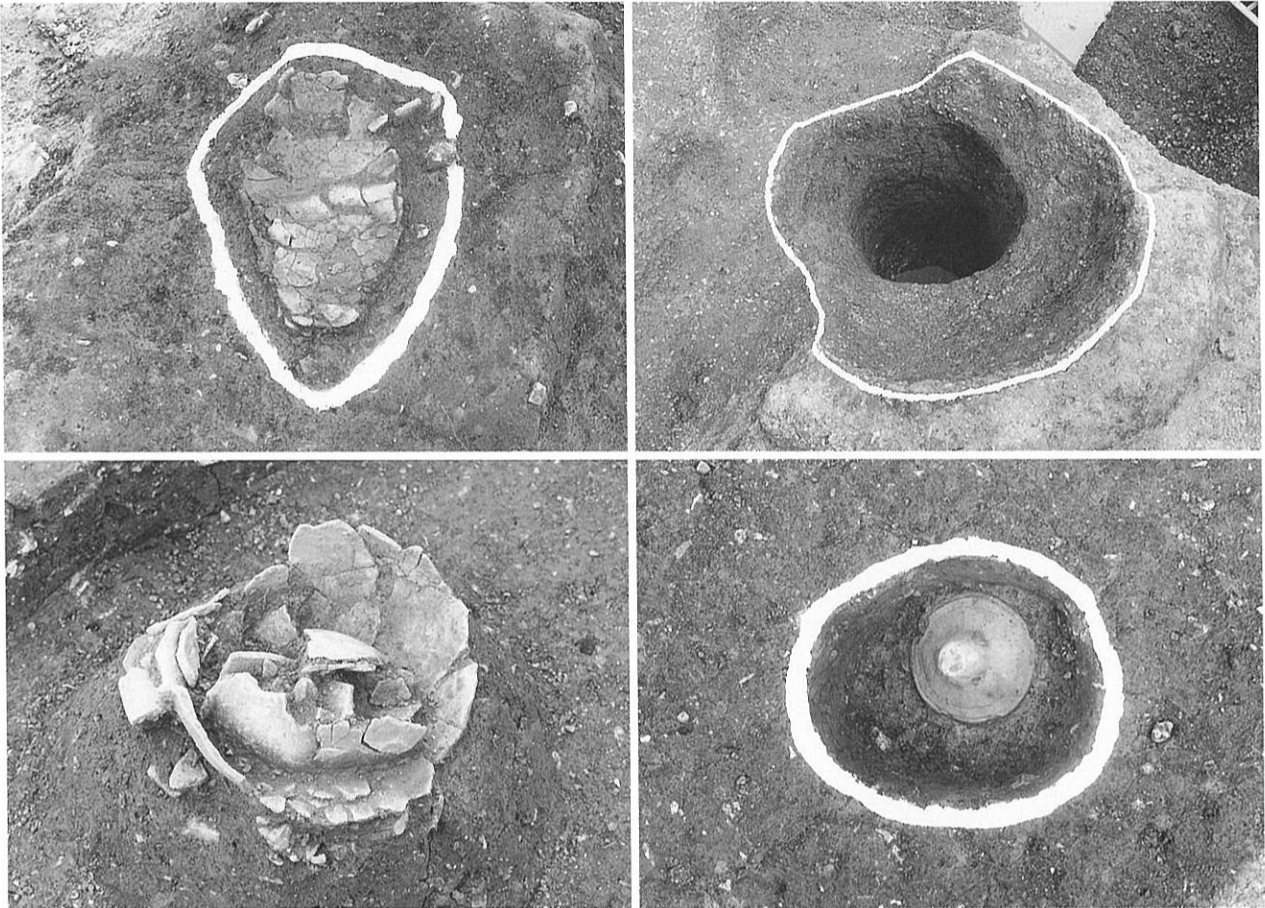




(1) 溝7全景(南より)



(2) 溝7断面(南より)

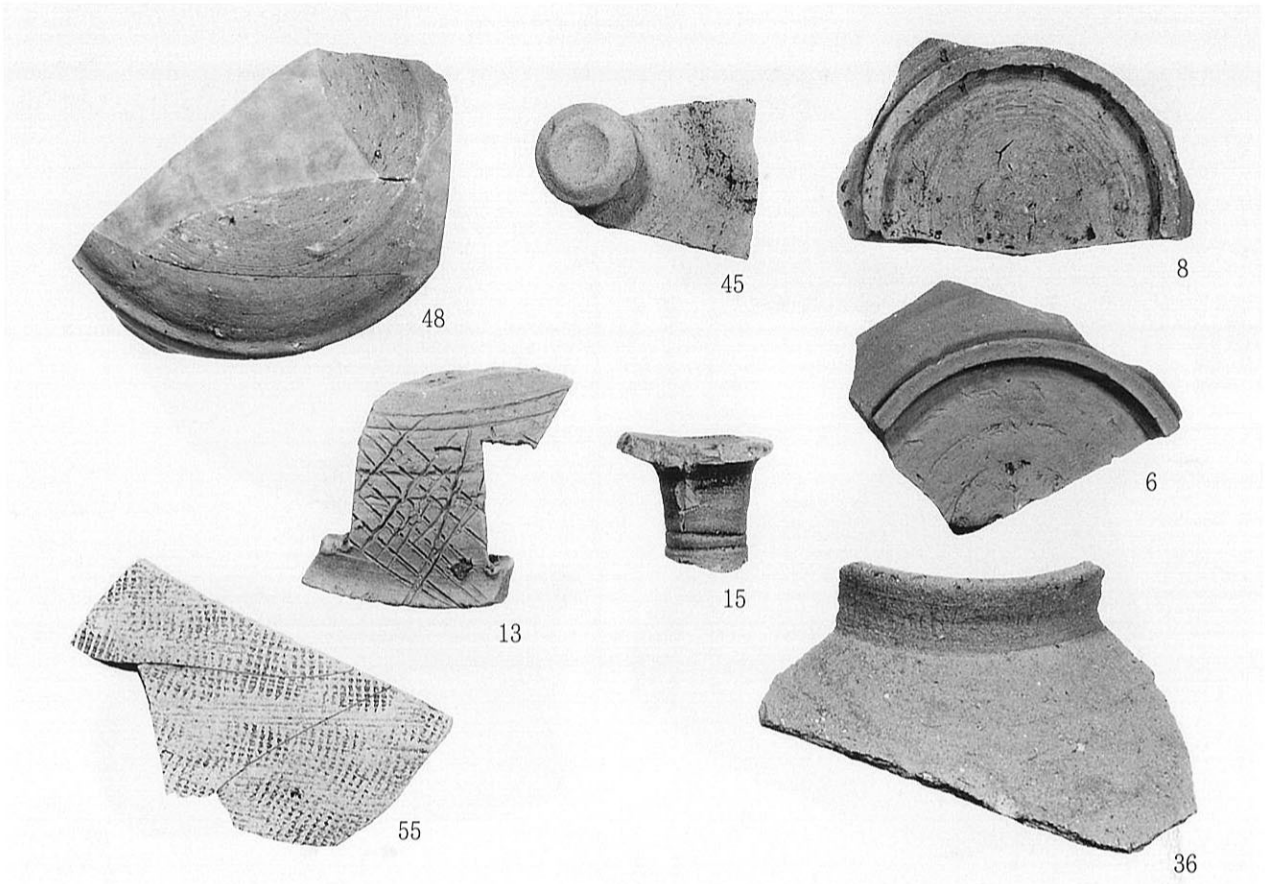


(1) 左上；土器棺11、左下；土器棺45、右上；井戸9、右下；ピット36

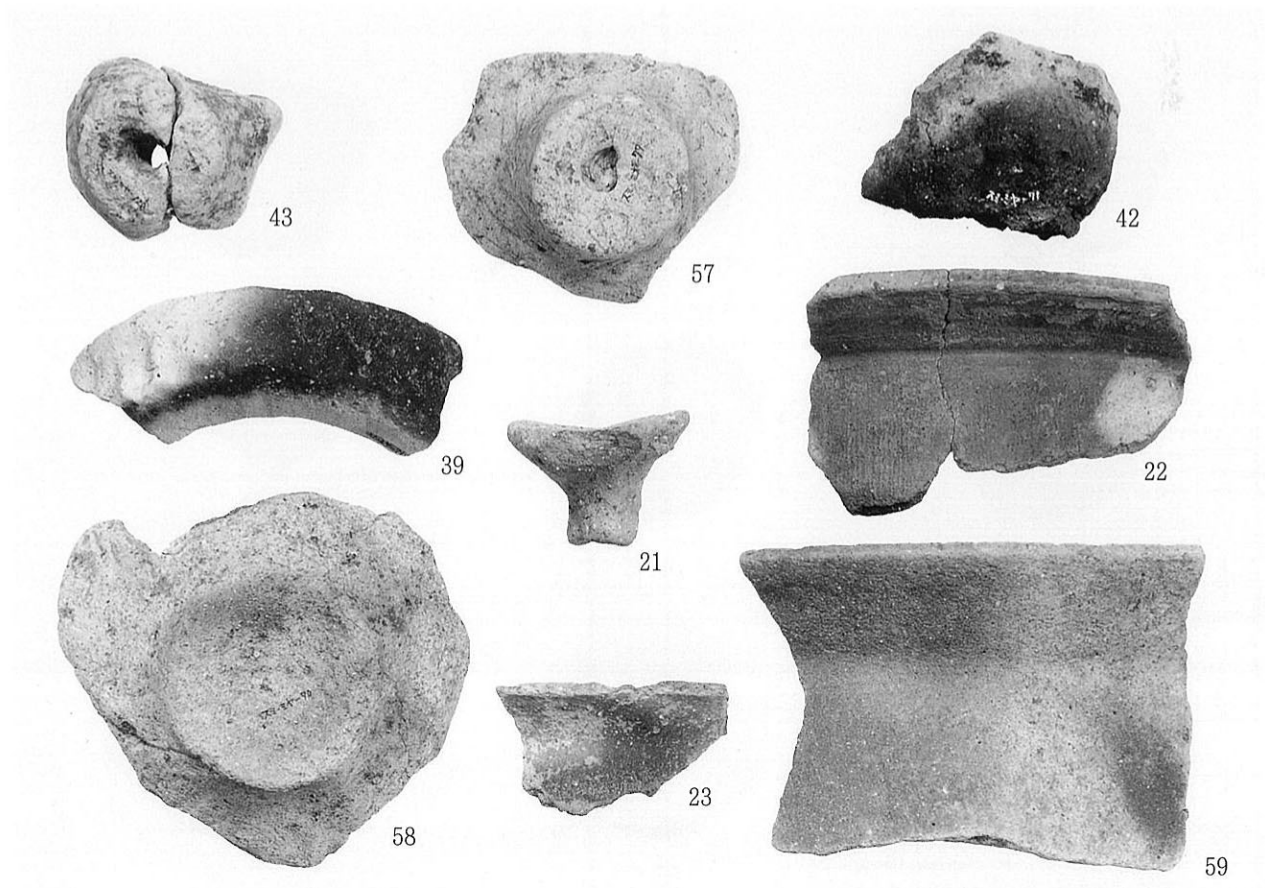


(2) 竪穴住居44全景(北西より)

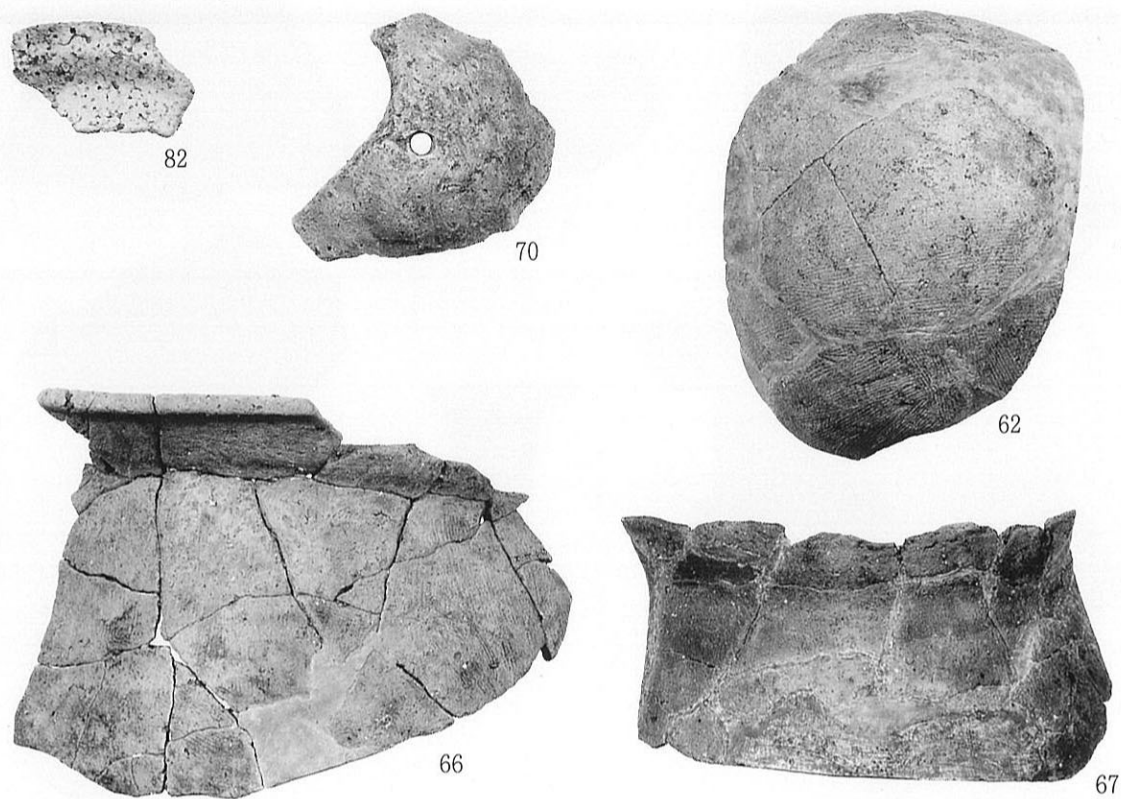




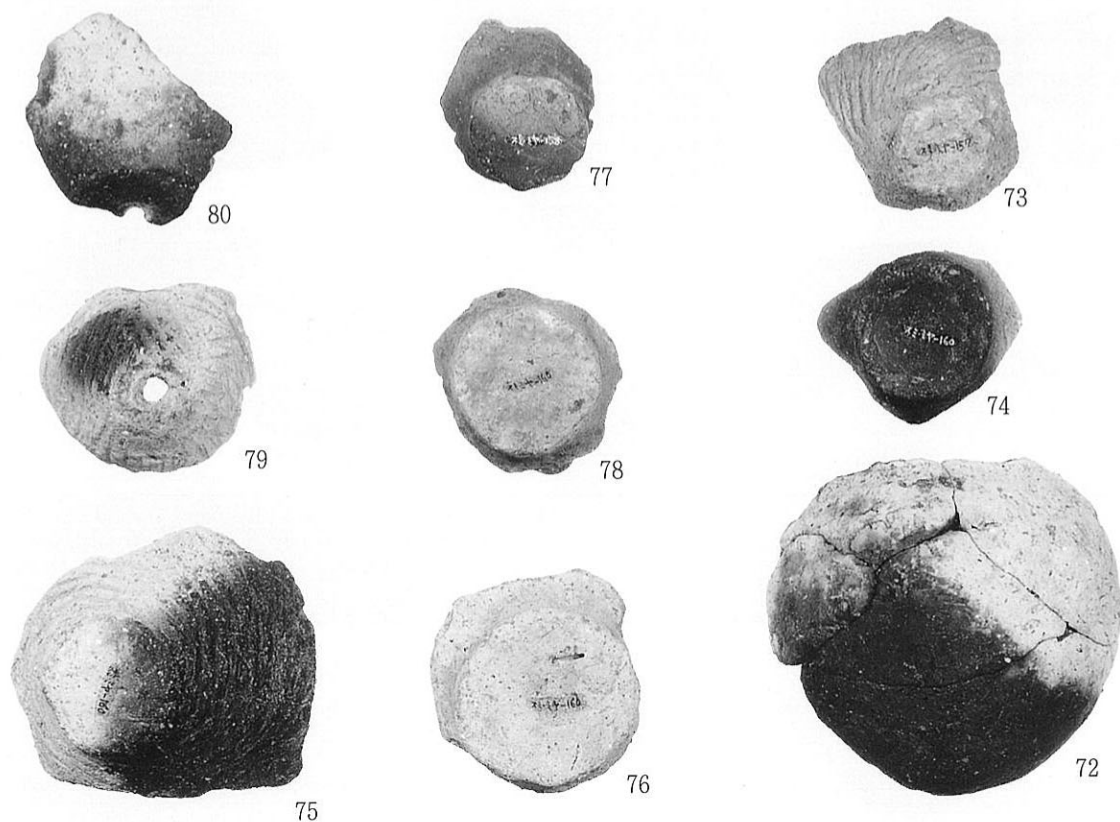
(1) 溝 7 出土須恵器



(2) 溝 7 出土弥生土器・土師器

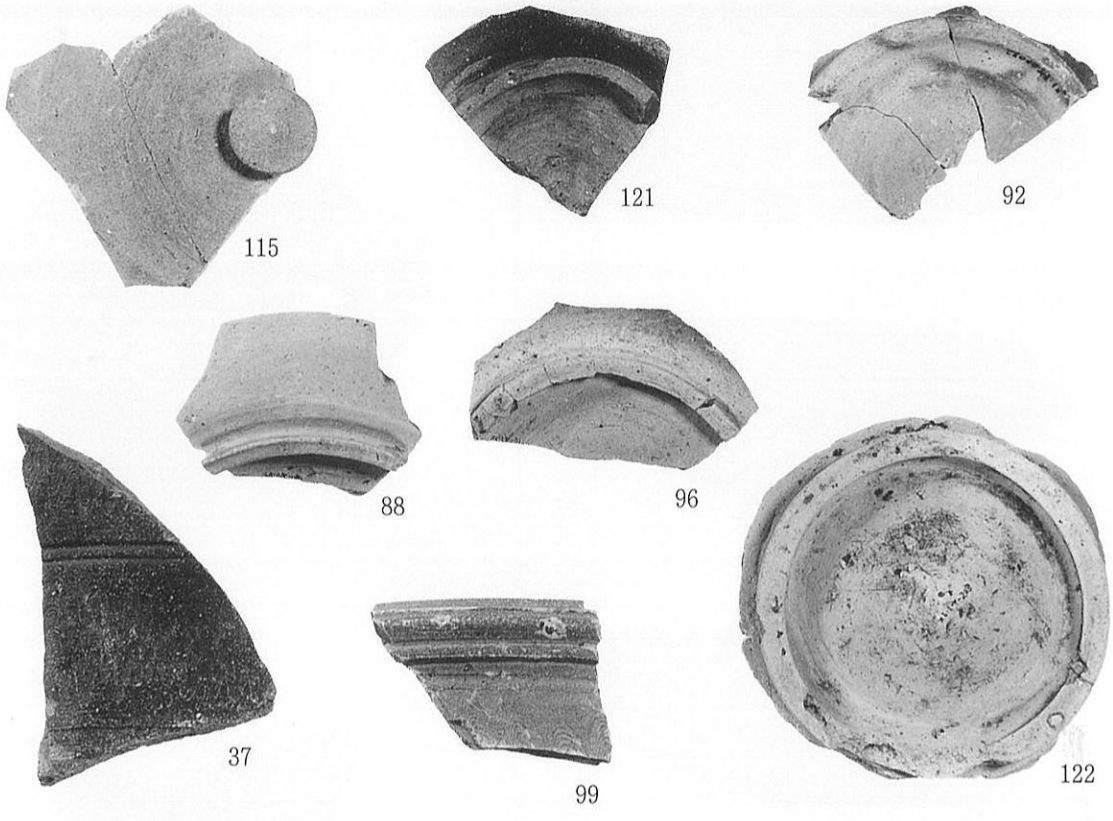


(1) 土器棺11、溝80、土坑24・34出土土器

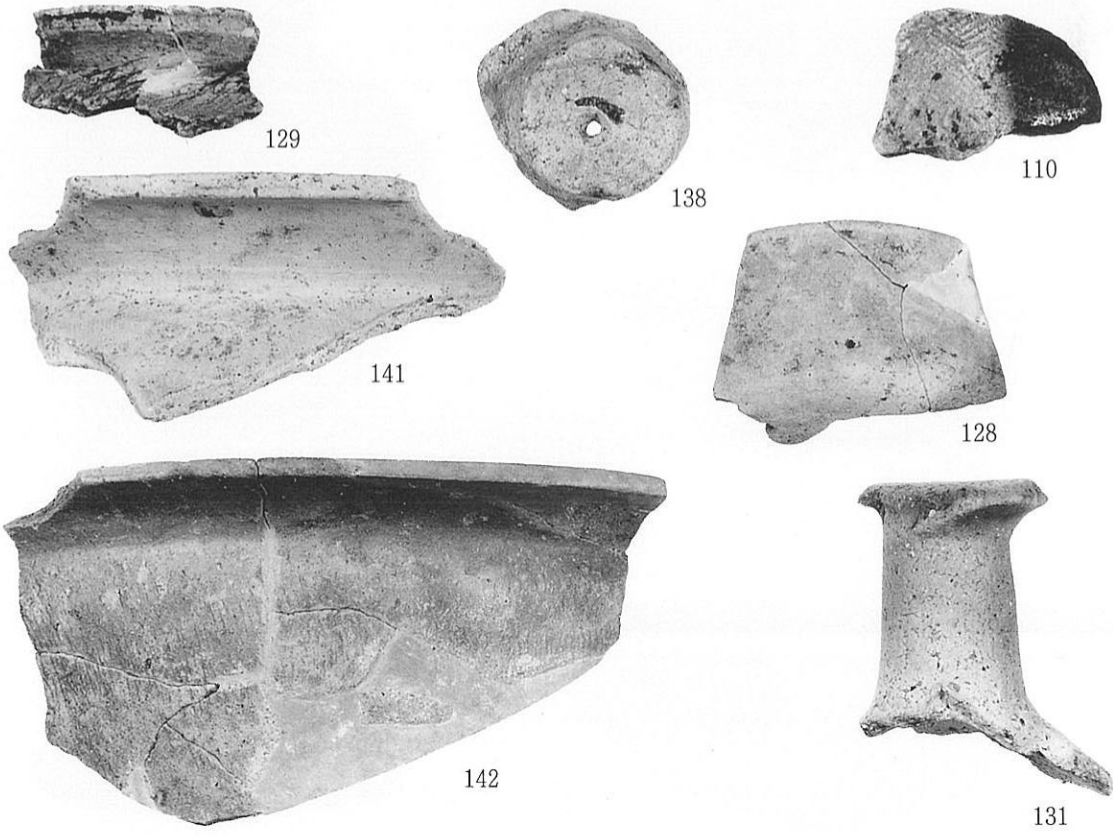


(2) 竪穴住居44出土土器





(1) 第3層出土須恵器



(2) 第3層出土弥生土器・土師器



49



38



33



125



53



9



54



71



81

溝7、竪穴住居44、ピット36、第3層出土土器



(1) 井戸9出土土器



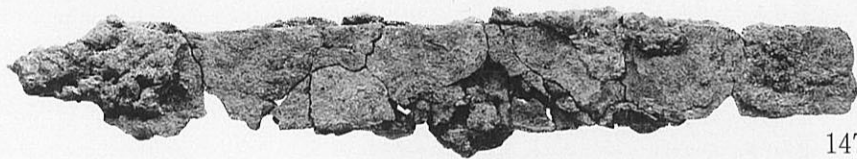
(2) 溝7出土土器



(3) 土器棺45



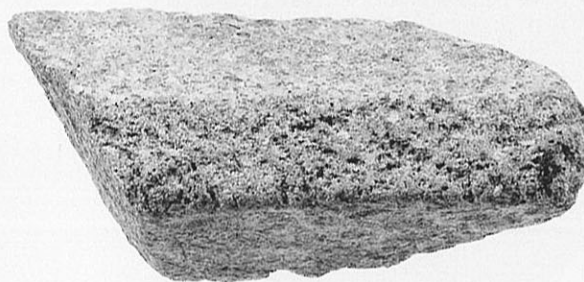
144



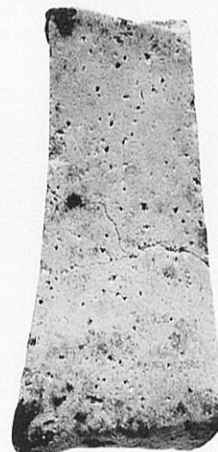
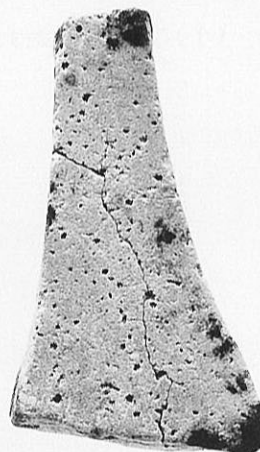
147



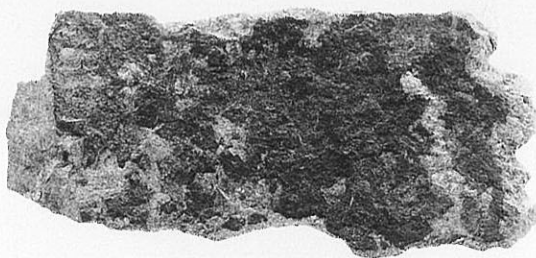
143



145



146



148



# 報告書抄録

ふりがな	すみよしみやのまえいせき							
書名	住吉宮の前遺跡							
副書名	大阪国際空港給水設備工事に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書							
シリーズ番号	第59集							
編著者名	阪田育功、駒井正明、山元 建、鈴木雅美							
編集期間	財団法人 大阪府文化財調査研究センター							
所在地	〒590-0105 堺市竹城台3丁21番4号 Tel 0722-99-8791 Fax 0722-99-8905							
発行年月日	西暦2001年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
すみよしみや 住吉宮の前 遺跡	おおさかふ 大阪府 いけだしくうこう 池田市空港 2丁目	27204	20	34° 47' 29"	135° 47' 42"	2000.4.17 ～ 7.31	646㎡	大阪国際 空港給水 設備工事 に伴う
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代		主 な 遺 構		主 な 遺 物		特記事項
住吉宮の前 遺跡	集落・墓  集落・墓  耕作域	縄文時代 弥生時代後期 古墳時代前期  古墳時代後期 飛鳥時代～奈良時代 平安時代		竪穴住居・ ピット  溝 井戸・溝・ ピット・土器棺  溝		石鏃 弥生土器 土師器  土師器・須恵器  瓦器		

(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第59集

## 住吉宮の前遺跡

—大阪国際空港給水設備工事に伴う発掘調査報告書—

発行年月日 2001年1月31日

編集・発行 財団法人 大阪府文化財調査研究センター  
〒590-0105 堺市竹城台3丁21番4号  
Tel 0722-99-8791 FAX 0722-99-8905

印刷・製本 明新印刷株式会社